
時空の果てへ

まめご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空の果てへ

【Zコード】

Z9397R

【作者名】

まめJ

【あらすじ】

「洞窟を抜けるとそこは異国でした」

リウヒはシシ大学に通う女子大生。夏休みに幼馴染のカスガ（古代オタク）とシギ（エロ河童）と共に富庭跡を訪れ、一千年前の古代にタイムスリップしてしまった。

その頃、王女リウヒは謀反にて富庭から逃げ出して、外の世界を旅することになる。

運命の万華鏡は、時空を超えて巡り廻る。。。輪廻転生、一人のリウヒの物語。

ティエンランシリーズ第三巻。一巻の「海原の彼方」を踏まえつつ、時間軸は一巻の「ティエンランの娘」を辿る形になります。TI
INAMIより転載作品、一部改稿。

序 章 小さな王女

洞窟を抜けるとそこは異国でした。眩いばかりの光の先に見えた風景に、少年たちは驚きました。

見たことのない建物や人々の衣装。

初めて嗅ぐ、不思議な香り。遠く広がる青い空。

おそるおそる少年たちは歩き出しました。

そして…。

「聞いているぞ」

リウビがうつらうつらしながら言つとトモキはクスリと笑つた。

「半分目が閉じていますよ。今日はここまでにしておきましょうね」

本を閉じて腰を上げた。

「続きはまた明日。おやすみなさい、リウビさん」

「うん、おやすみ。トモキ」

本当はその手で、髪をなでてほしいのだけど。昔、母さんがやつてくれたように唇を額に当ててほしいのだけど。体が恐怖で震えてしまうから、それは叶わない。トモキも知っているから、やつてくれない。

扉の閉まる音がして、静寂が訪れた。

掛布を手繰り寄せて抱きしめるように絡まる。

最近、トモキは寝る前に物語を聞かせてくれるようになった。

もうわたしは十四だ、子供じゃないと反発する気持ちもあるが、兄ちゃんのような人に甘えるのは心地の良いことだった。だから存分に甘えている。

今まで、獣のように神経をどがらせて、周りのどの人間にも心を開かなかつた。否、開けなかつた。

死にたいほど辛いことがあっても、彼らは助けてくれなかつたし、そんな人々に絶望と憎しみを抱いていたから。

トモキは違つた。最初入廷してきた時は、また、どうでもよい人間が一人増えたと思つただけだった。

ところが、この男は散々自分を追いかけまわし、どんどん小言を呈してきた。

王女だからといって怯える訳ではなく、王女だからこそきちんと教育を受けるべきだ、だから責任をもつて授業をうけると叱つた。驚いた。今までそう言う人はいなかつたから。仕方なさそうに笑つて見てみない振りをしていただけだつたから。

その人たちも辛かつたのだと今は理解している。三人娘は、ふとした時に礼を言うと、声を上げて泣き出した。トモキを連れてきてくれたシラギは、もつと早くこうすれば良かつたと痛々しい顔で言った。ただ傍観していただけのわたしを許してくれとも。

みな、リウヒに無関心だつた訳ではない。王の存在が大きすぎて、どうすれば良いか分からなかつたのだ。

光はどんどんと充ち溢れて行つた。わたしは今その中にいる。なんて、幸せなことだらう。

リウヒはクツクツと笑つた。そしてそのまま、眠りについた。小さな肩を上下させて。

イーストエンド大陸の南にティエンランという小さな国がある。三方を山、一方を海に囲まれた美しい豊かな国だ。

大陸側は二つの国に挟まれていたが、おおむね良好な関係を保つていた。万一、攻められる事があろうとも小高い山々が自然の城壁となつて防いでくれる。

一方の海側は、貿易が盛んに行われ港が賑わつていた。が、防衛面は弱くしばしば海賊が出没した。

その海を左手に見下ろす山の中腹に、この国の宫廷がある。山地の形状を生かし傾斜になだらかに造つよう建造されていた。平地から小高い場所に位置する宫廷は、霧の発生する季節になると

まるで雲の中に浮かんでいるように見え、民たちは親しみと誇らしさをこめて「天の宮」と呼んだ。周りは堀で囲まれており、表玄関となる大門はその巨大さで見る者を圧倒する。

宫廷の山裾には、整備された城下町が円形状に広がる。中央の大通りを挟んで四区ずつ、計八区に分けられ、民が住む住宅街、市場、商店街、色町、学問機関がある。

大通りは市街の中心をまっすぐ抜け、宫廷の大門と都の表門を一直線に結んでいた。その両脇を柳の木が行儀よく並べられている。地面はすべて石畳で整備されており、城下と宫廷を守るように白い堀に囲まれていた。

都を離れると、平地が広がり所々に村や町がぽつりぽつりと存在する。平地には町が多く、村は山地や海沿いにあった。

深夜。人々も、家畜も、犬も猫も、草木も眠りについている。

風すら、寝入ったように止まっていた。

宫廷の東宮でも小さな王女、リウヒが物語の続きを夢見ながら寝息を立てていた。

「リウヒー！」

その名前を大声で呼ばないでほしい、とリウヒは舌打ちしながら、振り返った。

キャンパスの芝生でのんびりしている学生たちが、こちらを向いてクスクス笑っている。

すみませんね、大層な名前で。『めんなさいね、こんな貧弱な人間が。

有名な王女の名前で本当に申し訳ない。

でも、それを付けたのは両親であつてわたしじゃない！

「ねえ、リウヒ。聞いて聞いてー。すごいもん手に入れちゃつたー」幼馴染のカスガが、満開の笑顔で笑いながら走り寄つてくる。

さながら少女マンガのように背景がキラキラして、スロー・モーションでコマ送りしているみたいだ。しかし、リウヒはそんな光り輝く男にぶつすりとした顔で返す。

「あのさあ。やめてくんないかな、大声でわたしの名前を呼ぶの」「なんで？」

「嫌いだから」

不機嫌な声で答え、紙パックのジュースを啜つた。

「いい名前じゃないか。ぼくは好きだよ」

そういう問題じやない。

「それよりさ、みてみて、これ！　じゃーん！」

効果音付きでカスガが取り出したのは、一冊の薄汚い本だった。リウヒはしらけた顔で見ながら、ストローを吸い上げる。ズコーと音が鳴つた。

「ごめん、全然分からない」

「君は歴史学科だろう。どうして分からないかな」

カスガは鼻を鳴らして嬉しそうに本を撫でた。

「ティエンラン伝だよ。大昔スガタつて歴史学者が編集した本なんだ。より史実に忠実に記されている。王女の伝説はほとんどこの本が元になっているんだ。絶版だったんだけどさ、駅前の古本屋で見つけて思わず買っちゃった。ああ、ありがとう神さま、ありがとうぼく！ でも今用ピーンチ！」

クルクルと回る。この男のテンションは、ティエンランに関わると上昇する。只今マックス状態だ。

「わーお、カスガ、見事なダンス。そのまま踊つてな。じゃあねー」紙パックをごみ箱に放り込み、踊る馬鹿を背にリウヒは踵を返した。

「あわわ、待つてよー」

カスガの手が伸びる。

「夏休みの課題だけど、どうすんのさ。そろそろ決めないとやばいよ

「わたしも、バイト遅刻しそうでやばいの。夜、カスガんちいっていい？」

「いいよ。じゃあ、十一時頃だね」

手を上げて別れを告げた後、歩を速めた。この時間ならギリギリか。ほこり臭い風が藍色の髪を揺らす。駅前のビルの谷間から、夕日の断片が見えた。

昔昔、ティエンランという国がありました。

平和で豊かな国でしたが、ある時王の愛人が謀反を起こしました。王女は間一髪、富廷から逃げて国を旅することになりました。

しかしその一年後悪政を見かねて、王につく決心をします。

そして海賊や民を引き連れて、セイリュウケ原で富廷軍と対立しました。

戦は激戦でしたが富廷は反乱軍の勢いに恐れ、すぐさま降伏していました。

悪い愛人は殺されて、王女は新王となり、民の祝福を受けました。めでたし、めでたし。

この地方でもうとも有名な王女の話。

父はこの話が好きで、リウヒが幼い頃繰り返し語ってくれた。我が家系はその血を継いでいる。そしてお前は王女の生まれ変わりなんだ。藍色の髪と、黒い瞳が何よりの証拠だよ、との余計なおまけ付きて。でも娘に王女の名前を付けるのは、いかがなものか。

名前負けもいいところだ。

おかげで、どれだけいじめられたり、馬鹿にされたことか。だってわたしはこの王女が大嫌い。この名前も大嫌い。生まれ変わりなんて「冗談じゃない」。

未だこの地に執着し、誇りとしている人々も。もう五百年も経つのに馬鹿みたい。だから生糸のジン人に見下されるのだ。リウヒはぼんやりと電車の扉の前に立つて、流れる景色を見ている。地下に入つて景色は消え、一面の闇間になつた。自分の顔が、はつきりと窓に映る。

王女は美しいことでも知られている。美貌のあまり、その兄が浚つたという逸話が残つてゐるくらいだ。

平凡な顔だな。笑っちゃうくらい平凡な顔だ。

窓に映る自分の顔をマジマジと見つめてそう思つ。

今まで、普通に育つてきた。サラリーマンの父と専業主婦の母に囲まれて、高校を卒業し、大学に入学してバイトをしながら一人暮らし。これからも普通に生きて行くだろう。卒業して、就職して、結婚して子供を産んで。絵に描いたような平凡な人生を歩んでいくことだろう。でも平凡でいいじゃないか。そしてカスガが横にいればいい。

ゲンブの駅に着いて降りた。都会はいつも人ごみで溢れている。

「おはようございます」

夕方なのに、妙な挨拶をしながらエプロンをつけて、カウンターに入る。

いつものメンバーが笑顔で挨拶をよこしてきた。

タイムカードをおして、カウンター前に立つ。リウヒは、クロシヨップでバイトをしていた。ただ接客だけの楽なバイトだ。問い合わせや商品管理はベテランや社員がやってくれる。客がやつてきた。マニコアル通りの薄っぺらい笑顔で手を差し伸べる。

「いらっしゃいませ。お預かりいたします」

「いらっしゃいませー！」

入ってきた客にシギが叫ぶと、他のスタッフも次々と声を上げた。座席に案内しながら、もつ少しで休憩だ、がんばれおれ、と自らを励ます。

シギは奨学金を受けながら通う大学生だ。歴史学部に進んだのは別に歴史に興味があるからではない。単に一番楽そうだったから。どうせ卒業してしまえば、全然関係ない所に就職するだろう。ただ、大卒という履歴がほしいだけだ。

それでも居酒屋とのバイトとの両立は難しかった。出席日数が足りなくて単位がやばい。

母子家庭で苦労をかけてきた母には迷惑をかけたくないし、早く社会に出て楽になりたい。

呑氣で世間知らずの学生たちに、シギは劣等感のようなコンプレックスを抱いている。

「休憩入っちゃって」

店長に言われて、ぺこりと頭を下げ裏口を開ける。夏の熱気と湿気が体を包んだ。ついでにごみ箱の匂いも。

ポケットから煙草を取り出し、火を付ける。一口チンの心地よさが体内に沁みた。

薄汚い建物の隙間から、ゲンブの街のけばけばしい明かりと喧騒が漏れている。酔っぱらいの楽しそうな笑い声も聞こえた。

ゼニの課題をどうしようか。

煙を口に吐きつつ、扉に頭をもたせかける。

「何でもいいから、夏休み中に自由研究をやること。個人でもよく、グループでもよし。最も優秀な者には、単位をプレゼントー。」

「ココラにそつくりの教授が調子よく手をあげると、教室からどよめきが上がった。

ネットから適当に拾つてお茶を濁すとしていたシギは田を剥いた。単位はぜひともほしい。

「あちつ！」

いつの間にか、煙草はフィルターまで焦げていた。
どこかのグループに潜り込んで、「相伴をあずからうか。優秀で真面目そうなグループに。それが一番楽で確実だ。そういうえば教授に気に入られている奴がいたな。

ポケットをまさぐり煙草を取り出しつとめて、舌打ちをした。パッケージの中は空だった。

* * *

「カースーガー！ お腹空いた。なんかない？ なんか」

約束通り、十一時過ぎにやつてきたリウヒはどかどかと上がりこみ、勝手に冷蔵庫を開けて物色し始めた。伝説の王女というより、小悪党のようだ。

しかも、深夜に一人暮らしの男の部屋にやってきて、第一声が「お腹空いた」なんて、色気がなさすぎる。そんなんだから、彼氏ができるないんじゃないか、という正論は勿論言わない。

「一番上に、晩御飯の残りがあるから。チンして食べて」

今日、購入した本から顔も上げずにカスガは答えた。
ティエンランという国はもうない。

五百年ほど前に、隣国のジンに滅ぼされて富廷も何もかも燃やされてしまった。言語まで奪われた。だから歴史資料は極めて少ない。

今、現代ここはジン国ティエンラン地方になっている。しかし、住む人々の多くは未だこの地を誇りとし、山一つ隔てた国を中心都市に秘かな敵愾心を持つている。高校時代の歴史の先生は特にそれが顕著で、一度に渡るティエンランとジンの対戦に半年を費やした。客観的ではなく、あくまで「侵略された」国の目線でカスガたちに教えた。大人はそれが大なり小なり、当たり前だと思つていたし、子供もそれを信じて育つていく。

カスガたちの通うシシ大学では、失われたティエンラン語「古代語」が、歴史学科の必須科目だ。

また、ジンの信仰している戦の神、雷神イドーラを受けいられずに、古くからティエンランに伝わる太陽神エトを信じている。ジンの人間は、それを奇つ怪に思つらしい。輪廻転生を当たり前に考へている人々を。

「りっぱな大人が前世とか生まれ変わりだと普通に言うのが、すごく気持ち悪い」

友人の生糸のジン人に言われたことがある。

「どうしてさ。太陽は西に沈んで東に昇るだろう。だから人間の魂も一緒なんだよ。死んで西に消えて、新しく東から生まれてくるんだ」

「太陽も地球も単なる天体だぜ。別に消えたりしない、グルグル回つているだけじゃないか」

「いいじゃないか、そう信じているんだから。イドーラみたいに信仰の厚さであの世が決まることが、ぼくは不思議だ。なんか強欲な神さまだよね。自分を信じない者を地獄へ落とすなんてさ」

結局、その友人とは喧嘩別れになつた。

宗教の考え方の違いも、きっと敵愾心を育てる原因の一つなのだろう。

それでも、上辺だけは大人しく従つている。しかし、そう遠くない未来に抑圧された人々は不満を爆発させて、独立を求めるのではなくいかとカスガは思つている。

一度目のジンの侵略は、伝説の王女が王に立つて七年後の事だ。大國に攻め入られた小国は、隣国の協力を得て牙を剥き、見事に追い払った。それに纏わる悲愛と逸話も、王女が有名な一因だろう。その内、ジンは内戦が始まり、他国どころではなくなった。

そして五百年後の二度目の侵略で、ティエンランはあっけなく滅んだ。

だが、王家の生き残りは落ちのびて、現在もどこかで生き続いているという。眉つばものだが、この地方の人々はそう思いたいのだろう。

実際リウヒの父も、我が家系はその血を受け継いでいるし、リウヒは王女の生まれ変わりだと語り、幼いカスガは感動したのだが、娘の方は横を向いて顔を顰めた。大きくなつて世間に出てると、自称する人が多くて驚いたものだが。

三つ子の魂百まで。カスガはこの王女と物語に、どうしようもなく惹かれてしまう。幼馴染はまったく興味を示さず、むしろ嫌つている。そんな彼女が歴史学科に入ったのは、単に

「カスガと一緒にいい」

勉強する意志もへつたくれもない理由だった。

だから、リウヒとは生まれた時からすつと一緒にいる。恋愛感情など持つたことがない。兄弟のいない自分にとつて妹のようなものだ。当の本人は、食べ終わつてテレビを見ながら大笑いをしていた。

「この人、絶対ズラだよねー」

「リウヒは何しにきたの」

「晩ご飯を食べに来ました！」

「違うだろー。夏休みの課題だろー」

呆れた声が出た。

「夏休みの自由研究なんて」

リウヒはクッショーンを抱えて寝そべつた。くつろぎモード全開だ。

「小学生じゃあるまいし。ねえ？」

「ねえ、じゃないよ。君はどうしたいの」

「カスガはティエンランをやりたいんでしょ」

「すごいね、当たりだ」

その本で、リウヒが顎をしゃくる。

「適當なのかいたらしいんじゃないの」

確かに面白い事は沢山かいてあるけれど、それだけじゃ芸がない。
しかも適當にってなんだ。この子には探究心つてものがないのか。

「ぼくは富廷跡にいつてみようと……リウヒ?」

藍色の頭がクッショーンに撃沈している。まさかと思って覗きこむと、
リウヒは安らかな寝息を立てて爆睡していた。

「まさか茂みの中に隠れているとは思いませんでしたよ」

トモキがため息をつきながら、リウヒを睨んだ。

「もつと王女としての自覚と慎みを持つてください」

「持つているつもりだが」

「部屋から逃げ出して、裸足で庭の隅に隠れている事ですか？」
今日も脱走は失敗した。リウヒはトモキに襟首を猫のように掴まれ、
部屋へと連行されている最中である。

「沓はどこへやったのです」

「ネズミが喜んで担いで行つた」

トモキが再びため息をつく。

この人は知らないだろう。追いかけてくれるのを待つために、
気持ちを試すために自分がわざと逃げ出していくことを。
トモキが追いかけてきて、見つけ出してくれる。それに喜びを感じ
てしまう。

ああ、この人はまだわたしを見捨ててくれてはいないと安心してし
まう。

多分、ばれたらものすごく怒られるだろうけれど。

「殿下、おかげり」

部屋の中ではカガミが二口二口して待っていた。襟首から手が離れ
る。

「今日は早かつたね。もつとかかるかと思つていたよ
オヤジの前には茶が湯気を立てている。控えていた女官たちがクス
クス笑つた。

「リウヒさまが沓をなくされたそうです。変わりのものを持つてき
ていただけますか」

トモキが言うと、女官たちはさすがに呆れた顔をした。

「まあ、殿下。あれは中つ国渡りの高価なものですから」

「わたくしたちが殿下の為に一生懸命選んだものですね」「殿下はわたくしたちの事なんてどうでもよいのだわ」

「よよよ。泣き崩れる真似をする。

「それはいけない、探してくる」

叫んで扉に走り寄ろうとすると、素早く襟首を掴まれた。

「駄目ですよ。わたしが行きます。リウヒさまは大人しくご勉学に励んでください。それからちゃんとリンさんたちに謝るよう」「めつ、トリウヒを見込んでから、トモキはそのまま出て行つてしまつた。

力ガミと女官たちは苦笑している。

「リン、シコウ、シン、『」めん……なさい」

恥ずかしそうに、拗ねたようにリウヒが言つと、三人娘は再びクスクス笑う。

「これからは、もうなくさないでくださいまし」

「今度なくされたら、三人で泣いて縋りますからね」

「では、新しいお盃を選んでまいります」

ぞろぞろと優雅に女官たちが消えると、力ガミののんびりした声が聞こえた。

「さて、そろそろ授業開始といこうか」

授業の終わった教室は閑散としている。その片隅で藍色の髪と茶色の髪がパイプトイと言い合いをしていた。

「だから。あの本を適当につなげ合わせて、レポートとして提出すればいいってんの。どうせ、教授だつてしまつかり見ないんだからさ」

「それだけじゃつまらないつていつてるんだ。宫廷跡にいけば何か新しい発見があるかもしれないだろ?」

「小学校の遠足で行きましたー。別に何も見つかりませんでしたー」

「ああ、そう。じゃあいいよ。ぼく一人でするから。リウヒも一人

で頑張ってね

席を立とうとするとい、リウヒの白い腕が慌てたように伸びる。

「嘘です！ お許しを、お役人さま！」

カスガの好奇心と知識が頼りなのだ。逃してたまるか。この男は教授にも気に入られているし。

その時、後ろから声がした。

「おれもませてもらいたいんだけど」

振り返るとバサバサでオレンジ頭のひょろりとした男が立っていた。同じゼミの生徒だ。いつも一人で、おれに近寄るな的オーラを出している、変わった奴。結構モテるようで、何人かの女子が媚びた声をかけているのを目撃したことがある。

でも話したことないこの男が、分かりやすい愛想笑いを浮かべながら声をかけてきたという事は、自分と同じ目的に違いない。カスガを頼る気だ。

リウヒが憤慨して口を開こうとした瞬間

「いいよ

本人があつたり承諾した。

「カスガ！」

「人数は多い方が楽しいしね」

「二コ二コしている。

「ところで君の名前はなんていうの。ぼくはカスガ・センジュ

「シギ・ラシオン」

その目線がこちらに向く。

「リウヒ・アテルイ」

ふてくされたように言つと、案の定シギの目にからかいが宿つた。

「へえ、伝説の王女さまかよ」

ああ、やっぱり。そつくると思ったのよね。慣れているつもりでも、腹が立つ。

「シギくんてや……」

「そのシギくんってのやめてくれないか

リウヒの声にオレンジ頭は鼻を鳴らす。

「なんどよ」

「女にくん付けて呼ばれたくない」

「じゃあ、なんて呼べばいいの」

ため息交じりにいうと

「そんなの自分で考える」

腹立ちが一乗になった。なんて奴なんだ。こいつ。

「それよつさ、お前どつかで会つたことないか。どつかで……昔……」

シギがマジマジと見てくる。リウヒは皿を剥いた。
もしかして、わたしは口説かれているんだろうか。

やめて！ 気持ち悪い！

「ゼ、ゼミが一緒だから、そりや見た事はあるでしょー！」

そうか、だからかな、とオレンジ頭は首をかしげている。

次の授業の生徒がぞろぞろと入ってきた。

「外にでもいこうか」

カスガがのんびりといふと、一人も頷いて教室を出た。

* * *

あれからなんとなく三人でつるむようになつた。

「課題会議」と称してはカスガ宅に度々集まるからだ。しかし、鼻
息荒いのは部屋主だけで、シギとリウヒはまったくやる気がなかつた。
話はどんどん逸れて行つて、結局は飲み会になつてしまつ。

取りあえず、夏休みに入つたらここから車で一時間ぐらいの、富廷
跡に行くことだけは決つた。それまでは夏休み前の試験がある。
今度は「勉強会」と称してカスガ宅に集つてい。ティエンラン嫌
いのリウヒになんで歴史学科にはいつたんだと聞いたら、そんなん
あんたに関係ないと喧嘩になつた。

「授業はちゃんとでているのに、わざぱり分からぬ……」

嘆ぐりウビに

「でも君、いつも寝ているだけだつたろ。当たり前じゃないか。
高校の歴史の時もよく寝ていたよね」

カスガが突っ込む。

この一人は兄妹みたいだな。

シギはシャーペンを手の内でクルクル回しながら思つた。
見ていて楽しい。

今まで、他人との関わりは薄つべらなものだった。この一人とて
初めて居心地の良さを感じた。が、楽しければ楽しいほど、母に悪
いといふ罪悪感がわいた。

一度、酔つた勢いでカスガにそれを漏らしたことがある。リウビは
横で爆睡していた。

「ぼくは母子家庭じやないから、よく分からぬいけど

缶ビールに口をつけながらカスガは言つた。

「息子さんが、楽しめない生活を送つてるのは、お母さんことつ
て嬉しいことじやないはずだよ」

大切な人が自分のせいであつまらない時間をするしているのは、むし
ろつらいことなんじやないかな。

「それに、今じゃなきや楽しめないこともあるしね」

ふんわり笑つたその笑顔に癒された。

「お前、本当にあれと同い年？ なんだそんなんに語つきてるんだ
？」

「多分、この子のせい」

クッショーンに突つ伏して、寝息を立てているリウビを見る。

「小さい時から一緒に育つて、ぼくはお兄ちゃん変わりだつたんだ。
お互に兄弟がないから、余計にな。だからしつかりしなきやつて、
ずっと思つていた」

藍色の頭をワシリワシと撫でた。

「そこに愛は生まれないのか」

からかい口調のシギにカスガは苦笑した。

「兄妹愛しかないねー」

そして今、カスガいうとこりの妹は、勉強に疲れたのかシャーペンを投げ出して足をバタバタさせている。

「休憩！ 夜食を要求します！ 夜食を下さい！」

「お前、一時間も勉強してないじゃないか。どんだけやる気ないんだよ」

「脳みその栄養は全て消化してしまいました……。カースーガー。
ゴーはーんー」

へいへい、と部屋の主が腰を上げて、小さな台所に向かう。

「お前もなんか手伝えよ。一応女だろう」

煙草を吸おうとベランダに行きがてらリウヒを見おろす。

「リウヒを台所に立たせちゃ駄目だよ、シギ。死ぬよ」

「ひどい、カスガ」

「本当だつて。ぼくは三回死にかけた。しかも海老アレルギーになつた」

文句を言つリウヒを、カスガは無視して何を作ろうかな、と冷蔵庫を見回している。

やつと終わりました試験期間！ 今から夏休み、何をしようかな！」

嬉しそうに叫ぶ幼馴染にカスガが冷静な声を出した。

「リウヒさ。いいけど古代語、絶対追試だよ」

キャンパスの中はリウヒ同様歓喜の声を上げている学生であふれている。

長期休みの始まりはいくつになつても楽しいものだ。

「古代語なんて、なんで勉強しなきゃいけないのか分かんない。今は現代でしょ」

「昔の人があたしてた言葉なんだよ。ロマンじゃないか」

「わたしはロマンよりマロンがいい」

「君の思考回路はなぜいつも食い物に直結するんだ」

宮廷跡へ行くのは、明後日の十時にカスガ宅で集合する事になつた。カスガが実家から車を借りて、運転していく。南館からシギが出てきた。

「シギ！ 試験どうだつたー？」

リウヒが駆けて行く。どうやら人見知り期間は完全に終了したらしい、とカスガは苦笑する。

自分とリウヒの関係は、他人には異様に見えるらしい。「べつたりし過ぎて気持ち悪い」とよく言われた。小さい時から。事実、カスガに友人は何人かいるが、リウヒはその性格もあってか、友人らしき人物はいなかつた。せいぜい大学やバイトの知り合い程度だ。それでも社会人になれば、この関係も変わるかもしれない、と思いつつ過ごしている内に、シギが加わり出した。二人は、よく不毛な言い争いをしているが、最近シギはリウヒをからかう事を覚えたらしい。仲がいいんだか悪いんだか分からぬ。

まあ、なんにせよぼく以外の人間と関わるのはいいことだよな。遠くでまたじやれているように言い合正在する「一人をみて、力

スガは少しだけ淋しい気持ちになつた。

* * *

「せつかくカスガと三人で飲みに行こうと思つていたのに。今日もバイトなのー」

「悪いな。おれはお前らみたいなお氣楽学生とは違うんだよ」「そのお氣楽学生とつるんでいるのはどこの誰だ。あーあー。つまんなーい。久しぶりに外で飲もうと思ったのに」

「おれがいなくて淋しいんだろ」

「馬鹿。この馬鹿」

「照れるなつて」

いつもの如くくだらない言い合ひをしながら、リウヒは後頭部に突き刺さるような目線を感じた。振りかえると同じゼミの女子が数人、こちらを睨みつけながらひそひそ話している。あの中の一人は昔、シギに声をかけていた子じゃなかつたか。

「行こうぜ。カスガが待つている」

いきなりシギの手が肩に回つて、リウヒは仰天した。しかし男は頓着せずに歩きだす。

「な、な、な、なにしてんのあんた！」

「ちょっとだけ付き合つてくれ。あの子、苦手なんだよ」

シギが声をひそめて言つた。耳の近くで囁くように。自分の顔が赤くなるのが分かつた。

「ストーカー体質つていうの？ なんか友達と一緒に集団で押し掛けてくるんだよ。下宿先とかバイト先とか……おい、お前歩き方おかしいぞ」

どうやらパニックになつて、右手と右足を一緒に出して歩いていたらしい。

「それに顔も滅茶苦茶赤い……ああ、そうか。男に免疫ないんだ」

「悪かつたな！」

からかうよつな笑い声についとがつた口調で言い返す。

「二十歳^{はたち}で男に免疫なくて悪いか。彼氏がいたことなくて悪いか」

「いや、むしろ珍しい」

シギはクツクツと楽しそうに笑い、肩に回している手に力を込めた。体がさらに接近する。そして耳元で低く甘く囁いた。

「リウヒ……」

「ひツ……」

背筋から寒気が一気に広がつて、鳥肌が立つた。シギの手を振り切つて、呆れた顔をして見ていたカスガに走り寄る。

「お後がよろしいよつで」

「よろしくない、よろしくない。全然よろしくない！」

この女たらしが苛める、とシギに向かつて指をさすと、カスガはため息をついた。

「あのね、シギ。リウヒは我儘で自分の事とご飯の事しか考えていない、色気のない子だけど、一応お年頃で、男の人には慣れていいような、信じられないけど初な所もあるんだから、あんまりからかわないであげてね」

「それはほんどうわたしの悪口じゃあ……」

「はいはい、しょうがねえなあ」

シギは、相変わらずクツクツ笑つたままだ。楽しい玩具を見つけた、という風にリウヒを見る。慌てて、カスガの後ろに隠れた。

「じゃあ、おれそろそろいくわ。また明後日な」

「うん、バイト頑張つてね」

シギが手を上げて踵を返す。カスガが手を振つて見送り、その後ろからリウヒも小さく手を振つた。

東宮の小さな広場で、リウヒは剣を構えてシラギを睨みつけていた。腹ただしいほど隙がない。ただ、剣を右手に持つて突つ立っているだけなのに。

「リウヒさまが参られないのなら」

シラギがつと右手を上げた。

「わたくしから参ります」

瞬間、リウヒが駆けだす。そのまま真っ直ぐいくと思ひきや、左に跳ね下段から上になぎ払つた。シラギは微動だにせず、片手で止める。目線すら動かさない。金属音が三度、四度。すぐさまリウヒが飛び退つて間合いをとる。

「まだ剣が軽いですね。両手で持つてみてはいかがですか」
ムツとした。しかし素直に両手に持ちかえ、今度は正面から突つ込む。

「足の踏み込みが甘いです。重心も意識してください」

力いっぱい振り下ろしたはずの剣は、ほろりと返される。攻撃している内に息が上がつてきだした。

汗が滝のように滴り落ちて、口で呼吸しなければ追いつかない。肩で息をしているリウヒを見て、控えていたトモキが声をかけた。

「そろそろ休憩にしませんか」

シラギは無言で剣を下ろす。リウヒも女官たちが待つている長椅子に向かつた。

差し出された小布で勢いよく汗を拭う。

「早くわたくしも、御前試合の黒将軍のようになりたいものだ」

からかいを含めてシラギを見ると、講師は僅かに眉を顰めた。未だにあの掛け声を根にもつてているのだろうか。とリウヒは小さく笑う。三年前、御前試合で圧倒的な剣術を披露した二人は、誰からともなく黒将軍、白将軍と呼ばれるようになった。あの試合をいたく気に入

入ったリウヒに、カガミが「口」しながら言った。

「今度シラギさんがあつたら、いよつ、黒将軍つていつでござりん。

面白いものが見られるよ」

そして実行したら、シラギは戸惑つたような顔をして「ありがとうございます」とうござります」とうろたえた返事をした。その顔が面白くてリウヒは笑いをかみ殺していたが、隅の方でもトモキと女官三人が苦しそうに震えていた。シラギ一人が、苦虫を噛み潰したように慄然としていた。

「それにはもつと体力をつけないといけませんね」

「お食事はしつかり召されているのに、おかしいですね」

「トモキさんとの追いかけっこで体力はあるはずですのにね」

リンたちも可笑しそうに微笑む。そして温かい茶を注いでくれた。

「そういえば、兄さまは見つかったのか」

宴で声をかけてくれた優しい兄は、一日前いきなり行方不明になつた。赤茶色の髪に翡翠色の瞳の、美しい兄だつた。初めて見たのは例の試合の席だが、その時は試合が終わつてすぐに東宮に帰つた。父王が恐ろしかつたからだ。しかし、父は昔のことなどなかつたように、リウヒに無関心だつた。

君がリウヒかい。

兄は目線があうように、片膝を折つて声をかけてくれた。少し怖かつたが、この人に嫌われたくないと思つたリウヒは、氣合いをいて踏ん張り猫を被つた。

「きげんよう、兄さま。

すると爽やかに笑つた。

そう堅苦しくなることないよ。東宮の君たちの追いかけっこは中々に楽しそうだね。今度はわたしも参加させてもらおうかな。リウヒもつい笑つてしまつた。

ええ、いつでもお待ちしております。よい隠れ場所をご案内いたしますわ。

わたしの妹は面白い事を言つ。

一人でクスクス笑いながら話している様子を、トモキが少し離れた場所で嬉しそうに見ていた。多分内容を知つたら、呆れるだろうが。どうして兄は突然消えたのだろう。誰かに攫われたのだろうか。それともかつての自分のように宫廷が嫌だつたのだろうか。そんな気配は微塵にもしなかつたけれど。

「スザクまでの消息は分かつたのですが、そこからぱつたり消えてしました」

シラギがため息をつきながら言つ。田の下にはうつすら隈がある。きつと激務で大変なのだろう。宫廷の兵を統べる右将軍の責任問題だつてある。すこし可哀そうになつた。

「きつと兄さまは、どこかに散歩に行つただけだろう。すぐ帰られるよ」

「ずいぶんと長い散歩ですね」

小さく苦笑したシラギは、ではそろそろ始めましょうか、と広場の中央に歩き出す。慌ててリウヒも剣を取り、その後を追つた。

* * *

時計を見ると、九時半で慌てた。どうやら田覚ましを寝ぼけて止めていたらしい。飛び起き脱ぎ捨ててあつたジーンズに両足を突っ込む。ベッドの中から寝ぼけた女の声がした。

「どうかいぐの？」

「昨日言つたる。友達の付き合い」

顔を洗いつつ、歯を磨き、ケータイを探す。バイト仲間の女はぽんやりとシギを眺めていたが、あたしはもう少し寝ている、と再び布団に潜り込んだ。

「じゃ、鍵はいつもの所に入れといてくれ」

「はーい。あ、ねえ。今日も入つてんでしょ」

「ああ、遅番で」

「こつてらつしゃい。また今晚」

手だけが布団の中からひらひらと振られた。

階段を音をたてて降りる。カスガの家まで約十五分、ぎりぎり間に合つた。

女友達はもう寝ていることだらう。シギには女友達が複数いる。現代は女の方が強く奔放だ、先程のバイト仲間の女もちゃんと彼氏がいる。そんな中、肩に手を回したくらいで、うろたえまくるリウヒは珍しい存在だった。本当に珍しい。

あの赤い顔を思い出して、シギは歩きながら小さく思い出し笑いをした。

夏の太陽は、まだ午前中だというのにサンサンと照りつけて自己主張をする。数分歩いただけでも、汗が噴き出てシャツを濡らした。

「ああ、来た来た。おはよー」

カスガは、ジーンズにTシャツ、パークー姿で、助手席で地図帳を見ているリウヒはカーポパンツにぴたりとしたシャツを羽織つていた。

「おはよ。早いな、お前ら」

「シギが遅い」

「時間通りじゃねえかよ。ああ、そうか。おれを待ちくたびれていたんだろ」

藍色の長じ髪に手を伸ばさうとするとい、リウヒは地図で殴りつけようとした。

「はこはい、そこまでにしておいていきますよ」

カスガが運転席に乗り込んで、リウヒが助手席のドアを閉める。シギは後部座席に陣取った。片隅にはトートバッグやらコンビニの袋やらが積まれていた。

「なにこれ」

ビール袋をガサガサさせながら覗きこむと、「コーヒー やら ジュースやら菓子袋やらが入っている。トートバッグの中は、使い捨て容器に入った弁当だった。

「リウヒがコンビニで買つてきたものと、ぼくが作ったお弁当」

用意がいいな。シギが感心するところウヒが歌つよつて言つ。

「旅は能動的じゃないとね」

「旅なんて、大げさなものじゃないけど」

カスガが車を発進させながら苦笑した。

「じゃあ、遠足？」

「遠足だな」

「バナナはおやつに入りますか」

「今どきそんなネタ……」

三人は声を上げて笑つた。

車はすべらかに走る。

「コーヒー貰うぞ。あ、ジュースとつて。ぼくお茶がいい。ラジオつけようか。すごい、カスガ。詩吟のテープがあるよ。この車カーナビ付いてないのかよ。時代遅れの親父の車なんだよ。しばらく車内は騒がしかつたが、次第に寬いだ空気が流れだした。

カスガは性格どおり気持ちのよい運転をし、リウヒは的確に地図を見ながらナビをし、シギは煙草をふかしながらのんびりとコーヒーを啜つていた。

窓の外は、町中から段々緑が多くなつてくる。

ああ、夏だな。

青空に広がる入道雲を見ながら、シギは窓から入つてくる空気を吸つた。景色は一気に開けて海が出現した。夏の太陽に水面が反射して、遠く跳ねるように輝いている。

「うわあ……！」

リウヒが感嘆の声を上げた。その顔があまりにも嬉しそうで、思わずシギは見とれてしまつた。慌てて、視線を海に転じる。海原は、誘うように波の音を響かせていた。

「ねえ、カスガ！ ちょっとだけ、海に行かない？」

「えー？ 富廷跡につくの、遅くなつちゃうよ」

「おれも海に行きたい」

後ろからの援護に、一瞬リウヒは驚いた顔をして振り返つたが、味

方を得たとばかりに甘えた声を出した。

「ねー。おとうちゃん、お願ひ

「わたしを海に連れてつてー」

「それか、ちょっと逆いってスザクにいー」「うーん、勿々、いー

「お買い物かしらのー」

ヒナのように騒ぎ始めた一人に、運転手は一喝した。

「駄目です！ 今日は駄目！」

「君たちは先づ……。仲がいいんだか悪いんだか分からぬいよ」
シキとリヤビはケラケラ笑い、再び海に行きたいと合唱した。

ちよつとだけだよ。子供にねだられた父親のごとくカスガはため息をついて、ハンドルを切った。

六
六
六

子供のよつな歓声を上げて、リウヒとシギが海辺に走り寄る。

車を止めた所は遊泳禁止区域で、老人やカップル、小さな兄弟を連れた母親がポツポツといつだけの静かな場所だった。そんな中、はしゃいで走つてゆく二人は非常に目立つた。カスガは後ろからついてゆきながら、小さく笑う。まるであの二人は能天気なカップルのようだ。上に「バ」を付けようか。

件の二人は靴を脱ぎ、波打ち際に立つと、何故か仁王立ちになつて彼方を見ている。

その斜め後ろでカスガはゆっくりとストレッチをした。手を組んで
上に伸ばしながら、リウヒはともかくシギが我儘を言うなんて珍し
いと思う。海を見ているその顔は、いつものひねた表情はなく無邪
気な子供そのものだった。

リウヒも同じ事を感じていたらしく。

「シギは海が好きなの？」

「ああ、大好きだ」

その目線は相変わらず彼方を見ている。

「海なんて、数回しか来たことないのに、その度に胸がギュってなる。何て言つていいか分からぬけど……血が騒ぐつてゆうか……」

「もしかしたら、シギの前世は海の男だったかもしれないねー」

カスガの声に一人は振り向いた。

「ティエンランの海軍だったかもしれない」

「この辺を荒らし回っていた海賊だったかもしれない」

リウヒとカスガにシギも笑つた。

「以外と漁師だったかもしれない」

あははと声を上げて笑う。

遠くで小さな兄弟がじやれて弟が泣きだした。母親が兄を怒つている。老人夫婦が手をつないのでのんびりと散策をしている。高校生のような少年と少女が寄り添つて海を眺めている。

「いこうか」

カスガが言うと、二人は大人しく歩き出した。

「ティエンランの海軍つて強かつたんだろう?」

「うん、元々はすごく弱かつたんだけど、白將軍カグラが育て上げた海軍は、近海に名を轟かせるほど強くなつたんだよ。ジン国が最初に侵略した時大活躍したし、次の国王ヒスイは……リウヒ、何しているの」

「いくつ入るか、試しているの」

リウヒがカスガのパークーの襟に石を入れていた。

「止めてよ、重いよ、苦しいよ!」

カスガは身をよじつて逃げまとうが、リウヒは石をもつて追いかけ

る。その様子をシギは煙草に火を点けて、呑気に見ていた。

「お前ら、本当に兄妹みたいだなあ」

「ちょっとシギ、見ていないで助けて!」

首が締まるー! カスガの絶叫が浜辺に響いた。

まだ痛いよ。と不機嫌なカスガに、リウヒは首をすくめ地図で顔を隠した。

「ごめん。もつと小さな石を入れれば良かつた」「そういう問題じやないだろ?」

運転手は変わつてシギがハンドルを握つている。性格とは裏腹に誠実な運転だった。

「リウヒは免許持つてないのか」

「うん、わたしは助手席専門だから。ナビをしたり、運転手にお茶やガムを渡したり、お菓子を食べたり、居眠りをしたりするのがわたしの仕事」

「じゃ、ガムをくれ」

さつそく注文が入つた。

やつぱりこいつはえばかりな奴だ。

小さく息を吐き、銀紙を剥いて手渡そつとすると、ハンドルから手を離さずに口を開ける。放り込めという意味なのだろう。素直に手を伸ばして入れると、素早く口が閉じた。逃げ遅れた人差し指がくわえられたたま、ちらり、と舌で舐められる。

「ぎやっ！」

色氣のない悲鳴を上げてリウヒは手と身を引いた。勢いで窓に頭をぶつけた。

「リウヒ？ どうしたの？」

カスガが驚いた声を出したが、恥ずかしくて状況説明ができない。

「ななななんでもない！」

シギは、ニヤニヤと嫌らしく微笑んでガムを噛んでいる。

ああ、腹が立つ！ この男はわたしをからかつて遊んで楽しんでいるのだ。

悔しさのあまり、リウヒは窓下に拳を何度も打ちつけた。

この馬鹿にも腹が立つが、海で見せた無邪気な笑顔と、その喉仏に一瞬見とれてしまった自分にも腹が立つ！

「いいけどさ、あんまり暴れて車壊さないでよね」

「この道は真っ直ぐでいいのか」

「えつ？ エエと、エエと、三ツ田の信号を左に入つて」

「了解」

海は消えて、また町中に入った。もう少しでティヨンランの宮廷跡に着く。ただの山の中腹の、形ばかりの宮廷跡に。

駐車場に車を止めて、三人は弁当を持って歩き出した。世間はまだ平日だからか車は四、五台のみで人の気配もあまりなかつた。蝉の大合唱だけが耳につく。

「暑いー」

「お腹空いたー」

テンショントガリ氣味のリウヒとシギに比例して、カスガは弾むような足取りで歩く。

「早くー。行くよー」

「何であいつはあんなに元気なんだ」

「ティエンラン大好きっ子だから……」

目的の場所は、山の中腹にある。そこまでは果てしなく伸びる大階段があつた。黙々と登る。

「あのさ。変な気がしない?」

カスガの声に、リウヒも頷いた。

「昔、登つたことがあるような気がする。なんか早く上に行きたくて、すごく焦つていて、誰だ、こんな階段を作つた奴はつて思つた」「ぼくは、誰かの背中を見ながら、すごく誇らしげに登つた気がする」

「おれは分からん」

「小学校の遠足でそんな事を思ったのかな」

「シギは遠足でこなかつた?」

「来た。でも全然覚えてねえ」

階段の中ほどで、いったん息を整えて再び足を動かす。

登りきつた先は、閑散とした風景が広がつていた。建物の後すらない。木々が生い茂つて、大きな公園みたいな所だ。わたし、後宮の方にいつてみる。トリウヒは一人で歩きだした。昔、来た時もその場所に惹かれた。山の傾斜にあるにもかかわらず、小

さな島が密集しているよつたな小山の群れで、橋がいっぱいかかっていて面白かった。

一人でずんずん歩いて橋々を渡り、足を止めた。そこは少しだけひらけた所で、下の町がよく見える。そのまま歩を進め、ひらけた場所の先端に行く。

いきなり懐かしい感情が、足先からザアッと広がった。

延々と続く町、その奥に連なる山、そして端に見える海。

この光景を知っている。そうだ、わたしはこの光景を愛していた。胸が絞られるような、血が騒ぐような変な感じがする。

ああ、それはわっきシギが海を見ながら言っていたではないか。わたしの前世はここにゆかりのある人だったのだろうか。

「お前、こんな所にいたの」

声がして振り返った。シギがオレンジ色の頭をかきながらやつてきた。

わたしは、この場面も知っている。デジャブ？ でも確かに知っている。

心臓が跳ねて、ドキドキし出した。嬉しいという感情があふれてくる。

「いい眺めだな」

横に立つて遠くを見る男の顔が、ふと変わった。何かを思い出すような。

「ねえ、何か変な感じがしない？」

リウヒが掠れた声を出した。

「わたしたち、ここに会ったことない？」

そんなはずはない。初めて一緒にここにきた。でも、確かに昔、ここに立つて一人でこの景色を見た。遠い、遠い、遙かな昔。シギが振り返つてリウヒを見る。

「変な事言うなよ」

その顔は普段の顔ではなかつた。痛々しいよつたな、呆然としたようだ。

「お前が変な事言つから、おれまで変な感じになつてきたじゃねえか」

二人は見つめあつたまま、動かなかつた。
いかないで、と自分の中から声がする。それは泣いていた。泣きじやくつっていた。

お願ひ、わたしの前からいなくならないで。あなたがこのまま、わたくしを残して去つていいくのならば、一緒についてゆきたい。でも、それは叶わない。恋する男について行く事もできない。全てをかんぐり捨てて、ここを出て行く事はできない。

「あ……」

切なさが溢れ涙が出てきた。胸が締め付けられて、痛い。
シギの片腕がリウヒの腰に回つた。いつものからかいの表情はない。切実なほど悲しい顔をしていた。

そのままゆつくりと引き寄せられた。リウヒもシギの背に手を回す。男の片手が自分の頬を撫でる。大切のものを触るように。手は顎へと滑り、静かに上げられた。リウヒが目を閉じる。
ああ、狂おしいほどあなたが好き。

二人の唇が重なつた。何度も重なるそれは、次第に深くなつてゆく。その時。

「ママ、みてー。の人たち、チューしてるー」

「こらつ！ ミーちゃん、ダメでしうー！」

ハツと現実に戻つた一人は目を見開くと、お互ひを突き放すように離れた。少女が母親に引きずられながら、自分たちを見ている。

「えつ……？」

今、わたしは何をしていた？

シギを振り返ると、呆然として自分の口に手を当てている。その顔は真つ赤だつた。

先ほどまでの、悲しいような痛いような気持ちはずつかり消え去り、段々とリウヒは混乱してきた。

今、わたしはこの男と何をしていた。キスをしていた。

愕然をへたり込む。

わたしの、わたしのファーストキスが、こんなナンパ野郎と……！
膝を折つて座りこんだ放心状態の肩をシギが叩いた。

「おい」「

「さやーつ！」

悲鳴を上げて、飛び上がつたリウヒはそのままアワアワとシギから離れた。

「お前。そんなに驚くことないだらうー！」

「来ないで！ お願い触らないで！」

「何だよ、せつきはノリノリでおれに抱きついて、キスしていくくせに」

「あれは……！」

あれはなんだつたんだろう。あの痛いほど切ない気持ちは。いかないで、と言つていた。ついて行きたいけどここから離れられない、とも言つていた。

まるで誰かが乗り移つたような。

背筋がぞくつとした。そうだ、あれは自分じゃなかつた。他の誰かだつた。じやなきや、誰がこんな男に抱きついでキスするものか。「とにかく、来ないで、触らないで、あっち行つてスケベ男！」手を振つて叫ぶリウヒに、さすがにシギはムツとしたようだつた。

「そんなんだから、男ができないんだよ。可愛くねえ女！」

「なによ」

「なんだよ」

先ほどの甘い雰囲気はどこへやら、火花を散らして一人は睨み合つ。先に折れたのはリウヒだつた。腹が減つたのである。

「と、とりあえず、カスガ探してご飯にしよう」

「そして飯かよ。本当に色氣のない女だな」

フンと鼻を鳴らしてリウヒが立ちあがり、服についていた草を払つた。

* * *

「シギもリウヒもどうしたのさ。わざわざからおかしいよ、君たち」

「別に」

「なんでもねえよ」

本殿跡地の芝生に、レジャーシートを広げて三人は弁当を食べていた。しかし、シギとリウヒはお互にそっぽを向いて、顔を合わせないように座つてゐる。

カスガは怪訝そうにしていたものの、ティエンラン講釈を語りだし、リウヒが相手をしていた。

あれは何だつたんだろ？ シギは握り飯を口に運びながら、半ば呆然と考へる。

先程リウヒを見た瞬間、懐かしいような、悲しいような、嬉しいような感情が広がつた。並んで立つた時、それをより強く感じた。

ねえ、何か変な感じがしない？

ああ、おれもだ。

わたしたち、ここで会つたことない？

ある。いつかは分からぬくらい、遠い昔に。

そしてリウヒと見つめあつてゐる内に、不思議な感情はどんどん膨れ上がつてきた。

この娘と離れたくない。でもここからはここから動けない。おれはここでは生きていけない。

自分の中で声がした。それは悲しく、痛いほどの葛藤を抱えていた。なあ、おれと一緒に来てくれ。おれだけのものになつてくれ。お前を愛しているんだ。

けれども、言えない。言えばお前は困るだろ？

体験したことのない愛おしさが溢れ出て、身を引き裂かれそうだった。

気が付けば、リウヒを抱きよせてキスをしていた。

あの時の自分と、リウヒはきっと普通の状態じゃなかつた。まるで

誰かが一人の体の中に入り込んで、感情を支配していくような感じだった。

思わず寒気がする。シギは腕をさすつた。かすかに鳥肌が立つている。

二人の前世に関係あるのか。

それにしても、腹ただしいのはその後のリウヒの態度だ。まるで「ゴキブリに対するような態度で自分に怯え、しかもスケベ男と叫んだ。最終的には「ご飯にしよう」。

飯に負けたのかよ、おれは！

シギのプライドは痛く傷ついた。今まで声をかけてきた女は結構いたし、不自由はしなかった。そのおれが「ゴキブリ扱い。本当に可愛くない、色気のない女だ。

シギは腹立たしい気持ちのまま、握り飯をたいらげ、手についた米を舐めた。

* * *

「お握りも、唐揚げも、卵焼きも、お浸しも、お漬物も、全部おいしかった。ごちそうさま」

リウヒが手を合わせると、カスガも手を合わせた。

「はい、どーも」

「じきそつきました」

シギが頭を下げる。

「これ、捨てるね

リウヒがゴミを回収して、立ち上がる。

「ねえ、さつき、なにかあったの？」

遠ざかる後ろ姿を見て、カスガがシギを見た。

「なんで？」

「君もリウヒも様子がおかしかったから」

二人とも、心あらずという感じで、顔が赤くて、そのくせ険悪な雰

困気だつた。

シギがためらいつつも、つかえながら説明した。

「何か、自分が自分じゃない感じだつた。誰かが入り込んだような、変な感じがした。多分、向こうもそうじゃないかな」

「不思議なこともあるもんだね。君たち、遠い昔は恋人同士だつたんじゃないの？」

「何かしらの理由があつて、離れ離れになつたとか。まあ、前世は前世で、おれはおれだけどな。だつたら初めてリウヒを見たとき、どこかで会つたような気がしたのも納得できる……」

「え？ なにそれ？」

なんでもねえよ、とシギが首を振つた。

「どちらにしても、リウヒにとつては初キスだつたんだよ」「えええ！」

あの子は我儘で色氣も可愛げもないが、夢見る乙女な部分も一応は持ち合わせていたらしく、その昔カスガに言つたことがある。

「初めてのキスは、夕日の見える公園で、大好きでたまらない人としたいな」

それが可哀そうに、こんな所で、こんな男と。

「あいつは天然記念物か」

「そんな人、いっぱいいるよ。むしろ君の女性関係を知りたいね」「特定の女はいねえよ」

「不特定多数の女はいるわけだ」

あのね、シギ。

「君の女性関係に文句を言つつもりはさらさらないけど、リウヒには遊びで手を出さないでね。傷つけたら承知しないよ」

「頼まれなくとも出さねえよ。あんなガリガリで、色氣も可愛げもない女」

へつ、とシギが吐き捨てるように言つた。

そうかな。結構気に入つてゐるように見えるんだけどな。そう思つたが、口には出さずペットボトルのお茶を飲んだ。

蝉や小鳥の鳴き声がする。古代の富庭でも、夏になると蝉は大声で鳴いていたのだろうか。

「カスガ、シギ」

リウヒが戻ってきた。

「あつちに下に降りる小道があつたの。もしかしたら、駐車場にいく近道かもしれない」

「あの長い階段はおりたくねえなあ」

まだ足が痛い、とシギが長い足を上げる。

「じゃあ、時間はあるし、散策がてらその道を行つてみよつか」

そして、三人は見事に道に迷つてしまつた。

相送跡 3 (前書き)

今回、なまけと感じます。すみません(汗)。

「誰だよ、駐車場にいく近道なんていったのは
「わたしだけど、二人とも賛成したでしょう」

シギとリウヒが睨みあう。

本殿後から、歩きだしたリウヒたちは山の中の小道へと入った。が、
いくら歩いても麓にはたどり着かなかつた。来た道を引き返したは
いいが、今度は本殿後にも出ない。延々と山道は続いている。

「ケータイは圈外だし……」

「もしかして、これは遭難したんじや」

「そうなんですよ」

「ダジャレかましてる場合か！」

シギがイライラと舌打ちする。

ああもう限界。リウヒは足をさすつた。大階段で疲れ果てた足は、
長時間歩いてジンジン痺れてしまっている。

「『めん、ちょっとだけでいいから休憩していい？足が痛い』
情けない声をだして、適当な場所に座り込んだ。ふくらはぎを見る
とパンパンにむくんでいる。

「五分だけだぞ」

シギも疲れていたのか、隣に身を投げ出すようにへたり込む。ポケ
ットをまさぐつて煙草を取り出した。カスガは一点を見つめている。
「どうしたの」

「なんだろ、iji……」

二人が座っているすぐ横に、洞窟があつた。高さは一メートルぐら
いで、横幅は大人四人が並んで通れるくらいの大きなものだつた。
「やめてよ、カスガ。まさか中に入る気じや……」

洞窟を覗き込む幼馴染の目が好奇心に光つていて、リウヒはうるた
えた。先ほどの誰かに体を乗っ取られた恐怖がせり上がりてくる。
シギが立ちあがつて、同じく覗きこんだ。

「あんまり深くなさそうだな

煙草をふかしながら言つ。

「いつてみようか

「おう」「

「ちょっと待つて、今、そんな状況じゃないでしょ。どうして、そんな所に入ろうとするの」

「楽しそうだから

「面白そだから」

リウヒは泣きそうになつた。どうして男子はいくつになつても、こんなしようもない所に行きたがるのだ。

「お前、怖いならそこで待つてろよ。すぐ戻るからさ」

馬鹿にしたようなシギの言い草にムッとする。だからこつは嫌いだ。

「嫌だ、わたしも行く」

腰を上げると、カスガのパーカーに掴まつておそるおそる中を見いた。

「いくぞ」

三人で歩き出すと、ひんやりとした空気が体を包む。湿気とカビ臭い匂い匂いがした。

「暗いね」

「以外と深いな

「カスガあ、なんか踏んだ……」

「ぼくの足だよ」

先は真っ暗闇で見えない。洞窟の外の明かりも奥へ進む」とこ、どんどん小さくなつていつた。それでも三人は取りつかれたように、暗闇へと向かつて行つた。

入口の明かりがテニスボールほどの大きさになつた時。

突然、リウヒは奇妙な感覚に捕らわれた。足が空をかいたと思つたら落下したのである。何かに引っ張られるよつて。

「えつ……。ああつ！」

「どうし……うわあ！」

「つおつー。」

それぞれ悲鳴を上げて、闇闇へと落ちて行つた。

「痛あ……」

倒れた状態のまま、リウヒは頭を押された。したたか打ちつけたが、怪我をしている様子はなくて、ホッとした。

わたしは、どうしたんだろう。洞窟に三人で入つて、穴がどこかに落ちたような気がする。ゆっくり目をあげると、意外と近くに丸い光が見えた。

あれ、落ちてないのかな。じゃあ、どうして倒れているんだ。そうだ、カスガとシギは。

「どけよ」

シギの低い声が下から聞こえる。ああ、無事だつたんだ。

「お前の乳がおれの顔に当たつてんだよ。早くどけ、この貧乳！」

「ひつ、人が気にしている事を！ 变態！」

慌てて上半身を反らす。

「おれの上におつかぶさつといって、変態よばわりかよ。お前が押しつけてきたんだろう！」

「いいからさ、一人とも早くどけてくれないかな」

苦しそうにくぐもった声が、さらに下から聞こえた。

「ぼく、死にそつ……」

* * *

「死んでも嫌」

今日の昼餉は、大嫌いな菜飯だつた。リウヒは食べる事は大好きだが、これだけは好きになれない。青臭くて不味い。誰がこんなものを作り出したのだろう。

トモキが残さず食べるよう注意をしたが、リウヒはツンと横を向い

て拒否をした。

「じゃあいいです」

ため息をついて、トモキが食事を続ける。愕然とした。今までそんな事はなかった。あっさり引き下がった日の前の教育係に、逆に不安を感じた。

呻きながら不承不承、茶碗を手に取る。

「ほらほら、ちゃんと食べないと大きくなれませんよ」

リンが笑いながら言う。シユウとシンも微笑んだ。

「だつて、この青臭いのが嫌いなんだ」

一口食べて顔を顰めた。やっぱり不味い。でも全部食べれば、トモキは褒めてくれるに違いない。必死になつて、茶で流しながら菜飯をたいらげた。

どうだ、食べたぞ。得意になつてトモキを見ると、片手に箸、片手に椀をもつて明後日の方を向いている。今日はなんだかおかしい。「どうしたのだろう。熱もあるのかな」

リウヒの言を受けたシユウが首をかしげて、トモキの横に立つた。その額に手を当て、もう片方の手を自分の額に当てる。トモキが初めてはつとしたように顔を上げた。

「お熱はないようですが」

「大丈夫か」

心配そうに聞いても、何も言わない。リンとシンが目の前の食器を片付け始める。茶碗もきれいに空なのに、ぼんやりと見ているだけだ。

「すみません、もついいです」「ちうそつさま……」

トモキは一人でフラフラと外に出ていつてしまつた。ほとんど手を付けていない昼餉が残つてゐる。

「あつお前、人に食べるよつまつておいて残しているじゃないか、卑怯者！」

思わず叫んだが、無視された。どうしてだ、聞こえてゐるはずなのに。

「どうしたのかしら、トモキさん」

「今日は何かおかしいわねえ」

リンとショウも不思議そうにその後ろ姿を見送る。

「もしかして恋煩い?」

シンがにやりと笑った。さやーー。と二人娘は声を上げる。リウヒがまさかと責めた。トモキの関心が、自分でない他の誰かにいくなんて。

「そういうえば、きれいな女性の人と、よく一緒にお話ししているらしいくてよ」

「トモキさんもお年頃ですものね」

「温かく見守りましょう。ね、殿下」

「知らないぞ、そんな話!」

リウヒは混乱していた。今まで、一身に受けっていた愛情がよそにいくのは、寂しくて耐えられない。むしろ恐怖だった。いつの間に恋人ができたのだ。

「相手は、相手は誰なんだ」

「富廷一の踊り子だとか。わたくしも詳しく述べては分からぬのですが、とにかくきれいな方だそうですよ」

富廷の恋愛事情に敏いシンが、空を見ながら言へ。

「そ、その女がトモキを誑たぶらかしていふのか」

「まあ、殿下。どこでそのような言葉を覚えたのですか」

リンが呆れながらリウヒを見た。

「トモキさんも、いいお年ですもの。恋愛の一つや一つ、あつても良いではないですか。それに、あの人の殿下に対する気持ちは、恋どこひるじやうございませんのよ」

「殿下が恋をする方は誰なのでしょうね」

ショウがうつとつと囁く。

いまいち、恋というものが分からない。リウヒは首を捻る。

「この人と、ずっと一緒に居たいと思つ」とです、「分からない。トモキか? でも違う気もある。」

「いの人なら、ついてゆきたい、なんでもしたい、と思つじとします」

分からぬ。トモキか？ でも違つ氣もある。

「この人でなければ、嫌だと思つことです」

分からぬ。トモキか？ でも違つ氣もある。

頭を抱えたりウヒを見て、侍女たちは

「殿下も、いつか必ず分かるときがきますよ」とさやめくように笑つた。

夏の陽光が窓から入つて、娘たちを包み込むように照らした。

* * *

光が差し込んでいる。暗闇の中から見る橢円形のそれは、眩しくて目が痛くなつた。

「お前ら、怪我ないか」

「うん、大丈夫」

「ぼくも」

おかしい。シギは光の先を見ながら思つ。

おれらはもつと先まで進んだはずだ。そして何かに引きずられるよう暗闇に転げて落ちていつた。どうして、こんなに入口が近いんだ。

光に向かつて歩き出す。

「ねえ、こんなに入口近かつたつけ」「もつと奥まで進んだはずだけど」

同じような疑問をリウヒとカスガも口に出した。

洞窟を出ると、田の前に赤い土の道が横切つており、草原が広がっていた。遠くに小さく集落らしきものがあつて、その先に山が連なつてゐる。絵本の挿絵のような、あつけらかんとした風景だつた。

「え……」

ひんやりとした風が吹いた。空の色が、南国の島のように濃く青い。

所々に雲がぽつかりと浮いている。

「なんで……」

洞窟に入った時は、確かに森の中だった。なんで平地が広がっていて、なんで……。

「街がないの……。てゆうか、ビルがないの……」

リウヒの小さな声がする。

視線を巡らすと、山沿いのはるか左手に白い壁が延々と続いていて、町らしきものであるのが分かつた。振りかえって出てきた洞窟を見ると、洞窟と言つよりは洞穴だった。奥に壁が見える。

「おかしくないか」

おれは夢を見ているのだろうか。頬をつねつてみたが、しつかり痛かつた。リウヒもカスガも呆然としている。

「ここはどこ……」

その時、間延びした動物の鳴き声が聞こえた。弾かれたように三人が振り返ると、口バみたいな馬を連れた男が、のんびりと赤い道を歩いてくる。変な服を着ていた。レントゲンを撮るときに着せられるような上着に、ゆつたりしたズボン。そして帯を締めている。カスガがその男に駆け寄つて、ここはどこかと聞いた。男は驚き、意味不明な言葉を連発しながら口バに乗つて駆けて行つてしまつた。

「外国人？」

カスガが真つ青な顔をして、戻つてくる。

「今の言葉、聞いた？」

「何でいつていたの、今」

シギは知つてゐる、その言葉を。大学の授業で習つた。何を言つていたのかは分からぬ。でも、知つてゐる。

「こ……」

そのカスガの声はほとんど枯れて、掠れていた。

「古代語だつた……」

古代語は、五百年も前にジン国がティエンラン国を滅ぼした時に消滅した。今、現代で暮らす国はかつてティエンランだったが、ジンだ。そして、カスガたちが普通に使っている言葉も、ジン語だ。ということは、エリはティエンランなのか。もしかして、ぼくたちは

「タイムスリッ…」

「いやいやいや…」

リウヒとシギが声を上げた。

「タイムトラベ…」

「いやいやいや…」

再び、二人は必死になつて声を上げる。

「ないよ！ あり得ないよ、そんなの！ 映画じゃないんだから！」

リウヒが声を荒げる。悲鳴に近かつた。

「とにかく、エリでウダウダしても、しょうがない。あそこにはいかないか」

シギが顎をしゃくつた先は、白い壁が連なる町らしきところだった。かなり大きい。

「行こう」

「うん」

三人はほとんど呆けながら、よたよたと歩きだした。

歩けども歩けども、白壁は中々近づいてはくれなかつた。おおよそ一時間ほど歩いて、ようやく到着したはいいが、今度は門までが遠かつた。その白壁は山のふもとを囲むように半円形状になつていて、一つしか門が見当たらなかつたのである。丁度、橢円の先端にあつた。

疲労の為に三人ともうな垂れて、下を見ながら歩を進める。唯一の救いは、吹く風が心地よいこと、日差しが緩やかなことだった。空を飛ぶ、鳥たちの鳴き声でさえ、疲れた体には耳障りに聞こえた。

「ああっ！」

大きな門の下についたカスガたちは、今度は思わず叫んでしまった。石畳で整備された町が広がっており、自分たちがいる門から真っ直ぐ大きな通りがある。両側には柳のような木々が、通りに沿つて植えられていた。それよりも通りの先に見える建物である。

山の中腹にあるそれは、遠目からでも分かる巨大な城だつた。屋根が太陽を浴びて燐然と輝いている。中央にドンと構える平屋造りの建物を中心に、右手に小山が密集しそれぞれに小さな宮が建つている。それをぐるりと取り囲むように橿円形状の細長い建物がある。対する左側は、品のある住宅地のように家がぎらぎらとならんでふもと近くまで続いていた。「こちらもそれらをぐるりと取り囲んで半円形状の建物が立っている。

大口を開けて城を見上げるカスガたちに、門番らしき男がなにやら話しかけてきた。

「すういだろう。我が国が誇る、天の宮だ」

「こ……こ……ここはティエンラン……なんですか」

「ああ、そうだよ。ようこそティエンランへ」

門番は一ノ二ノ三している。自慢の天の宮に、驚愕した旅行者がよほど嬉しかつたのだろう。

「カスガ……」

心細そうなリウヒの声に、我に返つた。

胸が高鳴る。ぼくは時代を超えて憧れの国にいるんだ。

「ぼくは今、ティエンランにいる！」

そう叫んだ後、カスガはぶつ倒れた。

「ぎやー！ カスガ！」

リウヒは飛び上って仰天した。こんな訳の分からぬテーマパークで、頼りの男が目の前で倒れたのだ。駆け寄つて抱き起こすと、その顔は幸せそうに笑っていた。

「ちょっと、起きて！ ねえ、起きてよー！」

シギも不安そうにカスガの頬を叩く。

「ムカつく顔でねんじやねえよ、おい、起きろー。」

先程カスガと話していた男が、心配そうに何やら話しかけてきて、しきりに身ぶりでついてこいと言つている。

「なんて言つているか分かる？」

「多分……泊まれる所に案内してくれるみたいだ」

カスガの腕をシギが抱えて、リウヒがそれを助けつつ支える。そして素直に男について行つた。ぐつたりしている体を支えて歩きながら、町の人々が物珍しそうに自分たちを見ている事に気が付いた。みな古代の民族衣装のようなものを着ている。

ここはテーマパークじゃなくて、民族博物館？それとも、町^ビと口

プレイヤーなのか？

いやいや、全てがドッキングした新しいイベント会場か？みんな古代マニアなのか？

ああ、どうでもいいから、早く家に帰りたい。自分の居心地のよい部屋へ。

こんな変な所、もう嫌だ。しかし、カスガは目を覚まさない。

男はある建物に入ると、リウヒたちを手招きした。主人らしき親父に何かを説明し、上に来いと身振りで言う。

一室を開けると、そこは質素な部屋だった。粗末なベッドが三台、中央に小さなテーブルとイスが一つ。シギがベッドの一つにカスガを横たえる。男は笑顔で一言一言言つと、そのまま出て行こうとし

た。

「あ、あの！　ありがとうございました！」

リウヒが頭を下げる。シギも下げる。男は一瞬びっくりしたが、いってことよ、という風に手を振ると、扉を閉めた。シンと静かになる。

「ああ、カスガ……」

相変わらず、笑顔で伸びている男の頬を撫でる。

「しばらくしたら、起きるだろ？　それよりも、ヒヒ、ビニードと思つ」

シギの顔色も悪い。蒼白だつた。

「き……巨大テーマパーク？」

「そうだよな。どつかの国のテーマパークだよな……」

二人は窓に走り寄ると、焦つたように首を巡らせる。通りには娘の一人組や、男が歩いている。子供が団子になつて声を上げながら走つて行つた。みな、リウヒたちのような格好をしているものは一人もない。古代民族衣装だつた。

遠くに見える城は、相変わらず存在感を放ちながら鎮座している。それは歴史の教科書で見たティエンランの宮廷復元図とよく似ていた。

「ちょっと懲りすぎだよね」

言葉も古代語、衣装まで徹底している。入場料もいらなかつた。すぐお金はかかるてそうな所なのに。

「でも、やっぱり変じやないか」

テーマパークにありがちな、作り物めいた感じが全くない。アトラクションもない。第一、このホテルのそっけなさといつたらどうだ。忠実すぎるだろ？　どつかの国ならどうして言葉はティエンランの古代語なんだ。それにビルや現代の建物が全くない。

「あの洞窟で、なにが起こつたんだ……」

「入つて行つた時は、大分奥に行つて、何かに引っ張られるように落ちた」

「目が覚めたら、お前の貧乳があれの顔に当たつていた」

リウヒがシギの頭を思い切りはたいた。気にせずシギは続ける。

「洞窟をでたら、この訳の分からぬ外国に來ていた」

「古代の衣装、建物、宫廷、町並み、言葉」

「カスガはティエンランにいるつて叫んだ」

「ああ、もう、頭がパンクしそう！」

藍色の長い髪をかきむしり、リウヒが悲鳴を上げる。

「あれ、ちょっと外に様子を見に行つてみる」

シギが窓から離れる。

「えつ、あつ、ちよつと、おいて行かないでよ」

「お前はカスガの横にいろ。すぐに戻るから」

そのまま、戸の向こうへ出て行つてしまつた。

「カスガあ……」

ようよると、ベッドに寝ている幼馴染の元へ行く。カスガは呑氣に寝息を立てていた。

ここは、本当にティエンランなんだろうか。そう思う方が自然な気がする。

ではわたしたちは、時空のはてへ飛ばされたのだろうか。

リウヒは頭を振る。

まさか、そんなはずはない。今まで平凡に生きてきて、事件らしいことも体験しなかつた。普通の生活を普通に営んできた。大勢の中に埋没した一人だ。

ゲームやマンガや映画の世界では、選ばれた人間だと特別な能力をもつた主人公が、過去に行つて世界を救つたり、大活躍をしたりする。

でも、わたしたちはそんな大層な人間じゃないんです！　ただの女子大生と、古代オタクとナンパ野郎なんです！　だから家に返して！　頭を抱えて、足をばたつかせたりウヒはほとんど気が狂いそうだった。

「リウヒ？」

「カスガ！ 気が付いたの？」

ガバッとベッドによると、目を開けてぼんやりと幸せそうな声を出した。

「とても楽しい夢をみたよ。リウヒとシギと二人で、ティエンランにタイムスリップしたんだ。あの宮廷を見られたんだよ。すごく嬉しかったんだけど、そこまでしか覚えていない」

「そうだよね、これは夢だよね！ 現実にはあり得ないもんね！」

「どうしたの、リウヒ。顔が怖いよ。それにここはどこ……」

リウヒは男連れられて、ここに来た事を説明した。今までグルグル考えていた事も全部。

カスガは黙つて聞いていたが、その顔は歡喜に輝き始め、飛び起き窓に走り寄つた。

仁王立ちになつて、しばらく停止した後感動したように体を震わせた。

「ああ、やつぱりここはティエンランだ！」

再びひつくり返ろうとする幼馴染を、リウヒは慌てて揺さぶる。

「やめてえ！ また別の世界に飛び立つてしまわないで！ 落ち着いて！ 落ち着こう！ いや、まずわたしが落ち着け！」

「あわわ、痛い！ 痛いよ！」

「お前ら、なにやってんのぉ！」

帰ってきたシギが仰天し、慌ててリウヒとカスガを引き離す。

「じめん。ちょっとパニックになっちゃって……」

咳きこむカスガの背中をさすりながら、リウヒが申し訳なさそうな顔をした。

「どうだつた、外は？」

シギは首を振る。

「ここにはティエンランだ。テーマパークなんかじゃなかつた」

自分と同じ、現代の格好をしている者は一人もいなかつたし、水道や電気、交通機関もない。井戸から水を汲んでいた。片言の古代語でここはどこかと聞いても、帰ってくる返事は同じだつた。

「じゃあ、タイムスリップしたこと……？」

リウヒが呆然としたように呟つ。

窓の外から鳥の鳴き声がする。顔を上げると、空が夕暮れに染まっていた。

「あの洞窟に行ってみようぜ」

また三人で飛び込めば帰れるかもしれないだろ。シギが呟つと、リウヒも頷いた。

「帰らなきや」

「明日にしようよ。今、むやみに行って道に迷つたらどうに大変な事になるかもしないよ」

「だけど、おれはバイトがあるんだよ。遅刻なんてしたら店長に怒られる」

「何時からなの？」

「六時」

「もう六時だよ。うまいこと現代に帰れたとしても間に合わないよ」

カスガがケータイをしまいながら言った。

沈痛な沈黙が広がった時、リウヒの腹が鳴つた。ギューキュルルと飯を催促している。

「いや、その、あの、生理的欲求が」

シギとカスガは絶句し、それから同時にため息をついた。

「今はお前のその香氣さがうらやましいよ」

「リウヒはどこにいってもリウヒだよね」

* * *

「どこに座つてもいいって」

取りあえず下に降りて、ヒゲの親父と流暢な古代語で話していた力スガが一人の元へ帰つてきた。どうやらここは宿屋で、一階は飯を食べたり酒を飲んだりする所、二階は宿泊場所となつてているらしい。

「お金がないつていつたら、簡単な手伝いをしてくれたら大丈夫だ

つて。飯を先に食えつていつてくれた

「ここは親切な人が多いね」

感心したようにリウヒが言う。宿に連れてきてくれた門番といい、昼間、外でここはどこだと聞いた人たちも確かに親切だつた。

「豊かな国だからね。住んでいる人たちも余裕があるんだろうね」「あんまり信用するなよ。うまい話にや裏があるってゆうから」

ヒゲ親父がなにか話しかけながら、飯を持ってくれた。

「美味しいぞ！」

リウヒが歓声を上げる。

ホカホカの白いご飯に、野菜がたっぷり入った汁、分厚い肉と漬物、そして蒸した芋だった。

「いただきます！」

猛烈な勢いで平らげてゆく。その顔はとてつもなく幸せそうで、まるで子供のようだ。

親父はびっくりして見とれていたが、なにか言つと笑いながら奥へ引っ込んでいった。

「なんて言ったんだ」

「そこまで喜んでもらえるなんて光榮だつて」

シギとカスガも箸をとる。滅茶苦茶につまかった。素材がいいのか、腕がいいのか、それともよほど腹が減っていたのか。

「科学調味料が一切はいってないからねー」

「無農薬なんだろうねー」

見事にたいらげた三人は、その後台所を手伝つた。慣れないことだらけだつたが、リウヒはともかく男二人は要領と器用は良かつたので親父に重宝されていた。

そして、風呂に戸惑つた。風呂場は、ある程度のブースのような間隔で、木板で仕切られており、カーテンみたいな布が付いていた。其々にタライが一個ずつ置いてある。勿論シャワーなんてものはなく、シャンプーやリンス、石鹼もなかつた。浅いタライに湯を張り、その中に入つて糠袋をつけて体を洗つていく。歯ブラシもない。塩

を指に取り、直接歯に擦りつける。

全てを終わらせ部屋に戻ったシギたちは、ぐったりと疲れていた。

「ドライヤーも、化粧水もない……」

「テレビも、パソコンもない……」

せめてパジャマに着替えたい、とリウヒが泣きそうな声で言つ。

「あつ、そうだ。カスガ」

走り寄つて、赤い顔してその耳に何か囁いた。

「売つてないよ。この時代の人はそんなものはいてないしさ」

「わー！ わーっ！」

真っ赤な顔して、手を振るリウヒにシギがニヤニヤした。

「もしかして、お前パンツはいてないの」

「だつて、だつて、お風呂に入つて新しくないのをはぐの、嫌だもの！」

「それはおれに襲つてくださいっていつてるんだな」

「どうしてそうなるの！ この変態スケベ男！」

「はいはい。もういいよ」

リウヒがベッドに潜り込もうとして、今度はそこで暴れ始めた。

「あああ、もう！ 髪が乾いてないのに、寝るのは嫌！」

「なんで？」

「決まつてるでしょ、傷んじやう」

女の子は大変だね。男でよかつた。シギとカスガは顔を見合せた。ふと、ポケットに手を突っ込んだ。ケータイを見ると、十一時を回っていた。電池はあと二つしかない。

「おれ、ケータイの電池切つとくわ。もつたいないしな」

すると二人もごそごそとケータイをとりだして電源を切つた。

煙草を吸おうと、パッケージを取り出す。窓辺にいくと、ふと大きな臭い匂いがした。視線を巡らしたシギの目が、驚愕に見開く。

「どうしたの？」

「きつ……富廷が燃えている……！」

「ええっ！」

「うそつ！」

カスガとリウヒも窓辺に走り寄り、三人で身を乗り出した。昼間、その圧倒的な存在感でシギたちを驚かせた宫廷は、天に昇るような炎を上げて燃えていた。

「リアルだ……。リアルすぎる……」

リウヒが、目線をそらさず呆然と言つた。

大きな音をたてて扉が開き、リウヒは瞬時に目を覚ました。あの老人が来たと思ったのである。枕の下に用意していた別珍の袋を素早く左手で掴むと、低い声を出した。

「誰だ」

「トモキです」

薄布が捲くられて、青い顔をしたトモキが息を弾ませていた。

「謀反が起きました。ここから逃げます。急いでください」

驚いている暇はなかつた。急いで別珍の袋を帯下に差し込む。一人で部屋を飛び出した。

「どこに向かうんだ」

「城下へ！」

叫び、走るトモキの後を必死になつてついてゆく。外にでて、息を呑んだ。本殿が燃えている。炎が絶叫するように、天に舞う。まるで紅い巨人が喜んで踊り狂つていていた。

いきなり、地響きのような音が聞こえた。思わず振り返つたリウヒは声を上げ、立ち止まつてしまつた。

本殿が崩れた。紅い巨人は、調子に乗つて足を踏みならす。

トモキに促され、再び走りだした。正門をぐぐりぬけ、長い階段を降りる。足が縛れそうになるのを堪え降りると、そこは蜂の巣を突いたような大騒ぎであった。みな、一様にどこに向かえばいいのか分からず、どうしたらいいのかも分からず、大声で叫びながら右往左往しているだけだ。下端の者たちだった。

「外へ！ 城下へ避難せよ！」

リウヒが叫ぶ。彼らはうろんな目で自分を眺め、それから弾かれたようだ。大門へ向かつて走り出した。夢中で走っている内に、息が上がり始めた。気が付くとトモキがいない。

立ち止まろうとした瞬間、ものすごい勢いで上から掴まれた。一瞬

息が止まつて、体が恐怖に震える。身をよじつて暴れると、後ろからトモキの声がした。

「暴れないでください。今落ちると死にますよ」

猛然と走る馬の上に押し込められたりウヒは、安心したが密着する体で悪寒が止まらない。そのまま、馬は真っ直ぐに大通りを走つて行つた。

城下の野次馬を蹴散らして、トモキは馬を走らせる。途中、不思議な衣を着た三人組を曳きやうになつた。

「あつ！」

彼らは泡を食つたように、声を上げて逃げ惑つた。一瞬で遠ざかる。トモキを見上げると、今まで見たこともない必死な形相をしていた。怖いくらい真剣な顔だつた。

この人のそばにいれば、わたしは大丈夫。

しかし、その心とは裏腹に体の震えは止まらなかつた。

夜が明けた。都から大分と離れて、トモキも安堵したのだろう、馬を歩に変えた。

が、リウヒはそれに気が付かないほど、苦しかつた。震えが酷くなつてゐる。息苦しい。ほとんど肩で息をしていた。

トモキが馬を降りて手綱をとつた。とたんに息苦しさは消えた。呼吸が楽になる。

その代り、悲しみがじわじわと広がつてきた。トモキは好きだ。大好きだ。暗闇に閉じこもつていた自分の手を引いて、光の中へ導いてくれた。ものすごく感謝もしている。だけど、体が拒否をする。しかし、それをどういつていいのか分からずに、黙つて下を向いているしかできなかつた。

ふと、後ろを振り返つた。

美しい天の富は消滅している。ただ黒い煙が、立ち昇つているだけである。

「富が……」

リンたちは無事なのだろうか。カガミたちは、シラギは。

昨日の昼は、あんなにのんびりしていたのに。リンたと、恋の話を

をして笑っていたのに。

馬の速度が上がった。トモキが手綱を引っ張っている。

「これから、どこへ向かうのだ」

「シシの村へ」

トモキがリウヒを見上げて、にっこりと笑った。

「ぼくの生まれた家へ」

「生きてよかつたー。マジで死ぬかと思った……」

リウヒがまだ言っている。カスガは動悸が未だ止まらない。ほとんど一睡も出来なかつた。

昨夜の火事をよく見ようと大通りにでたカスガたちは、ものすごいスピードで突進してきた馬に轢かれそうになつた。まるでトラックが突っ込んできたような迫力に、ちびりそうになつた。慌てふためいて逃げたものの、馬はそのまま走り去つていつた。

だけど。

ベッドに胡坐をかきながら思う。

あの火事は、ジン国に戦のものではない。それならば、この町も焼かれているはずだ。そこでカスガは愕然とした。

ここは、いつの時代のティエンランだ。憧れの国にいる事に浮かれて、一番大事な事を忘れていた。

火事。謀反。間一髪逃げた王女。

「ねえ、馬に乗っていた男の人、カスガにそつくりだつたよね」

「あのスピードで、よく男の顔なんて分かつたな」

「わたし、動体視力はいいんだ」

「世界に自分とそつくりの……おい、カスガ！ どうした！」

喘ぐように、カスガは呼吸していた。喉がヒューヒューとなつてい

る。

顔色を変えて駆け付けた一人に、苦しそうな声を出す。

「ねえ、リウヒ。昨日の馬には、男一人だった？」

「えつ？ ええと、ええと……」つづん、もう一人いた。二人乗つていた

「そのもう一人は、どんな人だった……？」

「ええつ？ どんなつて……」「

「どんな人だつた！」

ほとんど吠えるようなカスガに、リウヒは驚いて身を引き、シギが庇うようにリウヒの前に腕を出した。

「落ち着けよ、お前どうしたんだよ」

「……な、長い髪だつた。多分女の子だと思つ。男の人に抱きかかえられていた」

「リウヒだよ……」

シギとリウヒはきょとんとして、田を合わせた。わたし？ とリウヒが自分を指す。

「違う。王女だよ。ぼくらは伝説の王女とすれ違つたんだ」突然カスガが絶叫して、突つ伏した。シギとリウヒは飛び上つて、ヒツシと抱き合つた。

「あああ、もう！ ケータイで撮つとけばよかつた！ ぼくのバカバカバカバカ！」

「カスガ、カスガ。落ち着いて」

「あの速さで撮れるわけないだろ。下手したら轢き殺されるところだつたんだぞ」

二人の声も、カスガには届かなかつたらしい。突つ伏したまま両手で頭をポコポコと叩いている。

しばらくたつて、ようやく我に返つた。

「ごめん。ちょっと興奮のあまり……」

「うん、びっくりした。色々と」

「おれも」

だけどさ、とシギがいぶかしむ。

「あれが王女とは限らないだろ？。ただ、今の時期に宮廷から逃げたつてだけで」

「いや、教育係のトモキって人が一緒に馬で逃げたんだよ。王女の兄的な存在で、その成長に一役買つたんだ。後に、初の民間出の宰相となる。トモキの弟が、これまた……」

「カスガ、話がずれている。昨日の馬に乗っていたのが、トモキと王女だつたわけ？」

「そう」

「じゃあ、カスガはそのトモキにそっくりってこと？」

「そう……なるのかな。ぼくはちゃんと見たわけじゃないから、分からぬけど」

「おれも全然分からなかつた」

もしかしたら、カスガの遠い前世かもしけれないねー、とリウヒが笑う。

「さてと。朝飯くつて、帰る」

シギが立ちあがつて伸びをする。

「そうだね。早く帰らなきや」

リウヒも腰を上げた。

「なんで帰るのさ」

同時に二人が振り返つた。うろんな田でカスガを見ている。

「今から面白くなるのに、なんで帰るの」

「帰るよー。当たり前でしょーー。わたしたちの住む所は、現代であつて古代じゃないでしょー！」

「おれも、おれの生活があつちにあるんだよー。学校もバイトもあるし、母親だつて向こうにいるんだよー」

「じゃあ、一人で帰ればいい。とカスガが腕を組んで、どつかりとベッドに座り込んだ。

「もう、カスガ。我儘言わないでよ。帰るよー」

ほとんど泣きそうな声でリウヒがカスガの襟を掴んで揺さぶつたが、

動かない。

「ねえ、お願ひ」

動かない。

「ほつとけよ。こじりばり」

突き放すようにシギが言つて、リウヒの手を引いた。

「じゃあ、いくからね。本当にいくからね」

「うん。いつてらつしゃい」

さすがにリウヒはムツとしたらしい。シンと横を向くと、の向こうへ出て行つた。

数秒後、ものすごい勢いで帰つてきた。

「どうして、一緒にこないの！」

「ぼくはここにいるつていつたらう。早く行きなよ。シギをまたしているんだろ？」「

「カスガあ……」

「向こうに帰つたら、ぼくの両親によろしく言つておいて」

「もう知らない！ 馬鹿！ 馬鹿カスガ！」

涙をためて、走つて行つてしまつた。

窓からのぞくと、通りで泣いているリウヒの肩を抱きながらシギが何かしら言つている。本当にこうして見ていると、あの二人は恋人同士みたいだ。中々にお似合いじゃないか。そのまま歩いて行つた。どうやら朝食を取ることを忘れているようだ。あのリウヒが。

カスガは伸びをして、深呼吸した。空気がおいしい。夏真っ盛りだというのに、纏わりつく湿気がなくてカラツとしている。

朝ごはんを食べて、その辺を探索しよう。飽きたら、宿の親父を手伝おう。

弾むような足取りで、階下に向かつ。

あの一人は、きっとここに戻つてくれる。現代に帰れずに。何となくだが、確信に近かつた。

何をやっても無駄だった。一人で走ってみても、立ってみても、ジャンプしても、後ろ歩きで歩いてみても。やけになつてスライディングまでしてみた。

ただ、服が泥だらけになつただけだった。

「やっぱり三人そろわなきや、無理なのかな

「多分」

洞窟の中で、疲れ果てて座り込んでしまった。シギも壁にもたれている。

力スガの馬鹿。

腹たらしいような、泣きそうな悲しみが胸を刺す。あんな力スガ、初めてだつた。生まれて初めて拒否された。

「おい、血が出るぞ」

その田線をたどると、腕に擦り傷ができ、血が滲んでいた。

「ああ、多分睡でも付けときや治る……」

と、シギがスタスターとやってきて、リウヒの田の前にしゃがんだ。腕をとつて、いきなり舐めた。

「な、なにするの！」

顔に血が上るのが分かつた。手を引こうとしても、びくともしない。

「大丈夫だから！ 後で洗えばいいから！」

「ああ、こら、暴れるな。擦り傷甘くみていろと、腫んで痛い田みるぞ」

「えつ……」

それは嫌だ。しぶしぶ、腕の力を抜いた。

シギの舌は、自分の腕を味わうよつこゆつくりと舐める。奇妙な感覚が体を駆け巡った。

「んつ……」

声が出た。男の口は半分開いていて、舌が出ている。白い肌の上を這っている。

それは大層色氣があつて、リウヒの顔は赤くなつた。心臓がドキド

キして止まらない。

「あつ……、や……」

うおおい、なんて声を出しているんだわたしはー。思わず田を開じてしまふ。すると、舌の感覚はますます鋭くなつて、奇妙な感覺もありますます強くなつてきた。

「なに？ お前、感じてんの？」

目を開けると、シギがこちらを見ていた。例のからかいの田で嫌らしく笑つている。今度は恥ずかしさに、頭に血が上つた。

「馬鹿！ そんなんじゃなこ、ちよつどびっくりしただけでー。」

「へえ」

腕を振り切ると、今度は素直に離れた。

「あの、ありがとう……。ねえ、ビーナスも無いから、とつあえずまた宿に戻るわー。」

「だな」

立ち上がるとい、コウヒコ手を差し伸べた。

「何？」

「助け起してやれりつてんだよ。親切心の分からない女だな」「すみませんね」

素直にその手を取る。引っ張られて立ち上がり、一人は歩き出した。手を繋いだまま。

わたし、なんだこの男と手をつけないで歩いているんだらつ。からかつてこるのは分かつてこいるのに、なんでこいつものように怒れないんだろう。

空が遠く青い。ペールルルルーと鳥が鳴きながら畠間に旋回していく。

多分、疲れてもうびづでもいいからだ。朝じはん食べそこなつて、お腹がとつてもすいでいるし、好きでも何でもない男と手を繋いでいることくらい、腕を舐められた事くらい、どうだつていい。

心の隅つひに小さく芽生えた甘い気持ちは、無視することとした。

「お帰り」

疲れ果てて宿に帰つた二人は、カスガのその姿を見て絶句した。さつそく古代の衣を着て、時代に馴染んでいる幼馴染にリウヒがどがつた声を出す。

「なに？ その恰好。馴染み過ぎて気持ち悪い」

「ありがとう。褒め言葉として受け取つとくよ」

ゲンさんが、お下がりをくれたんだ。君たちの分も貰つといつたから、着替えたら？ と上を指す。この男は、自分たちが帰れないことが分かっていたのだ。しかも誰、ゲンさんって。腹が立つたが、今日はもうあの洞窟にいく元気はない。今夜何とかカスガを説得して明日、また行こう。何より、この泥だらけの服を脱ぎたかった。

「いたせりつくせりで悪いね」

皮肉を言つたつもりだったが、カスガはニコニコしている。部屋の中には、一着の服が並んでいた。それを広げて、じっくり観察する。昨日、今日と見た限りでは、男女でどうやら服が違う。ヒダの入つた長いスリップのようなものに、長着を巻きつけ襟を左が上になるように左右を合わせる。そして帯を締めるのが女性。男性はスカートではなく、ゆつたりしたズボンのようなものだ。後は一緒である。

どちらにしても綿でできていた。帯は紺と濃い黄色だつた。

「おれはこれだな」

シギがさつさと服を取ると、シャツを脱いだ。いきなり裸の上半身が出現して、リウヒは口から心臓が飛び出そうになつた。細いが筋肉がしつかり付いていて、均等が取れている体だった。

「なに見てんだよ」

「いつ、いきなり脱がないでよ！」

慌てて、自分の分を取つて隅に移動する。服を脱ぐうと手にかけて

振り返ると、シギはリウヒに気にする事もなくベルトを外そうとしていた。急いで顔を背ける。

どうしようか、トイレで着替えようか。いや、臭い。

風呂か。いや、清掃中だった。

ここで着替えるしかない。

「とにかくないでね」

言いながら、勢いよくシャツを脱ぎスリップを被つた。モノモソとブラを外す。ささやかな胸だが、なんだか心もとなくて不安になる。長着を巻きつけカーゴパンツを脱げうとして、ふと自分はパンツをはいていなかつたことを思い出した。

わたし、もしここで暮らすことになつたら、ずっとノーパン、ノーブラなんだな。侘しい気持ちになりながら、帯を締める。丈はかなりの長さで、踝の辺りまであつた。シャツとカーゴを畳んで、振り向くと、シギがストレッチをしている。ビーッや、ひーひーは見ないでいてくれたようだ。

「靴はないのかな」

「多分、身分の高い人しかはかないんじゃねえの。取りあえず、下に行こうか」

「うん」

歩き出そうとして、裾が縫れて蹴躡き、したたかに膝を打ちつけた。

「痛……」

「なにしてんだよ」

「すぐ歩きにくい、これ」

リウヒは滅多にスカートをはかない。ましてや超ロングスカートなんではいたことがない。

踝まであるこの丈は、歩きにくくて仕方がない。

「蹴るようにして歩けば? ウエディングドレスを着た時、蹴るようにして歩いたって女友達が言つてた」

実践してみると、確かにその方が歩きやすかった。しかし、女友達つてなんなんだ。あんたには既婚者の女友達がいるのか。胸がチリ

ツとしたものの、何も言わなかつた。

下に降りると、カスガが髭親父と談笑しながら台所で豆のさや抜きをしていた。

「ああ、二人ともすゞしく似合つてゐるね
嬉しそうな顔に再び腹が立つたが、もう言い返す気力もない。シギも同様らしく、

「なんか手伝う」

と台所に入つて行つた。リウヒも後に続いた。

* * *

夜、二人は必死になつて、カスガへの説得を続けたが、頑固なこの男は首を縊に振らなかつた。

「ぼくは、ここに残りたいつていつてるんだ。あの王女の上意の礼を、見てみたい」

「それは一年後なんだろ。それまでここにじるつてゆうのかよ」「現代つ子には辛すぎるよ。わたしたちのすむところは、あつちなんだよ」

話しさ堂々巡りで中々、終着点が見えない。ついにリウヒが泣きだした。

「お願い、カスガ。明日、一回だけでいいから、一緒にあそぶにいこう」「こう

しゃつくりをあげながら、ベッドによじ登つてカスガに抱きつく。その体にカスガの手が回つた。なんだか甘い恋人同士のように見えて、シギは思わず嫉妬してしまつた。抱きつくことはないだろ、抱きつくことは。カスガも腕まわしてんじやねえよ。

「でも、やつぱりぼくはここに残りたいんだ。外の世界に出た王女をこの目で、実際見られるチャンスだし」

「明日で無理なら、もう諦めるから。シギもそれでいいよね

「しょうがねえな」

それよりも、早く離れろってんだ。胸がむかついて気持ち悪い。

「分かつたよ」

カスガがため息をついた。

「明日、一緒にあの洞穴へいこう。でも、もし帰れなかつたら、一年間ここにいる。それでいいね」

「うん。ありがとう、カスガ」

嬉しそうな声をだして、リウヒが離れた。顔を洗つてくる、とそそくさと扉の向こうへ消える。ちらりと見たその顔には、涙の跡はなかつた。あいつ、ウソ泣きを使つていたのか。シギは笑いだしそうになつて、慌てて口の中を嚥んだ。

女つて怖えー。

一方の幼馴染にだまされたカスガは深刻な顔をしている。

「リウヒがあんなに気弱にいうなんて、初めてだ」

痙攣する頬を隠すため、煙草を掴んで窓際にゆく。最後の一本。煙を深く吸いながら、ふと脳間の事を思い出した。洞窟で、腕を舐めた時に上げたりウヒの小さな声。妙に可愛らしくて、つい欲情してしまつた。そんな場合じゃないだろうと正気に戻り、軽口で誤魔化したものの、なんとなく離し難く、手を繋いで宿に戻つた。いつもはうるさい女も静かに黙つていた。

この部屋で着替えた時。その後ろ姿をじつくりと眺めた。勢いよくシャツを脱いだ裸の背中はなまめかしく、細いながらも腰はなだらかな曲線を描いていた。胸は見事に貧乳だったが、中々に小ぶりで可愛らしいと鼻の下がのびた。

リウヒが振り返る直前、ストレッチをする振りをすると、見られていた事に気が付きもせずに、「靴はないのかな」と無邪気な質問をしたのに微笑しさを感じた。

おれは、あの子を気に入つてゐるんだろうか。いやいや、今の状況がおかしいから田につくだけだ。第一、シギの好みはポチャ系だ。細い女なんて固いだけで全然柔らかくないじゃないか。そうだよ、異様な状況だからただ、あいつが目立つだけだ。

一人納得して、吸殻を携帯灰皿にしました。

翌日、再び洞窟内で知恵の出る限り頑張つたが、やはり無駄だった。

「ああ、もう嫌！」

泥だらけになつたりウビが頭をかきむしり、座り込んだ。

「もういい。わたしあこで暮らす」

「馬鹿、何言つてゐんだよ、お前、自分の親や心配している人がいるんだもん！」

「だつて、帰れないじゃん」

「それは……」

それでもシギは気になる。母は心配しているだらう。バイトは、大学の単位は、「なんとか現代と連絡が取れたらいいんだけどね。ケータイは圈外だし……」

本当にこの古代で生きていかなければいけないのだろうか。想像がつかない。でも、帰れない。諦めるしかなかつた。

「宿に帰ろうぜ」

その声は、自分で驚くほどあつたつしてゐた。ほとんどやけつぱちといつていい。

「となると、君たちは古代語を習得しなきゃいけないね」

カスガが嬉しそうに言つ。うずつ、とシギとリウビは首を絞められたような悲鳴を上げた。

「いつまでも、ゲンさんにお世話になつてゐる訳にいかないし、他でもバイトを探そうよ。実践学習、能力もアップ、金も入る。一石三鳥じゃないか」

踊るようなカスガの後をついて歩きながら、シギとリウビはがつくりとつなだれた。

「ドナドナでも歌いたい気分だ……」

「思いのほか、思いのほかでした……」

記憶というものは、匂いとともに思い出すのかもしれない。トモキに連れられてその生家に入った瞬間、懐かしい匂いがリウヒを包んだ。

それぞれの家がもつ、独特的の匂い。

「あ……」

わたしは以前ここにいたことがある。

ここに住んでいた。

そうだ、ここには帰りたくて仕方のなかつた場所だ。

嬉しさもつかの間、記憶は連鎖するよつに、思い出したくなかったことまでやつってきた。

闇間。老人の顔。耳にこびりつく笑い声。

あの手、あの感覚、あのおぞましさ。

幸せな気持ちは瞬時に消え、ねつとりした闇が足元から這い上がってきた。

かあさんの顔を見ても、心配そつなトモキの声も聞こえなかつた。

「トモキ、もう寝たい……」

夕餉の後そういうと、子供部屋に案内された。粗末な寝台が一つ、

小さな小さな寝台が一つ。

ああ、あれはわたしの寝台だ。毎朝、にいちゃんを起こした。トモキはにいちゃんとだつたんだ。

「こ……」

寝台を整えているトモキの背中に手を伸ばした瞬間、その腕に汚い黒いものが付いているのを見て、リウヒは息を呑んだ。汚れている。わたしが汚れている。にいちゃんに触れない。

「リウヒさま。大丈夫ですか？」

心配そうに覗きこむトモキに、慌てて眼をそらして蒲団に潜り込んだ。お休みなさいませと声が聞こえたが返事をしなかつた。

帰りたくてしかたのなかつた場所は、苦痛の場所になってしまった。古い記憶は鬼火のようにリウヒを取り囮み、じわじわと苦しめいつた。ついには熱まで出た。あがいても、あがいても、闇の中に引きずりられてゆく。

助けて。誰か助けて。

それでも、ふと目を覚ました時、トモキやかあさんが横にいた。誰かに優しく髪をかきあげられた。トモキの手。かあさんの手。

その日も、顔に張り付いている髪を誰かの手がそつと拭ってくれた。にいぢやんだ。安堵して薄田を開けると、その背は部屋を出ようとする。

不安になつた。置き去りにされる、そんな感じがした。フラフラする体を無理やり起こし、壁に伝いながら後を追う。

「まずは知ることが大事。そう教えてくれたのはカガミさん、あなたですよ」

外から馬の蹄と、トモキの声が聞こえる。またか。

「リウヒさまを頼みます」

「うん。頼まれた。行つておいで。無事を祈つているよ」

カガミの声が聞こえた。なにを言つているんだ、馬鹿オヤジ、勝手に頼まれるな！

「どこにいくのだ」

息をするのもしんどかつたが、精一杯の声を振り絞つてリウヒはトモキを睨みつけた。

戸口に立つてゐるリウヒを見て、トモキは顔色を変えた。

「お前はわたしをおいて、どこに行くと聞いている」

行かないで、わたしを置いてどこかに行つてしまわないで。

トモキは聞いてくれるはずだ、だつてわたしを一番に思つてくれている。

しかし、その思いは裏切られた。

「ここで待つていてください」

馬の首を巡らせてトモキは叫んだ。

「必ず戻ります」

そのまま、こちらを振り向きもせずに馬を駆けて行ってしまった。

砂煙だけがあとに残つた。

そんな。呆然と見送っていたリウヒはズルズルとその場に座り込んだ。カガミが慌てたように母を呼ぶ。

そんな、まさかトモキがわたしを置いて、どこかに行ってしまうなんて。

古い記憶が、闇が、また底からゆづくじと這い上がってきた。

思考とは関係なしに、後から後から溢れるように。

* * *

わたし、古代で生活するなんて思つてもみなかつた。
リウヒは宿のおかみさんに頼まれて、市場へお使いにいっている最中である。

あれから数日が経つた。宿の髭親父、ゲンさんは事情を説明すると、屋根裏部屋の部屋を格安で貸してくれると申し出てくれた。一階の部屋に比べると狭く天井も低いが、ちゃんとベッドは三つあり、小さなテーブルもあつた。

古代語はカスガの超がつくほどスバルタ教育のおかげで片言だけは話せるようになった。

「祭りに行きます……行きました？」

「学校に行きます……行きました？」

「違あーう！」

にわか講師は手でバーンと机を叩いて怒鳴つた。

「いいかい、古代語は失われたティエンラン語といわれているけど、厳密には違うんだ。この大陸は元々全ての国で、古代語を話していた。だけど、小国が集まつて形成されたジンだけは独自の言語が発展していったんだね。だから今の時代、古代語はティエンラン、クズハ、チャルカで話されている。まあ、一千年后は全てジン語に

なっちやうんだけど……」

「先生、熱弁しているところを『めんなさい』

「今日はこれ以上覚えられません」

しかし、講師の話は続く。

「ティエンランは太陽信仰だけど、それはこの地が農耕民族だからなんだ。太陽は西に消えて東から生まれる。だから、ぼくたちが当たり前に考える輪廻転生という発想が生まれた。太陽神エトという存在は後世のもので、今現在はただ「天」としか言わない。つまり天イコール神なんだね。収穫を祝う民の歌の中でも「おてんとさまにいのろかな」ってゆうフレーズがあるんだよ。ちなみにはつきり太陽神エトが確立されたのは、これから百年後の飢饉と伝染病のせいなんだ。なにか縋る物を作りたかったんだろうね」

「先生、止まつてください」

「もう脳みそ限界」

それでも、何を話しているかは理解ができるようになった。シギは、早速よそへバイトにいらっしゃるし、カスガはゲンさんのお気に召したらしく、宿の仕事を手伝っている。賃金ももらっているようだ。そしてリウヒは、ゲンさんのおかみさんから色々な事を教わっている。自分の壊滅的な料理の腕に呆れたおかみさんは、そんなんじや嫁の貰い手がないよ、と悲しげに首を振った。そして、この娘を教育する事が己の使命だと感じたらしい。徹底的指導をされている。現代でも、めったに台所を手伝ったことなかったリウヒは、時代を超えて花嫁修業をしていた。

白菜と人参と芋と葱と鶏肉。頭の中で何度もくり返す。メモはできない。この時代、紙は貴重品で庶民には手の届かないものだそうだ。市場への道へ折れようとして、いきなり名前を呼ばれて振り返った。カスガが、真っ青な顔して立っている。

「どうしたの、カスガ。そんな怖い顔して」

しかし、幼馴染は古代語をまくし立てている。なんでこんな所にいるんだ、あの家で待つていろつて言つただろう。

「なにを言つてゐるの？ おかしいよ、ちょっと……」

その腕に手をかけると、カスガは驚いたように身を引いた。そしてリウヒをマジマジと見て、違う人だと言つた。

「馬鹿な事……」

その顔を覗きこんだリウヒの顔も、青ざめた。

違う。この人はカスガじゃない。短いと思つていた髪の毛は後ろで括られている。

「あ、あなたは、誰？」

我ながら間抜けな質問だと思いつつも古代語で聞くと、トモキ、と返ってきた。心臓が飛び跳ねた。

じゃあこの人は、王女の教育者で、わたしたちを馬で轡き殺そうとした人か！

男は申し訳なさそうに礼をすると、早足で去つて行こうとした。が、兵らしき男たち数人に取り囲まれ、あつという間に連れ去られてしまった。

「なにあれ……」

周りの人たちも、呆然としてそれを見送つていたが、何事もなかつたよう日に日に戻つた。リウヒもしばらくぼんやりしていたが、再び歩き出した。

トモキは王女と逃げたはずだ。なんで都に戻つて来たんだろう。わたしを誰と勘違いしたんだろう。王女？ まさかね。リウヒは頭を振る。伝説の王女は、超美人だ。間違われるはずはない。カスガに聞いてみようか。いやいや、下手に聞いたらあの男の事だ。王女とその一行をストーカーしたいとか言い出すかもしれない。だけど、本当にカスガそっくりだった。

市場へゆく足を速める。早くお使いを済ませて帰らなきや、おかみさんが待つている。

「子守りですか？」

おかみさんは、にこにこして頷いた。知り合いの家が、子守りを探

していろいろから、行つてみないかと言つ。裕福な家だから、お手伝いさんは別にいるし、家庭教師もいるやうだ。

中々に樂そではないか。リウヒは了承した。

「リウヒがベビーシッター?」

屋根裏部屋で。カスガが笑いを噛み殺しながら酒を注ぐ。シギも猪口を口に付けながら苦笑している。

「どんなところなの、そこ」

裕福な商家で、子供の数は五人。その子供たちの遊び相手をすればいいそうだ。

「シギはうまくいくってんの?」

昼間は別々に行動をする三人は、カスガの古代語講座が終わった後にいろいろ話をする。テレビがない分、とにかく盛り上がる。こんな時間を過ごしていると、現代でカスガの家でつるんでいたときみたいだ。

お父さんとお母さん、元気かな。会いたいな。
ふと思つた。会えなくなると、無償に恋しくなる。

「……だから結構種類が少なくて……おにこら、リウヒ！
おれの話を聞け！ 自分から振つといて、なんだその態度は！」

いきなり首に手が回つて、引き寄せられた。

「ぎゃー！ ゲメンなさい！ 乙女にヘッドロックをかまさないで
——」

「乙女の部屋のどこに乙女がいる……」

「本当に君たちは仲がいいよね」

「カスガ、見てないで助けて！」

「はいはい。ぼく、もう寝るから。あとはお若こお一人で。おやす

みー」

「いやいやいや、カスガ！ ……ちよつと、ビニセわつてんの、

工口河童！」

「何だと、この貧乳娘！」

どこからか、犬の遠吠えが聞こえた。ティエンランの夜は更けてゆ

く。

* * *

夜明けとともに、起きて下に行く。井戸に水を汲みにゆき、かまどに火を入れる。

朝一番のカスガの仕事だ。現代に帰ることを諦めてから、数日が経つた。リウヒもシギも、この時代に徐々に慣れつつあると思う。それにしても、現代では当たり前のことが、今では不思議に思う。水は蛇口をひねれば出てきた。火はガス栓を押せば付いた。電気もスイッチをつければついた。今や、井戸に水を汲みゆく。火は火打ち石でおこす。夜はロウソクの灯りが頼りだ。とにかく体を動かさなければ、何もできない。

宿の一階は酒場も兼ねており、旅人だけではなく地元の人間も一杯飲みにやってくる。町中に独立した酒場もあるがシギ曰く「女が歌つてたり、舞台で小さなショートかもあって、宿よりはちょっと敷居が高い感じ」だそうだ。

シギは酒屋でのバイトをしている。結構色々な所に配達に行つたりして地理に詳しい。たまに酒をもらつてくる。

リウヒは、ベビーシッターの仕事を始めたが、どうも家庭教師の男と反りが合わないようだ。

「大学生でさ、すっごくわたしを見下してんの。年下のくせに！わたしも女子大生だつての！」

鼻息荒く文句を言つて、飲めない酒をあおり、うえーと顔を顰めた。宿の扉を開けて外に出ると、いい天氣だった。遠くに焼け焦げた宮廷の残骸が見える。

それは、青空の下ではやけに痛々しく思えた。

「おれたちの天の宮が、あんな姿になっちまつて」

「あ、ゲンさん。おはよつゝぞります。あの宮廷の中は、どうなつてこるんでしょうね」

勿論、知っているが、おぐびにも出さない。

「国王はご無事だそうだが、今はショウウギさまが政治を代行されて
いるらしい」

王族はすべて亡くなられたそうだ。ゲンさんは顔を歪めた。
「でも、上が誰になつても、おれたちの生活は変わらねえよ、さあ、
仕事だ」

微笑んで、カスガを促す。

変わらんだな、これが。宿に入りながら、心の中でほくそ笑む。
カスガは全てを知っている。なんだか自分が神さまになつたみたい
だ。上からものを見ているような優越感が心をくすぐった。
ぼくは歴史の傍観者なんだ。今現在、起こっている出来事、未来に
起こる出来事を知っている。なんて気持ちの良いことなんだろう。
この時、カスガは気付いてなかつた。自分たち三人も歴史の一部と
して、古代で生活している事を。

宿の食事を済ませると、リウヒは食器を台所に下げて、外に出た。バイト先の商家は、高級住宅街にある。大通りを歩いていると、否応なく宫廷の黒い残骸が見えた。修復工事はすでに行われているらしい。かすかに木を打ちつける音が響いている。

目的地に近づくたび、憂鬱な気分になつてくる。面倒を見ている子供たちは可愛い。十歳の少女を筆頭に、コロコロとリウヒに懐いてくれる。名前も覚えた。少女一人は、キキとネネ。少年たちは上から、ラン、クジャク、タイ。奥さんも、お手伝いさんのシゲノさんも良い人だ。ただ、ハヅキという家庭教師が嫌いだった。大学の授業との兼ね合いなのだろう、来る時間は口によつて違う。だから、心の準備ができないのだ。

物静かな少年なのに、なぜカリウヒにだけきつくなれた。あからさまに冷たい、見下したような態度を取る。

わたし、何かしたかなー。心当たりがさっぱり無いんだけどなー。ため息をつきつつ、家の門をくぐる。

「ここにちはー。リウヒです」

すると子供たちが転げるよつて、歓声を上げてやつてきた。

可愛いなあ、もう。思わず、ほほ笑んでしまう。

「違うよ、リウヒ。まだ朝だからおはよつじやこます、だよ」

「今日は、庭で遊ぼうよ」

ちびっ子たちに囲まれて、手を引かれながら庭に出た。広い庭園は木々がざわめき、色とりどりの花が咲き誇っている。

小さな手が射す方向のものを古代語で答えてゆく。

空。花。椅子。分からぬ。木。子供? 違うよ、ぼく、タイだよ。一斉に笑う。

「あのね、リウヒに『本を読んであげよつと思つて』

えらく立派な本を持つて、キキがやってくる。専門書かと一瞬びび

つたが、どうやら童話集らしい。ふつくらした手が、文字を辿りながら、拙い声で読み上げてくれる。胡坐をかいだリウヒの足の中にタイが座り込み、キキを中心に団子になつた。リウヒと子供たちは朝の陽だまりの中、庭の片隅で物語の世界に入つて行つた。

どれほど時がたつただろうか。

「みなさま。お勉強の時間です」

低い声が聞こえて、リウヒたちが振り返ると、家庭教師のハヅキが立つていた。相変わらず冷たい目で、自分を睨みつけている。

来たか。今日はまた随分早いお時間で。

リウヒも負けじと睨み返す。少年は鼻で笑つて子供たちに言つた。
「早く、こちらにおいでなさい。そんな女の近くにいると、馬鹿が移つてしましますよ」

「馬鹿で悪かつたなあ！ 馬鹿つていうほうが馬鹿なんだから！」

思わず、現代語で怒鳴つてしまつた後、慌てて口を押さえた。

子供たちは一瞬ぽかんとして、感嘆の声を上げリウヒを取り囲んだ。

「すごい、リウヒ！ それジン語？」

「今、なんていつたの！？」

ジン国からの旅人、ということにしているが、現代語は絶対に使つな、とカスガに言われている。現代と古代でジン語は異なるそうだ。

「べ、勉強、先！」

急いでハヅキを指差すと、子供たちは、後で絶対教えてよね、と念を押しながら少年の元へ行つた。家庭教師は、驚いてかたまつていたが我に返ると、子供たちを引き連れて家の中へ消えた。

ああ、やばかった。いや、ちびっ子たちにどう言い訳をしよう。頭を搔きながらリウヒも家中へ入つていった。子供たちが勉強をしている間、シゲノさんの手伝いをすることになつていい。

* * *

酒屋の配達をしている間に裏通りまで詳しく述べてしまった。道と道とのせまい通りを、酒瓶三本持つて歩いてゆく。お届け先はこの道のドン突きだ。

酒の配達です、と裏口から声をかけると、いつもの娘が笑顔で顔を覗かせる。結構な美人で、年の頃は一緒ぐらいだ。ただ、化粧が濃かつた。

「うう苦労さま。ねえ、今日は父さんも母さんもいないの。良かつたら上がりていかない？」

「すいません、仕事があるんで」

あからさまな誘い文句を、苦笑して断る。ふてくされた娘に、またご贔屓に、と言い残し来た道を戻つた。現代の娘は自由奔放だが、古代の娘も中々に奔放だ。

ここに来てから、一ヶ月余りがたつた。ネックだった言葉も、カスガのお陰で日常会話は完璧にできるようになったし、たやすく聞き取れるようになった。

言葉は大事だ。よく「言葉はなくとも通じ合える」などいうが、それは嘘だとシギは思う。自分の意思をきちんと伝えなければ、ヨミユニケーションはできない。相手には分かつてもらえない。たとえ、それが恋人であろうと、夫婦であろうと。他人との関係は、全て言葉で繋がつてゆく。読み書きも勉強しようかな、カスガはそこまで知っているかな。

こんな所に来て、学ぶ喜びを知るなんて。現代にいる時は、ただテストが終わればそこで知識は消えていたのに。とクツクツ笑つた。

「読み書き？ 簡單なものしか分からないけど、いいよ。あ、でも紙がないから結構難しいかも」

「そうか。じゃあ、また今度でいいや」

夜の屋根裏部屋。三人はそれぞれにくつろいでいる。シギは窓際で、濡れた頭を拭いており、カスガはテーブルで酒を飲んでいた。リウヒはベッドの上に凭れてぼんやりしている。

「めずらしいね。シギがそんな事をいうなんて。ねえ、リウヒ」

返事がない。明後日の方向を見て、枕を抱えている。

「おい、どうしたんだ」

近づいて、顔の前で手を振つてみると、目の焦点が合つた。

「あ、う、ううん、なんでもない。ごめん、わたし先に寝る」
そのまま蒲団の中にこそっと入つてゆく。いつもは髪が傷むから
といって、乾くまでガンとして寝ない女が。枕には水がしみ込んで
いる。

「お前どうしたんだよ。おかしいぞ」

からかい半分で、その濡れた髪を梳いてみた。

「やめて」

固い声がかえつてくる。手が止まつた。なんだか自分を否定された
気分だつた。胸の中がジリジリと痛い。
なんだよ。突つかかってこいよ。いつもみたく、顔を赤らめておれ
をなじれよ。

「最近、なんか、変なんだ」

リウヒが静かな寝息をたててから、カスガがポツンと言つた。

「バイト先の事も、前みたく言わないし……。なにがあつたのかな。
いじめられているとか」

「そんなんでへこたれる弱い女じゃないだろ?」

「まあ、いじめられることは、昔からよくあつたんだけど。名前の
せいですね。でも、ぼくにもなにも言わないなんて、初めてだ」

「ホームシックかもしれないな」

うう、とカスガが頭を抱える。

「一回、みんなで酒場にいつてみねえか。ちょっとは気が晴れるかも
しれない」

大学が夏休みに入った時、リウヒは三人で外に飲みに行きたがつた。
それを思い出した。

「シギつてさ」

「ん?」

「……いや、なんでもない。ぼくも、そろそろ寝るね

「おいおい、途中で辞められたら氣になるし… 何だよ、一体」「いや、リウヒが好きなのかなって思つて」

「じゃあ、お休み。早々にベッドにもぐりこんでしまった。

シギはため息をついて、テーブルに突っ伏した。

* * *

バイト先に向かう足取りは軽く、前みたく、憂鬱にため息をついたりしない。

ハヅキに怒鳴つた二、三日後、帰り道に本人から声をかけられた。付いて来てほしいという。警戒したが、申し訳なさそうな顔をしている少年に少しだけ心を許して付いて行つた。町中に大きな園がある。そこで、ハヅキはリウヒに深々と頭を下げ、暴言を許してくれと言つた。

「君は、ぼくの妹に似ているんだ。名前まで一緒になんだ」遠くを見るように少年は語つた。

その子は、赤子の頃にハヅキの家に預けられた女の子だった。嬉しかつたが、大好きな兄が自分より妹に夢中になつた。今まで、当たり前に受けていた兄の愛情は、あつさりと妹へいつた。妹も、自分が兄に断然懷いた。

幼心にとてつもない疎外感を感じた。母に言つても、取り合つてもらえなかつた。ところが妹は、五つになつた頃突然消えた。居るべき所に帰つた。ハヅキは悲しかつたが、どこかで安心した気持ちもあつた。これで兄はぼくをみてくれると。

しかし、兄はおかしくなつた。心あらずで、一緒に遊んでくれなくなつた。その内、妹がいる所へ行つてしまつた。自分と母を置いて、兄がそこへ行つたことによつてしかるべき金額が支払われ、そのおかげで大学まで進むことができた。でも、妹と兄に対しては複雑な心境を今でも抱いている。

話している事は、完全には分からなかつたけど、気持ちはなんとなく

く分かる。わたしもカスガの関心がよその人にいつたら、すぐ悲しいだろ?」

「分かるな、それ」

そう言うと、弾かれたようにハヅキはこちらを向いて、もう一度頭を下げる。

「ありがとう。それから、ごめん。あれは、八当たりだった。今までの態度を許してほしい」

「じゃあ、これからは友達だね」

リウヒが笑うと、ハヅキも笑った。手差し伸べられて、握手するとさなりと乾いていて温かかった。

これで、脅威は去った。

今日はくもり空で、今にも雨が降つてきそうだ。天気予報なんでものはない。つくづく便利な世界に住んでいたんだな、と思う。

商家の門をくぐって声をかけると、ちびっ子たちが駆け寄つて出迎えてくれる。古代語が話せるようになつたのは、カスガとこの子たちのお陰だ。

「ねえ、今日はリウヒが『本を読んで』

「駄目よ。今日はリウヒの髪を結つてあげるんだから」

子供たちにもみくちゃにされた。これは子守りというより、玩具にされているんじゃないだろうか。結局、リウヒはたどたどしく本を読みながら、少女たちに髪をいじられている。

「リウヒの髪はとってもきれい。どうして結わないの」

「面倒くさいから」

容姿には自信がないが、髪の毛だけは自慢だ。藍色の太くて癖のない髪は、手入れのかいもあって、艶もこしある。そういうえばこの時代の人は、みんな髪の毛が長い。男も女も。庶民は短髪もいるが、裕福になると断然長髪だ。そして女性はきれいな簪で美しく結われている。もしかして、それがステータスなのかもしれない。

この家の少女一人も、簪を三つ四つ差している。

「出来た!」

「すゞーー！ 可愛い！」

鏡を見せられて、リウヒも感嘆した。キキとネネの見事な技術に。どこのをどうしたのか、たっぷりとした髪は、両サイドに一房ずつ残したまま、高い位置でゆつたりと結われて、小さな飾りのある簪が一本突き刺さっている。

少女たちを褒めると、嬉しそうに笑い声をあげて調子に乗ってしまった。

「お化粧もしよう！」

「それはいいって……ぎやーー！」

「ああ、もう、動かないでー！」

もう完全に玩具だった。

「完成！」

「うわあーー！」

全くの別人が、鏡の中にいた。誰これ。わたしかこれ。少女二人はお互いの健闘を称えあつてゐる。そして、なにやら相談を始めた。すぐに戻ると言い残して部屋を出て行く。

「キキとネネはどこにいったのかな……」

分からぬ、と少年たちは首を振る。不安が広がつてゆく。まさかとは思うけど、まさか。

「母さまの衣借りてきたーー！」

やつぱりそう来ましたかー！ リウヒは卒倒しそうになつた。

「頭も化粧も完璧だもの、衣もそれなりじゃないとー！」

「あなたたちは外にいなさいー！」

少年たちは追い出された。もういいから、勘弁してー。泣きそうな自分の声は見事に黙殺された。少女たちに無理やり服を脱がされて、美しい衣を着せられる。淡いブルーの衣は絹独特のしつとりした肌触りで心地よい。下衣は濃い茶色で、金色の刺繡が入つてゐる。帯はピンクだった。こちらもビーズのようなものが付いており、動くたびに静かにシャラシャラと音がした。

「素敵！ 富廷のお姫さまみたいー！」

キキとネネは、手を取り合つて喜んでいた。リウヒは恥ずかしくて仕方がない。

「いいよー。入つておいで」

「ランたちとともに、ハヅキも入つてきた。なんであんたがいる！ どうやら、勉強の時間になつても、入れず扉の外で足止めをくらつていたらしい。果然と自分を見ている。

「君……、すうぐきれいだ……」

その言葉に、顔から火が出そうになつた。

「あ……ありがとう……」

モジモジしている一人をみて、子供たちはクスクスと笑い、肘を突き合つた。特に少女たちは鼻高々だ。今まで、大好きなリウヒに冷淡にしていたハヅキが、その娘に見とれている。そして娘を美しく着飾つたのはあたしたちなのだ。

「べ、勉強の時間なら、わたしはお邪魔だから……」

「ちょっと、リウヒー、どこいくのー！」

「シゲノさんのお手伝いだよ。今までそうだったでしょ」

「駄目ー！ リウヒはここにいるのー！」

「そんな恰好じや、お手伝い出来ないよー！」

子供たちは憤慨して声を上げる。

「いいじやないか、君も一緒に受けければ」

ハヅキ、あんたまで！ 結局、リウヒが折れて、シゲノさんと奥さんには断りを入れに出ることとは許された。早く帰つてきてね。送り出されて、廊下に出来る。

「あらあらまあまあ、可愛いこと。お気になさらないでください。あなたの本業はお嬢さまたちのお相手なのですから」

シゲノさんは福々しい顔で笑つた。

「あらあ、その衣、あなたの方が似合つたのね。差し上げるから、そのまま着て帰つたら？」

奥さんは、お茶を啜りながらこいつこいつした。

「いやいや、駄目ですって。こんな高価なもの、いただく訳に行き

ませんって！」

いいのよー。と奥さんは手をヒラヒラと振つて、片手をつぶつた。

「また、新しい衣を主人にねだることができるもの」

子供部屋に戻ると、キキたちが歓声を上げてリウヒを出迎えた。一緒になつて授業を受ける。それでも、ハヅキの目線が自分に注がれているのが分かつて、顔が上げられなかつた。

バイトから帰つてきたリウヒを見て、カスガは目を点にした。別人かと思つた。

「どうしたの、その格好。リウヒじゃないみたい」

「子供たちに玩具にされた」

なんじやそりや。ゲンさんとおかみさんも、顔をほころばせて褒めている。

「いつもは、これから台所を手伝つてもううけど、今日は無理だね】すぐに着替えてくるところリウヒを笑つて押しとどめる。今日はお姫さまでいなさい。

「まさか、この年になつて、お姫さまっこをすると思わなかつた」リウヒが苦笑した。カスガも昔を思い出して笑つた。

幼稚園の頃、幼馴染はお姫さまっこにはまつた。母親の長いスカラートをはいて、裾をつまんで得意げになつて歩き、気取つた言葉で話した。勿論、カスガも無理やり付き合わされ、嫌々ながらお姫さまになつた。今となつては懐かしい記憶だ。

シギが帰つてきてその姿を見た時、一瞬見とれたのにカスガは気が付いた。しかし。

「馬子にも衣装だな」

「悪かつたな」

本当に、この男は素直じやないな。

「いつも、そんな恰好をすればいいのに」

屋根裏部屋に戻り、カスガが笑いながら言つて、リウヒも小さく笑つた。

「結構、楽しんだけど頭が痛い」

ベッドに腰かけながら、簪をゆっくり抜いてゆく。その度に癖のない髪の毛が、サラサラと落ちてゆき、なんともいえない色気があつた。ちら、とシギに目線を走らせると食い入るようにリウヒを見ている。

「バイト先でも評判良かつたんじやないの」

「うん、嬉しかった」

「天敵の家庭教師は、どんな反応だった?」

「あ……。う、うん……よかつた」

お風呂に入つてくる、とそれくこと部屋を出て行つた。ほんのり顔を赤らめながら。

「リウヒもついに、春到来かー」

「なんだよ、それ」

煽るように一人ごちると案の定、シギが食いついてきた。

「別に。ああ、そうだ。酒場に行くのは明日にしようか

「いいけどさ。なんなんだよ。春到来つて」

睨みつけるようにカスガを見る。

「分からぬ? バイト先の家庭教師の男の事、前はあんなに腹立てていたのに、今じゃ、顔を赤らめて恥ずかしそうに部屋を出て行つた。ここ最近、ぼんやりしていたのも、その男の事でも考えていたんじゃないの」

「ありえねー」

シギは鼻で笑つたが、その顔は引きつっていた。

リウヒが、赤い顔でベッドに倒れている。時々、苦しそうに咳をする。

「大丈夫かよ」

「喉が痛い……」

飲みに行く話にリウヒは喜んで賛成したものの、しばらくお預けになつた。風邪をひいて熱を出したのである。久しぶりにバイトが休みで、外をぶらつこうと思っていたシギは、なんとなく部屋に残つた。カスガは下で働いており、部屋の中には一人だけである。

「どうりで最近だるくて、しんどかった……」

痛そうな咳を連発した。椅子を立つて、リウヒのベッドに腰掛け背中を叩いてやる。ついでにさすると、体が異様に熱くて驚いた。

熱をだしている女って色っぽいな。

上気した赤い顔も、汗に濡れた体も、潤んだ瞳も、礼を言つ掠れた声ですら。

カスガが、お粥と薬を持ってきた。おれがやるからと受け取ると、にっこり笑つて引っ込んだ。

「食えるか？」

「んー。食欲ない……」

「食えよ。そんなんじゃいつまでたつても直んねえぞ」

しぶしぶ起き上がつたりウヒの口元に、粥を一匙掬つて差し出す。黒い瞳が戸惑うように搖れた。口を開ろとシギは僅かに顎を上げて、自分の口を小さく開き身振りで示す。リウヒの唇が、おずおずと開いて匙をくわえた。手を引くと、その間から匙が引き抜かれる。何度もそれを繰り返す。時々、舌がちろりと出て、自分の唇に付いた粥を舐めた。シギの心の奥底に引っ込んでいた保護欲が、静かに浮上してきた。この女が可愛くて仕方がない。

粥が無くなつた。薬は椀に入った液体である。不味いから嫌だ、と

ただをこねるリウヒを抱きかかえて、椀を口に付けた。ゆっくりと休憩をいれつつ流しいれる。

全てを注ぎこむと、吐息が漏れた。

寝かせると今度は水に濡らした布で、顔や首の汗を拭つてやった。

「髪、上げる」

「うん……」

長い髪がうなじに向本も張り付いている。体の奥から湧き上がる小さな欲望を押し殺しながら、シギは手を動かした。いつもは叩く軽口も、その応酬もない。

「ああ、すぐ気持ちいい……」「

その顔と、声と、言葉に胸がキュウと鳴る。そのままリウヒは寝入ってしまった。シギはしばらく寝顔を眺めていたが、身を屈めると赤く上気している頬にそっとキスをした。

* * *

目を覚ますと、シギが自分の腰に手を回すようにして寝息を立てていた。肩が小さく上下している。焦ったものの、つい、その顔をじっくりと観察した。意外にまつげが長くて、うつすらとそばかすがある。唇は薄くて隅がちょっと乾燥してめくれていた。なんとなくオレンジの髪をさわると、水気がなくてパサパサしている。しばらくその頭をなでていたが、またトロトロと意識が沈んでいった。熱が下がり、完全復活するのに五日かかった。不思議な事に、シギがずっと看病してくれていた。

「ありがとう。シギのお陰で元気になった」

礼を言つと、にっこり笑つて頭をくしゃりと撫でられた。

「また、寝込んだら看病してやるよ……なんだよ、その顔」

「あなた、本当にシギ？ 人格変わつて気持ち悪い……」

「失敬な女だな！ 人の好意を無駄にしやがつて！」

「季節外れの雨季が来るね……さやーー！」

両手で頭をグシャグシャにかき回され、悲鳴を上げた。

バイト先の商家にいくと、子供たちが文句を言いながらリウヒを取り囲んだ。さびしかったの、つまらなかつたの、もう元気なのと上がる可愛らしい声に苦笑しながら謝る。

「ハヅキも、リウヒがいなくて元気が無かつたよ」

キキが含み笑いをしながら、何故か嬉しそうに言う。まさか、と笑つた。そのハヅキは大学が試験期間に入つてゐるらしく、しばらく来ないという。昔も今も、一緒なんだ。夏休み前の猛勉強を思い出した。

また、わたしはあそこに戻れるのかな。お父さんたち、心配しているだろうな。時間の経過は、同じくらいなんだろうか。それなら、もう三ヶ月くらい経つてしまつていて。

ぼんやりしているリウヒを見て、少女たちは変に勘違いをしてしまつたらしい。クスクス笑いながら、田配せをしていた。

「これから、酒場にいこうよ。リウヒも元気になつたことだし」

カスガの声に、三人で夜の盛り場に繰り出した。

酒場の扉を開けると、喧騒が包む。酒とつまみを適当に注文して、辺りを見渡すと、色んなタイプの人たちがいた。恋人同士や親子連れ、大工の集団らしき男たち、仕事上がりらしい親父の一人連れ。現代の居酒屋みたいだ。隅の方では、若い女が可愛い丸いギターのようものをつま弾きながら、歌を歌つてゐる。

「この時代、新聞なんてないだろ。だから、ああいつた歌い手がニコースとか話題のこと楽器と一緒に歌うんだよ」

カスガのうんちくにふたりは感心した。

「へー。風流」

「テレビやラジオもねえもんな」

「一番早いのは、宿とか酒場の噂話なんだけどね」

注文していた品がやつてきた。自分の前には、男一人とちがつた陶器のコップが置かれる。

「なあに、これ」

「果実酒を水で割った奴。お前、酒、弱いだろ？」

「古代にも、こんなものがあつたんだ」

少しだけ口をつけてみると、甘くてさっぱりしている。

「すごい、おいしい！ さすが酒屋でバイトしてるだけあるね」

「ふふん」

乾杯して、三人は大いに盛り上がった。バイトの状況や、現代の話題。毎晩話しているのに、話題は尽きない。しょうもないことでもゲラゲラ笑う。この酒場の雰囲気がそうさせるのだろうか。その内、カスガがトイレにつくる、と言い残して、店の隅に歩いて行った。

* * *

遠ざかるカスガを見送って、横にいるリウヒに目を轉じると、よほど果実酒が気に入ったのか、お代りを頼んでいた。

「あんまり飲みすぎんなよ。病み上がりなんだから」

「最近、シギはどうしたの？」

リウヒが振り向く。目の人下がほんのり赤く染まって、妙に艶があつた。

「どうしたってなにが」

「変に優しい。シギじゃないみたい」

「おれはいつだって優しい男だつての。それに一々突つかかってんのはそっちだろ」

頬をつねると、いひやいと声を上げた。その顔がおかしくて、からかっていたら突然、見知らぬ少年がこちらに早足でやってきた。

「リウヒ！」

「ハヅキ？」

どうやら知り合いらしい。ハヅキと言われたその少年は、シギには一瞥もくれずにリウヒだけを見ている。

「じばらぐ会えなかつたから、どうしていたのかと思つていた、体調は大丈夫？」

「ありがとう、もうすっかり元気。ハヅキは試験終わったの？」

「今日で終わつて、友達と飲みに来ているんだ。ちょっとだけ来てくれるなか。みんなに紹介したいんだ」

リウヒが戸惑つたように、こちらを見る。

「いつくれば？」

自分でも、驚くほど低い声が出た。

「行けよ」

「すぐに戻るから」

少年は、シギに小さく一礼をすると、リウヒの背中に手を添えながら、酒場の奥に歩いて行つた。

畜生、なんで素直に行つてしまつんだよ。矛盾した苛立ちが胸に立ちこめた。

遠くから見ながら、イライラと酒を飲み干していく。ああ、無償に煙草が吸いたい。この苛立ちを、一口チンでこまかしてしまいたい。

「ただいまー。あれ、リウヒは？」

黙つて、顎でしゃくる。先には、四、五人の身なりの良さそうな男たちに囲まれたりウヒの姿がある。その背中には、粗変わらず少年の手がかかっている。

「あー……。あれが例の家庭教師かー。結構カッコいいね。……ああつ。酒を注文されました！ どうやら一杯だけだと言つてあるようですが、果たして一杯ですむのでしょうか。そしてリウヒの背中に回されている手は、一体いつになつたらどくのでしようか！ どうでしよう、解説のシギさん」

「だれが解説のシギさんだ。お前は氣になんねえのかよ。大事な妹なんだろ？」「うーん、だけど、ちょっと嬉しい。よそのグループに溶け込んで、

あんなに楽しそうな顔しているなんて初めて見たよ。何か、じり…」

成長した娘を送り出す父親の気分だ。明日はお赤飯かね。

そう言って、袖で涙をそつと拭つた。

このHセシスコンが。シギは舌打ちして酒を煽る。

そんな間近で目を合わせるんじゃねえ。ハラハラする。そんな楽しそうに笑い声を上げるんじゃねえ。ムカムカする。

「気持ちは分かるけどさ、少し落ち着いてよ

「おれは落ち着いてる」「

「じゃあ、その貧乏ゆすりをやめてほしいな」

「そんなんじゃねえ。あの歌のリズムをとつてんだ」

「嘘だね。そんなにアップテンポじゃないよ」

いい加減自覚したら? そんなカスガの目線を避けるように、ため息をついて壁に凭れる。

再び田線をリウヒに向けると、少年は藍色の長い髪を触っていた。ゆっくりと愛おしそうに梳いていた。我慢の限界だった。

「帰るうか」

勢いよく立ち上ると、へいへい、とカスガも腰を上げる。会計としてくれと言い残し、酒場の隅に向かった。

「帰るぞ」

リウヒの肩を小突くと少年たちは、驚いたようにシギを見た。

「「」うそうさま。すじく楽しかつた。また明日ね、ハヅキ」

席を立つリウヒにそれぞれ声がかかる。もっといればいいのに、とか送るのに、とか。シギは全てを無視して、ハヅキとかいう少年に小さく頭を下げる。見せつけるように千鳥足のリウヒの肩を抱いて扉へ向かった。

「お前、飲み過ぎだ。フラフラじゃねえか、馬鹿」

「うー。眠くなってきた……」

肩を引き寄せて耳元で囁いてもよほど聞いのか、いつものよつと突つぱねない。

ちらりと後ろを振り返ると、男たちは明後日の方向を見て何か話していたが、ハヅキだけはこちらを見ていた。その目が燃えるようにな

睨みつけている。

ざまあみる。

鼻先で小さく笑って、肩を抱く手に力を入れた。

* * *

商家の庭先で、リウヒは子供たちと本を読んでいた。大分と読めるようになつた。今、試験を受ければ、間違いなく満点だろ？

「リウヒの声は、低くてとてもきれい。大好き」

クジャクが、リウヒの髪をいじりながらうつとりと言つ。この整つた顔の子は将来、大層なプレイボーイになるに違いない。

「ありがとう。わたしも、クジャクのきれいな紫の髪、好きだよ」子供特有の、しつとりした頭を撫でると、ぼくもわたしもと周りから声が上がる。五人で一斉にもみくちゃにされて、芝生の上に引っこ返つてしまつた。ああ、わたしつてやつぱりこの子たちの玩具なんだわ……。勢いで、小さなダンの体を抱え上げると、悲鳴を上げて喜んでいる。また、ぼくもわたしもとちびっ子たちがのつてくれる。

「無理です！ 体力の限界！」

「なにをしているのですか？」

声をかけられて、振り向くと、ハヅキが田を点にして立つていた。

「あれ、ハヅキ。今日は早すぎるよ」

勉強はお昼からでしょ？ どうしたの、時間を間違えたの。

「分かった」

キキがにやりと言つ。

「早くリウヒに会いたくて、たまらなかつたんでしょう」

当たり。とハヅキが笑つた。笑顔のまま、こちらに向かつてくる。焦つたのはリウヒだ。

「いやいやいや。昨日、酒場で会つたでしょ？ 話したでしょ？」

「！」

「ぼくは君とあまり話せなかつたよ。あの男は何？ 恋人？」
「誰？ シギのこと？ ああ、あの人はいつもそうちだから、と苦笑する。

「恋人なんかじゃないよ、ただの友達」
ひっくり返つていた身を起こす。ハヅキも、リウヒの横に座つた。
「そつは見えなかつたけど。本当に恋人じゃないの？」

「本当に違つたら」

つい笑いだしてしまつた。

「ふうん……。ところでなにをしているの」

本を読んでいたのだといつたら、ぼくも居でいいかなとこいつこいつする。子供たちはクスクスと嬉しそうに笑つていた。

「じゃあ、今度はキキが読んで」

ダンがリウヒの膝に座り込むと、横にネネが甘えるように身を寄せてくる。クジャクは自分の髪がよほど気に入つてゐるのか、一房とつて遊んでいる。ハヅキはリラックスしたように胡坐をかけていた。ランが寝こんで肘をつき、キキが可愛らしい声で物語を読み始める。

* * *

鉛色の空から雨が降り始めた。シギは構うことなくイライラと歩を速めて、酒瓶を抱え直す。苛立ちの原因は分かつてゐる。

あの天然女。

最近リウヒの帰りが遅い。いつもはシギの方が遅く宿に着くのに、大体同じ時刻か、それ以上に遅れて帰つてくるときがある。聞けば、例の少年と仕事上がりに公園で、話し込んでいるらしい。

「暗くなつたら危険だらうが。早く帰つてこいよ」

「うん、宿まで送つてくれるから大丈夫」

だから、そいつが一番危険だつて！ 思わず声を荒げると、

「なんで？」

ときよとんとした。お前の天然さにはお手上げだよ、全く。
ともかく心配で堪らない。でも、何故か負けたような気になつて言
えない。

あの鈍感女。

数日前から髪を結うようにになつた。横に一房垂らして、緩やかに巻
いている。いつも同じ簪を一本挿していた。

「めずらしげね。滅多に髪はいじらなかつたのに」

カスガが笑うと、リウヒも笑う。

「簪をもらつたの。つけないと悪いかなつて思つて」

「そ、そ、それはあの男からか！」

「うん」

そんな毎日つけたら、そいつは勘違いするだろ？――ついとがつた
声をだすと

「なにを？」

と田を丸くした。お前の鈍感さには泣きそうだよ、本當に。
深いため息をついたシギの後ろで、カスガが酒を啜りながら「『愁
傷さま』と呟いた。

得意先の口を叩くと、化粧の濃い別嬪娘が艶やかに顔を出す。

「雨宿りしていけば？ 温めてあげる」

胸元が広く開いていて、ふくよかな素肌がこぼれ見える。つっかり
喉を鳴らしてしまつた。

ここに来てから、三ヶ月も『無沙汰だ。』のまま何も考えずに誘惑
に乗つてしまおうか。

無意識に娘へ踏み出そうとした一步を、くるりと返す。

「仕事があるんで。また『ご贅沢に』」

詰る声を後ろに聞きながら、足を速めた。髪から頬から水滴が絶え
間なく滴り落ちていく。

それでも気にせず、シギは歩く。

違う、あのケバい女じゃない。やつと自覚した。してしまえば楽だ
った。いつそすつきりした。

おれが欲しいのは、藍色の髪のウルトラ天然馬鹿女だ。

「簪をありがとう。お陰で毎日髪を結つよくなつた」

いつものように一人、公園で世間話をしている時にそつまつと、お礼は何度も聞いたよ。とハヅキが笑つた。

この少年は、出会つたころからは想像できぬくらいに優しくなつた。朝、早い時間からバイト先にやつてきて、リウヒと共に子供たちと遊び、勉強の時間になると、同じように丁寧に教えてくれる。本を読み上げる声は、静かで耳にすとんと馴染み、その心地よさについ、うたたねをしてしまつたことがある。ふと頬を撫でられる感覺に目を覚ますと、ハヅキが手を自分の頬に付けたまま、「いねむり厳禁」と微笑んだ。恥ずかしさのあまり、慌てて本で顔を隠すと、子供たちから冷やかしの声が飛んだ。

仕事が終わるとこここの公園で、色々な話をして、帰りはわざわざ宿まで送つてくれる。

なかなかに苦労人らしい。

この時代、大学は金も時間もかかる為、貴族の者が、ものすごく裕福な者しかいない。学校に通いつつもバイトをしているのはハヅキだけだそうだ。それでも全て兄の金で補われるのは嫌だと、勉学と仕事を両立している。仲の良い友達もいるが、どうしても育ちの差を感じる時がある。幼いころは、兄と妹に疎外感を感じて育つってきた。その兄、妹も今はどこにいるのか分からないらしい。生きているのかでさえ。

きっと、色々寂しくて辛いんだろうな。だから、こんなにボディタッチが多いのだろう。

横のハヅキは、リウヒの手を両手に包みこみながら、何か話している。

いいよ、いいよ。手ぐらいどんどん触つてくれて。その横顔を見ながらお姉さんになつたような鷹揚な気持ちになる。わたしは年上な

んだし。

「ねえ、ジン語を教えてくれないか？　君の国をよく知りたいんだ」
深い茶色の田に覗きこまれて、リウヒは戸惑つた。自分の言葉と今
の言葉は違つ。それに、君の国と言われても、出てくるのは現代の
世界だ。空には飛行機が飛んでいて、町には車や電車が走っていて、
マンションの一室に暮らしています、なんて言えない。
「わ、わたし、田舎育ちで訛つてているから…　それに、話せるよつ
ないい国じやないよ……」

現代が誇れるものつて何だらう。便利さぐらいしか思いつかない。
この時代に慣れれば慣れるほど、現代の良さが分からなくなつてく
る。

「じゃあ、一言だけ、教えてほしい」

それぐらいなら大丈夫だろう。頷いて了承した。

「君が」

「君が」

「大好きだ」

「大好きだ」

男子にしてはロマンチックな事を聞く。思わず微笑んだ。ハヅキ
は口の中で、一、二、三度繰り返して覚えた、と呟いた。

「そろそろ帰るわ」

手を引つ張ると、そのまま絡めてきた。本当にこの子は、淋しがり
屋さんだ。クスクス笑つてハヅキを見ると、少年も嬉しそうに笑い
返した。

宿に入ると、カスガとシギがご飯を食べて酒を飲んでいた。

「今日もおそかつたじやねえかよ」

「うん、ちょっと話し込んじゃつて」

急いで、おかみさんの手伝いをしようとした所に入ると、もついいか
ら「飯を食べなさいと笑われた。申し訳なさに、頭が下がる。ハヅ
キとの時間をもつと早く切り上げたほうがいいのかもしない。

空腹のため、夕飯を夢中になつて食べていると、一人がこちらを見ていることに気が付いた。

「なに？ お肉はわけてあげないよ」

「馬鹿」

シギがため息をつく。

「そろそろだ、ここから出て他へ旅してみよつかなと思つて、つい箸を落としてしまつた。そんなバイト先の子供たちや、ハヅキと別れなきやいけないなんて。

「ど、どひして？ ずっとここにいれば、その内王女は帰つてくるんでしょう」

二人で話し合つたんだけども、カスガが猪口に酒を注ぐ。

「ずっと、ゲンさんの好意に甘えている訳にはいかないし…。ここだけじゃなくて、外の世界を見たいんだ。それに、あんまり一つの所に居て、慣れ過ぎるのもよくないし」

「どうして慣れ過ぎるのが悪いの？」

「あくまで、ぼくたちは現代の人間なんだよ。歴史の中に関わり過ぎるのはまずいんじゃないかな」

ほら、よくあるだろ？ 変にいじくつてしまつて、辻褄合わせに必死になる映画とか。

「だ、だけども」

リウヒは食いつ下がつた。

「以外と好都合に出来ていいものじゃないの？ 時間つて。あれ、こんな感じだつたつけ、とか、実はパラレルで他の時間軸にいつちやつたりして、とか…」

「時間は君たちが思つていいほど、甘くはないんだよ」

厳かな顔でカスガが言つ。どこかの映画のセリフか？

「ぼくたちの未来は、ほんの些細の出来事や誰かの一言の積み重ねで、大きく変貌していく。じゃあ、現代は？ 過去をちょっといつただけで大きく変わるんだよ」

「う……」

「仮にリウヒが言つよう」に、ここがパラレルワールドだつたと考えよ。そして、ぼくらが好き放題したとしよう。この時代にはない知識をたくさん持つてゐるわけだから、与える影響は滅茶苦茶大きいよね。だけど、絶対的な確証はないだろ。未来に帰つた時に、もし全く違う世界だつたとしたら？ それが自分のせいだとしたら？ リウヒはその責任に耐えられるかい？」

言つてゐる事はよく分かる。分かるけど、あの子たちと離れたくない。

「じゃあ、一人でいつたらいいよ。わたしはここに残りたい」

固い声がでる。

「お前も一緒に行くんだよ。カスガの話を聞いてなかつたのかよ」

「聞いてたよ。だけど、行きたくない」

「我儘いうんじやねえ。ハイカイエスかどっちだ」

「それ選択の余地ないじゃん！」

あんな、とシギの声が一転して柔らかくなつた。

「おれたちは、三人でチームだろ。一人でも欠けたらチームじゃなくなる」

「ぶふつ！」

思わず、ご飯を吹いてしまつた。

「汚ねえな！ 米粒を飛ばすな！」

「チツ、チームつて、チームつて……センスなさすぎ。それにシギがそんな事をいうなんて……」

素直に君と離れたくないと言えばいいのに、とカスガが咳き、シギがその足を蹴つたが、リウヒは笑いが止まらずに気が付かなかつた。よつやく体が痙攣するほどに収まつた時、カスガが静かな声で諭す。「別に、今すぐ遠いどこかに行くわけじゃない。また、都に戻ってきた時に会えればいいじゃない。それに、いつかは別れなきやいけないんだよ」

「うん……」

言つてゐる事は痛いほど分かるけど。

だけど、わたしたちはまた現代に戻れるのだろうか。

もし、帰れなかつたら、またこの都で暮らしたい。あの子供たちと、ハヅキの近くに居たいと思つ。

そうだ、ちょっと離れるだけなのだ。ただ、それだけなのだ。

「分かつた。わたしも一緒に行く」

目の前の二人が安堵したように、息を吐いた。

「三日後ぐらいに出よつと思うんだ。色々と準備もあるからね」カスガたちの話を聞きながら、あの子たちにお別れの品でも買ってやろうかなと、ふと思いついた。明日、早退して市場にいってみようか。リウヒは、食器をまとめると台所に下げに行つた。

* * *

リウヒが同意して良かつた。本当に良かつた。

ベッドから上半身だけを起こして、斜め前で寝息を立てているリウヒを見る。月明かりに照らされて、布団にぐるまれた体が僅かに上下していた。

小さなため息をつく。

自分の気持ちを自覚したものの、今度はそこから動けずにイライラしている。なんてことはない、今まで人を好きになつたことがなかつたのだ。

彼女はいた。告白されて、なんとなく付き合つて、いつの間にか自然消滅したり、別れたりした女たち。

女友達もいた。ただ体を重ねるだけで、恋だの愛だのは全くなかつた。

だから、どうしていいのか分からぬ。下手に動いて嫌われることが恐怖だつた。

おまけに相手は見事な鈍感ときてゐる。さらに、ハヅキがリウヒに好意を持っていることは分かつてゐる。ほとんど毎日一人で、公園で話しかんでいることも。

一度、屋根裏部屋の窓から、少年と手をつないで帰ってくるリウヒを見た。心臓が雑巾のように絞られたような痛さを感じた。別れを告げて宿に消えた女を、ハヅキはしばらく見て、踵を返して去つて行つた。浮立つような足取りで。

カスガがそろそろここから出よつかと言つた時、チャンスだと思つた。あの少年とリウヒを引き離すことができる。

おれは、なんて卑怯者なんだろう。

再び、小さなため息をつく。

だけど、お前と一緒にいたいんだ、なんて言つたらリウヒは大笑いするに違ひない。笑われることすら恐ろしい。自分を否定されることが怖くて堪らない。

あの少年のよう、真っ直ぐに好意をぶつけることができずに、こうやつて己の中モヤモヤと考えを巡らせることしかできない。傷つきたくないのだ。

おれはなんて小心者なんだう。

好意を素直に見せようとすれば、シギじゃないみたいと目を丸くされる。驚かれる。結局は軽口やからかいに逃げてしまうのだ。

好きだから、ちょっとかいをだしていたのか。小学生か、おれは。いや、今日び小学生の方が大人でスマートだろう。

本日何度目か分からぬため息をついて、シギは布団の中に潜り込んだ。

* * *

扉の前で、リウヒはため息をついた。

旅に出るから、もうここには来られないといつと、子供たちは泣いて縋つた。泣き通しが通用しないと分かると、今度は怒つて、部屋に閉じこもつてしまつた。

「どうしよう、今日で最後なのに…」

隣でハヅキも詰るような目で自分を見ている。

「ほくも、あの子たちのように君を責め立てたこよ。ビリして旅にでるの」

「ハヅキまでそんなこと言わないで」

わたしだってみんなと離れたくないのに。

奥さんは、悲しそうに微笑んで頷いた。

「子供たちがあんなに懐いたのは、あなたが初めてだつたから、ずっとといって欲しかつたのだけど。仕方ないわよね。また近くを通りかかつたら、遊びにいらっしゃいな」

「ありがとうございます。あの、これをみんなに渡してください」ちびっ子たちへの饅別だった。少女たちには珊瑚の簪を、少年たちには帯を。随分慎ましいものだが、半日かけて一生懸命選んだものだつた。

「わたしはてつくり、あなたはハヅキと結婚するものだと思つていたのに」

「はい？」

「庭であなたたちがいた光景は、とても微笑ましくて、幸せそうだったから」

思い出すように奥さんはクスクスと笑つた。えらく突飛なことを言う人だなと、リウヒも引き攣りながら笑つた。もう一度頭を下げて、子供部屋へ向かう。ハヅキが扉の横壁に凭れて、腕を組んでいた。こちらに気が付いても、拗ねたように横をむく。

「みんな、ごめんね。もう行くよ」

返事はない。

「キキ、ネネ、ラン、クジャク、タイ。本当にありがと。今まですごく楽しかった」

タイの小さく押し殺した泣き声が聞こえた。胸が痛む。

「さよなら。みんな、元氣で」

子供たちの嗚咽が聞こえたが、扉は開かなかつた。小さく息を吐いて、そのまま下がる。

「ハヅキも、色々ありがとう」

手を差し伸べると、少年はそのまま手を取り、リウヒをひっぱって歩き出した。

「えつ、ちゅうと、ビニコベの」

「公園」

「だつて、まだあなたの仕事は終わっていないんでしょうー」
「こんな状態じゃできないよ。君のせいだ」

それを言わるとつらじ。黙つて手を引かれながら、ついて行った。商家を出ると、空が茜色に染まっている。毎日通りでいたこの家に、もう明日はないんだと思うと、涙が出てきた。

公園のこつも話しこんでいる場所で、ハヅキが向き直る。

「本当に、こつちやうの？」

「うと……」

「本当に、こつちやうんだ」

濃い茶色の田に真つ直ぐ見詰められて、頷く」としかできない。

「そうだ、これ……」

懐から、小さな根付を取り出した。ハヅキへの鑑別が思いつかなくて、結局根付にした。銀色で三連の大小の輪が連なつており、細長い棒状の飾りと小さな鈴がついている。根付は女性のアクセサリーだが、このユニセックスなデザインなら男の人でもいけるかなと思った。

いつもはシンプルな装いのハヅキだが、この根付を帯にさしたらさぞかし映えるだろう。

「そんな高価なものじゃないけど、良かったらもらつて」

少年に近づいて、その帯に差し込む。予想通り似合っていた。

「ああ、良かった。やつぱり似……」

突然ハヅキの腕が背中に回つて、抱きしめられた。息が止まる。腕の中に閉じ込められたまま、じょりくじつたらいいのかうろたえてしまった。

「リウヒ」

「……なに？」

耳元でハヅキがゆつくりと囁いた。教えてあげた、現代の言葉で。

「君が」

胸が締め付けられた。

「大好きだ」

痛くて堪らない。

自然と腕が上がつて、ハヅキの背に手を回した。しばらく一人はそのまま抱きあつていた。

「もう一つ、もらつていい？」

「え……」

頬に手がかかり、上を向くとハヅキの唇がおりてきた。大切なものを愛しむような、優しいキスだった。

夕日が沈んで辺りが暗くなりはじめても、離れがたかつた。

「宿まで送つていく」

リウヒは静かに首を振つた。大丈夫だから。本当に、離れたくなくなつてしまふから。

「ぼくが送つていきたいんだ」

もう一度キスをすると、手をとつて歩きはじめた。しつとりと温かい手に、自分から指を絡める。するとぎゅっと握り返された。

「ハヅキに貰つた簪ね」

「うん」

「一生、大切にする。おばあちゃんになつても持つていい」

クスクスと少年は笑う。

「じゃあ、リウヒに貰つた根付、ぼくは生まれ変わつても持つていよう」

「そんな大げさな」

リウヒも笑つた。

「いつか、君の国にいくよ。また会いたい」

「ハヅキはいつまで大学にいるの？」

「うーん。国試資第だな。もし近くにきたら必ず大学を訪ねる、と約束した時に宿の前についた。

「じゃあ、元氣で」

「ハヅキも」

頬に一つ、唇に一つ、優しくキスを落とすと、ハヅキは静かに離れた。

大丈夫、また会える。

リウヒは小さく笑うと、手を振つて宿の中に消えた。少年はそのまま佇んで、扉を見ていたが、踵を返すと肩を落として歩きはじめた。

赤毛の少女が今日もやつてきた。かあさんと笑いながら台所で、話している。

そこに加わりたいのに、どうしても足が動かなかつた。ただ、居間でぼんやりとその光景を見ているだけだ。

キャラというその少女は、リウヒをちらりと見ると、フン、と鼻で笑つた。思わずムツとする。

帰りたかった家はもう苦痛でしかない。トモキも自分を置いて出て行つたままだ。わたしを捨てて。

母とカガミはリウヒの為を思つて単独、都へ行つたのだと諭したが、リウヒは捨てられたと感じていた。

「そんな訳ないじゃないか。いいかい、トモキくんはトモキくんなりに色々考えて行動しているんだよ。それは全て君を守る為なんだ」でも、帰つてこないじゃないか。必ず戻ると言つたくせに。

「リウヒ、あなたも手伝つて」

「あ、おばさん、それ、あたしがします」

この子はなんなのだろう。なぜ、こうしよう、この家に来てわたしを憎々しげな目で見るのだろう。

いたたまれなくなつて、外に出た。裏ではカガミが薪を切つていた。丸い体が、あぶなつかしく動いている。手伝つ訳でもなく、リウヒは壁に凭れてぼんやりとその姿を見ていた。

トモキに会いたい。わたしの大切なにいちゃんに。

リンたちや、講師たち、シラギのいた東宮に戻りたい。あの平和な部屋の中に。

カガミの丸い輪郭がかすんできた。したたる涙をそのままに、リウヒはズルズルと座り込むと身を守るように膝を立てその間に顔をうずめた。

後ろでリウヒとシギが楽しそうに言い合いでいる。

「チームなら名前を決めないとねー。何がいいかなー」

「だから、もうそれを言つなつて……」

「全員、二十歳だからチーム20? それともチームカスガ?」

「なんでカスガなんだよ」

「だつてカスガが隊長だもん」

「だつてカスガが隊長だもん」

「チームつて隊だつたのか」

「班長? 工場長?」

「どつから出てきた工場長! どこの工場出身?」

ティエンランの都を出たカスガたちは、一番近い村を目指して歩いている。現代の服やリウヒがもらつた絹の衣やらは、ゲンさんに預かつてもらつた。親切な髭親父とそのおかみさんは、元氣でいつておいでと弁当まで持たせて見送つてくれた。

空は青く遠く、どこまでも続いている。赤土の道を、イタチのよくな小動物の親子が横切つた。

「ちょっと寒いけど、いい天気だねー」

リウヒの明るい声が聞こえる。シギが何か言つて、また一人で笑い声を立てた。

「たいちょー!」

後ろから走つてくる音が聞こえて、腕を取られた。

「そろそろ、お弁当にしませんか?」

「まだ、お昼じゃないよ、リウヒ。それに隊長つてなにそ?」

「だつて、シギがチームカスガつて言つから。お腹が空いたであります、隊長!」

しゃちほこばつて敬礼をするリウヒを、シギが後ろから技をかける。

「おれはそんなん一言もいってねえぞー お前だ、お前! そんなだつさい名前を付けたのは!」

「きやー! 乙女にゴブランヴィストはやめてー!」

はいはい、行きますよ、とカスガは苦笑した。この二人は朝からずつとこんなテンションだ。

「あの先の木陰についたら、お弁当にしよう。それまではキリキリ歩くように」

まだじやれている馬鹿一人をほつておいて、再び歩き出す。

そろそろ王女たちも動き出す。伝説の少女と、その六人の仲間をこの目で見ること、そして接触することが、カスガの最大の目的だつた。リウヒとシギには言つてない。反対されるのは分かつていたし、二人はそこまで王女に固執していない。

「ねえ、カスガ。王女たちが外を旅していた時のルートは知つているの？」

考えを見透かされたような、リウヒの声に、ドキリとした。

「あ、う、うん。大体はだけど……」

「トモキっていう人は、同行しているわけ？」

「いや。最初の一年は兵に捕まって、もう一年は王女の兄の海賊船に乗つっていたから、ほとんど一緒になかつたけど。そのトモキを探して王女たちは旅をしていた訳だし……。でも、どうして？」

「カスガは、王女とその一行を追跡しようと思つているんでしょう。もしくは会おうと思つているんでしょう。絶対やめといたほうがいいよ」

思わず、足を止めてリウヒをみた。幼馴染は、真剣な目をしている。「トモキはカスガに、瓜二つだもの。ばれたら大混乱になるって」「なんでそこまで言い切れんの？お前、一瞬見ただけだろう」シギも目を丸くしている。

「ティエンランの都で、トモキに声かけられたことがあるの。わたし。誰かと勘違いされて。でも、そのあとすぐに兵に捕まって、連行されていった。髪の長さは違つたけど、カスガと間違えたぐらい似ていたの」

「なつ、なんでもつと早くそれを……！」しかしもリウヒばかりするい！」

思わず声を荒げると、やつくると思つたから言わなかつたんだとい
い返された。

「歴史の中に関わり過ぎるのはまずいいってゆつたのはカスガじゃん
カスガは完全にパニックになつた。リウヒの肩を掴んで鼻息荒く迫
る。

「ちょっとだけ。ね？　ちょっとだけだから…」

「どこのH口オヤジのセリフだよ！　ああ、もう、離せ…」
シギが顔色を変えて一人を引き離そうとした。

「お願い！　ちょっとだけでいいから！　じゃないといつこに来た意
味がないんだよ、ぼくにとつては…」

「カスガ、目が怖い……」

「その手を離せつての！　なんでそこまで王女に執着するんだよー」

「ほりほら、カスガ、木陰についたよー。お弁当にしようよ。ちょ
っと落ち着いてよ」

「弁当なんぞ食つてられるかー！」

道の脇にそびえている大樹にカスガは抱きつき、悲しげな声を漏ら
した。

「ああ、せつかくタイムスリップしてこんな素敵な時代に来たのに、
なんで王女とその一行に会つことができないんだ、ぼくは…。どう
してトモキとそっくりなんだ…」

切なげに幹に語りかける古代オタクに構うことなく、リウヒとシギ
は弁当を食つてゐる。

「お茶とつて」

「ん」

「Hの時代の水筒つて竹なんだねー。Hコだ、Hコ」

ブツブツと陰気に木に向かつて語つていたカスガが突如振り返つた。

「リウヒはトモキに、だれと間違えられたのー！」

その勢いにリウヒが驚いてむせた。

「よく分かんない。どうしてここにいるとか、あそこで待つてろつ
ていつただろうとが言われた」

「もしかして……王女？」

「まさか！」

ケラケラと笑う。

「王女は絶世の美女なんでしょう？あり得ないって！」

「お前は腐つても美女じゃないもんな」

頷くシギの頭をリウヒが殴った。

「痛え！ なにすんだよ！」

「他人に言わるとムカつく！」

いいや。この二人は王女の辿ったルートを知らない。こつそり後を付ける手もある。最悪一年後にスザクに行けば、セイリュウヶ原の合戦に参加することだってできるのだ。そしてあの上意の礼を見ることができる。よしよし、なにも馬鹿正直に言わなくてもいいのだ。

「そうだね、リウヒの言つ通りだ。大人しくぼくたちで旅をしよう。あれ、ご飯は？」

「わたしの胃袋の中であります、隊長！」

「弁当なんぞ食つてられるかつて言つたのはお前だぞ」

ゲンさん心づくしの弁当は、カスガが嘆いていた間にシギとリウヒの腹に納まってしまっていた。

* * *

あのさ、トリウヒがシギの髪を切りながら声を上げる。

「ゲームみたいだよね、これって」

小さな村にたどり着き、夕食後宿の部屋で「口口」「口口」している時だった。カスガは早速酒を飲んでいる。

「ゲームって？」

この時代の人間は長髪が多いが、短髪に慣れているシギとカスガは、度々髪を切り合っている。リウヒが下手糞なのは台所関係であつて、散髪は意外と上手かつた。

「うん。ほらRPGの世界つて、仲間がいて、モンスターを倒しな

がら、旅するでしょ？ 何か似ているなって。勿論モンスターなんかいないし、お金を稼ぐのはバイトで、経験値があがるわけじゃないけど……」

「レベルアップもないし、ファンファーレならないし、悪いボスもいないし」

「世界を救うために旅をしているわけじゃないし」

むしろ内の一人は、ストーカーしようとしているし。リウヒの目線を受けて、カスガが鼻を鳴らす。

「わたしらが悪の王になっちゃおうか」

「おれが世界に君臨したら、男はパンツ一丁、女は裸だ」

「変態」

「最低」

リウヒとカスガが同時に声を上げた。

「世界征服は大変だよー。あれも努力しなきゃいけないからね」

「じゃあ、やめた」

シギがあっさり放棄する。

「なんの能力があるわけでもないしさ」

「女子大生と古代オタクと工口河童だし」

「……おい、ちょっとまで。自分だけいいよ！」と言つなよ。お前は女子大生つていうより貧乳だ」

「坊主にするぞ、こら！」

「すんません、嘘です」

「魔法が使えるわけじゃないし」

「あー、でも一度行つた町にいく呪文は欲しいなあ

「歩く速度も最速ぐらいにしたいなあ」

「死んでも生き返らないし」

「……ゲームの中の人たちって、中々に大変な生活を送つているんだね」

「死ぬのは嫌だよな、痛そだしだし……」

「死んでも速攻生き返らされて、戦わされるなんて嫌だねえ」

のんびりした旅で良かつた。リウヒは笑い、はい終了。と片付けると風呂へ行つた。

「リウヒさあ、今日妙にはしゃいでいたけど……」

「から元氣だらう」

さつぱり短くなつた髪を払いながらシギが答える。

それくらい分かる。妙に明るく振舞つても、たまに都を振り返つては痛々しいため息をついた。その日にしつすら涙さえ溜まつていた事も。

「から元氣も元氣。その内、元に戻るさ。それでなくともいつかは別れなきやいけないんだから」

本当にそうだらうか。おれたちは、本当に現代に戻れるんだらうか。でも、もう戻れなくともいいやと思う気持ちもある。母親のことは心配だが、今は初めて好きになつた女と一緒にいたい。帰つても帰れなくても、リウヒが横にいればそれで幸せだ。

「ふーん」

「なんだよ、その目」

「ううん、何でも。ぼく、ちょっと外の風に当たつてくるね」

カスガが部屋を出て行くと、シギも風呂に入ろうと腰を上げた。

部屋に戻ると案の定、リウヒは窓から都をみてぼんやりしてゐる。

「風邪ひくぞ。そんな濡れた髪で」

横に立つと、遠くに密集した小さな灯りが見えた。冷たい風が緩やかにふいてくる。

「ねえ、シギ」

「ん？」

「現代で富庭跡に行つた時、その……キスしたよね」

「ああ……」

今更、なんなんだ。横のリウヒを見ると、目線は相変わらず外に向けたままだつた。

「あの時、自分が自分じゃなかつたような、誰かに体を乗つ取られ

たような気がしなかつた

「した。すごく切なくて、痛い声が自分の中から聞こえた」

「わたしも」

そのまま黙ってしまった。

「どうしたんだ、今頃になつて」

「じゃあ、あれば、わたしじゃなかつたつてことだよね」

「まあ、そうなるんだろうな」

「なら、いいや」

部屋の中に戻る。脇間のから元氣はどこへやら、ため息をついて髪をふいた。脇間さしていた、ハヅキの簪を小さく指でなぞる。

「お前、まさか……！」

ツカツカと歩くと、リウヒの両肩を掴んだ。黒い目が驚きに見開く。

「あの男とキスしたんじゃないだろうな！」

リウヒが固まつた。燃えるような嫉妬がシギの胸を支配する。苛立ちのあまり、肩をつかんだまま、細い体を壁に押し付けた。

「痛いよ、シギ……」

「したのか？ なあ、言えよ」

低い声がでた。自分でも驚くような醜い声だった。肩を掴んでいる手が、小刻みに震える。

「なんで、そんなことシギに言わなきやいけないの」

喉が詰まつた。お前が好きだからに決まつているだろう。それがどうしても言えない。

その代り、肩を掴んでいる手にますます力が入つてゆく。痛みの為かりウヒの顔が歪んだ。

「離して」

「嫌だ」

至近距離で一人は睨み合つた。鼻と鼻がふれ合つくらい近い距離だつた。

「あの男が好きなのか」

「だから、どうしてシギに言わなきやいけないの。関係ないでしょ」

本当に鈍感な女だな、こいつは。苛立ちは頂点に達した。

「お前が……！」

その時、部屋の扉の外でカスガのくしゃみが聞こえた。シギが慌てて身を引き、手を離す。

「いやー。夜はやっぱり冷えるねー。明日はもっと寒く……どうしたの、二人とも」

漂う異様な空気を察知して、カスガが目を丸くした。

「別に」

「なんでもねえよ」

「君たちは、本当に仲がいいのか、悪いのか分からぬー」

呑気に言うカスガが、もう一度、派手にくしゃみをした。

都の外に出てから一ヶ月が経った。ゲンブに入った途端、今度はシギが風邪をひいて寝込み、リウヒはその看病をしていた。今はカスガだけが外にしている。

現代でバイトに行っていた店や、賑やかな都会の繁華街の面影は全くなかった。ちょっと色々探索してみたい気もしたが、目の前ではシギがしんどそうにベッドで寝ている。

「馬鹿は風邪ひかないと嘘だつたんだね」

「誰がば……！」

苦しそうに咳きこむ男の、背中を叩いてやる。子供をあやすように。病氣で寝込んだ時の心細さは、実体験で分かっている。特に、自分一人で誰もいない部屋で寝ているとこのまま死んでしまうんじゃないかと不安になるものだ。

勿論あの時のシギには、いまでもリウヒは怒っている。誰を好きだろうが、キスをしようが、シギには関係ないではないか。男に掴まれた肩は、翌日になつても痛かったし、あれから幾日たつてもこの馬鹿は、謝らなかつた。

でも、これとそれとは別だ。自分が寝込んだ時は看病してくれたし、病氣の友達をほつておくことはできない。なんたつてチーム力スガだもんね。リウヒは小さく笑つた。

「水、飲む？」

「飲む」

水差しからコップに注いで、上半身を起してやる。ものすごい汗をかいていて、寝巻きが濡れていた。後で着替えさせよう。乾いた唇に、コップを付けると水をゆっくり流しいれる。シギの喉がなる。この男のきれいな喉仏がリウヒは好きだった。つい、いつも見どれてしまふ。

「たくさん汗かいて、早く治してね」

「ああ

寝かせると、水に浸した布で汗を拭つてやった。

しばりべっどに腰かけていたが、昼になつてリウヒの腹が鳴つた。

「シギ、ちょっとご飯たべてくるから、待つて

立ち上がろうとすると、手を取られた。引き寄せられてバランスを崩し、男の胸元に倒れこんでしまつた。

「ちょ、ちょっと……」

「行くな

そのまま抱きつこうとに体に手が回る。

「行かないでくれ

思わず顔を覗き込むと、縋るような目で見つめられた。胸がドキドキする。男の人って基本的に、甘えたで淋しがり屋なんだろうか。こんなシギを見たのは初めてだ。母性本能がキュムッとくすぐられた。

「すぐ戻るから。シギのご飯も持つてくれるから。ね？」

抱きつかれた状態で、優しく髪を撫でると、じぶじぶという感じで腕が緩まつた。

階下に行つて、猛スピードで昼飯をたいらげ、お粥と薬を持つて部屋に戻る。

ベッドのへりにかけると、再びシギの上半身を起しさせ、粥を一匙掬つて口元に運んだ。

「あつ……」

「ああ、ごめん。熱かったね」

息を何度も吹き掛けて、冷ましてから食わせる。鳥のヒナに餌をやつてゐるみたいだな、これ。いつもはこうるさい男が大人しく、なすがままになつてゐるのも、野良猫に懐かれたような気分だ。なんだか可愛い。

粥が空になると、液体の薬を飲ませた。喉仏が動く。うつかり凝視してしまい、シギがむせた。

「ごめん、ごめん！ 大丈夫？」

慌てて背中に手を回して、片手に椀、もう片手で撫でた。抱き締める形になつた。ところがシギは、そのまま甘えたようにリウヒにもたれ掛かる。腰に手が回り大いに焦つた。

「どうしよう……。この状態。

誰かに助けを求めるように辺りを見渡したが、当たり前なことに誰もいない。

窓の外で、子供たちが声を上げて走つて行く。ふと意識が飛んだ。キキたち、元気かな。またあの庭で団子になつて本を読んでいるのかな。ハヅキも……。

「なにを考えてんだ」

「えつ……？」

下からぐぐもつた声がした。掠れていて若干低い。腰に回っている手に力が入つた。思わず体が弓ぞりになる。

「なにを考えている」

「し、シギは意外と甘えただなつて思つて……！」

驚いたように、シギが身を離した。病人とは思えない素早さだった。

「えつ？あの、わたし、なんか変な事いつた？」

なぜか冷汗が、滝のように背中を流れる。田の前の男は、マジマジと自分を見つめている。

「そうだよな、おれは病人なんだし」

クスクスと笑いながら、再びリウヒにもたれ掛かる。両手も腰中に回つた。

「いやいやいやいや、ちょっとー？」

「甘えさせてくれるんだろう？」

「こらこらこらこら、薬がまだ残つているんだって……！」

「不味いからこらねえ」

「飲みなさい！そんなんじゃいつまでたつても治らないよー。別に治らなくていい」

「こんの……！」

馬鹿者ー！ウヒの拳がシギの頭に落ちた。「コソ」と音がした。

「痛てえな！ 病人に何をする！」

「さつさと飲んで、さつさと寝る！ 病人は大人しくしなさい！」

頭を掴んで、無理やり上を向かせ、薬を注ぎ入れた。ウゲツとシギがむせたが今度は全く構わなかつた。腰に回っている手をほどくと、ベッドに押し込むように横たえる。

下に食器を下げに行き、部屋に戻るとシギが待ち構えていたようにリウヒを呼んだ。

「おれを一人にするな」

そんだけ元氣があつたら、もうほつといて大丈夫じゃないのと言えば、お前は病人を看病する優しさがないのかと拗ねる。優しさとうより、我儘なだけじゃないかと思つたが、仕方がない。つきあつてやることにした。

「あのや」

「ん？」

「本当にこの体勢が落ち着くの？」

「うん」

リウヒは枕の上に座り込み、膝の上に男の頭が乗つてゐる。なんとなくオレンジ色の頭を梳くと、シギが気持ちよさそうに身じろぎした。本当に猫みたい。その内、小さな寝息が聞こえて下を見ると、安心したような顔で寝ていた。

* * *

居間でカガミとかあさんの声が聞こえる。リウヒはそつと壁に身を寄せると、聞き耳を立てた。

「じゃあ、トモキくんはゲンブの町にいるってことだね」

「……さんも、確証はないつていつているのだけど……。見かけた」というだけだし、トモキがどうかも……」

「ぼぐがいつてみるよ。王女さんはここにいた方がいいな」

「でも、あの子だとしたら、なぜそんな所にいるのかしら……」

心臓が止まるかと思つた。今すぐその町に走つて行つて、トモキを捕まえて文句をいいたい。一でも十でも百でも、次から次へと怒りの言葉は出でてくる。

ところがカガミは一人で行こうとしている。「冗談じゃない。トモキへの腹だしさは、もう限界だった。ここで残されて待つているよりも、外に出て探しに行つた方がましだ。

カガミは薪割りをしに裏へ回つたらしい。外に出て声をかけた。

「王女さん。どうしたの」

「なあ、カガミ。どうしてカガミはわたしと一緒にここにいるんだ？」心配している家族はないのか

丸いオヤジは一瞬詰まつた。

「トモキくんに、王女さんをよろしくお願ひしますって言われたからね。それにぼくに家族は……息子が一人いるけど、もうりっぱな大人だし、心配いらないよ」

「そうか」

ところで、と声色を変えてにっこり笑うと、カガミもにっこりした。

「そろそろ、ここを出よつか」

にっこりしたままのカガミの顔が青くなつて、仰天した顔になつた。器用なオヤジだ。

「でも、トモキくんはここで待つてろつていつたよね」

「戻つてこないじゃないか」

リウヒが鼻を鳴らす。

「ゲンブの町でトモキに似た男が見つかつたのだろう?」「

「な、なぜそれを」

「そして、カガミもそこに行くつもりなのだろう?」「冗談じゃない、わたしも一緒に行く」

「それこそ冗談じゃないよ、君はここに残りなさい」

「嫌だ。トモキに会つて散々文句を言ってやる」

「ゲンブの人人が彼だつて確証は、全然ないんだよ」

それでも、ここでやきもきして待つよりマシだ。それにガンと言い

続ければカガミが折れることをリウヒは知っている。結局、一緒にゲンブへ行くことになつて内心ほつとした瞬間、木陰から赤毛の少女が飛び出してきた。

「あたしもついて行く！」
「なんでっ？ 驚愕の余り、リウヒは凍りつき、カガミはひっくり返つてしまつた。

次の村に行く道を歩きながら、ふと後ろを振り返つた。町が遠くに見える。

一千年後の、あの街でおれはバイトをしていたんだ。なんだか奇妙な感じだな。

当たり前だが繁華街の面影は全くなく、ほのぼのとした雰囲気が漂つていた。

「ゲンブじゃ全然働かなかつたもの。次の所はがんばるよー」

「都会のゲンブも、この時代は呑氣な所だつたんだねー」

「北のゲンブ、南のスザク。スザクはこの時代も賑やかだつたんだろうな。ちつちつい時さあ、あそこのモールでカスガと迷子になつたよねー」

「そうそう、一人で、ギャンギャン泣いてさ。でも、あればリウヒが

……

前を行く一人のんびりした会話と、笑い声が聞こえた。藍色の髪が揺れている。

久方ぶりに風邪をひいて寝込んだ時、リウヒは献身的に面倒をみてくれた。だからぞんぶんに甘えた。異常なほど甘えた。向こうが仕事をせずにつきつきりでいた事をいいことに、ほとんど離さなかつた。本人は、なんだかんだ言いつつも、我儘を聞いてくれた。カスガも「ぼく、ここにいていいのかな」と呆ながらも笑っていた。トロトロとした眠りから目を覚ますと、リウヒは対外、椅子に座つ

て本を読んでいた。

昼間の静かな部屋の中、本に手を落としている姿はそこだけ違う空気が流れているようで、とても美しく見えた。時々、ページをめくる音がする。

窓の外からは、人々の生活の音が遠く微かに聞こえていた。子供たちはしゃぎ走り去る音、おばさん連中の井戸端会議、物売りの声。

このうららかな優しい時間帯が、シギは好きだった。愛していたといつていい。

まるでスノードームに閉じ込められたような美しい時間。リウヒの名を呼ぶと、本から顔を上げてこちらを見る。ゆっくり微笑んで、近寄ってくる女の頬に手をかけると「ビラしたの」と柔らかい声を出した。

夜はシギが寝るまで、横に付いていてくれた。

しかし、リウヒの意識が時たま遠くへ行くことに気付く。シギの傍にいようが、本を読んでいるときだらうが。あの少年を思い出しているのだと、すぐに分かった。

自分を見てほしくて余計に甘えると、クスクス笑つて受け入れてくれた。

そうだ、あの少年はもうはるか遠くの都にいる。リウヒの横にいるのはこのおれだ。

風邪は一週間ほどで引いたが、喉が痛いの、体がだるいの、不調を大げさに訴えて、しばらくはベッドから出なかつた。

「もう、熱は下がったんだし、自分で食べられるでしょう」

小さく笑いながら、昼食を箸で口元まで運んでくれる。

「まだしんどい。食べ終わつたら、体拭いてくれないか」

「いいよ。でも全部たべなね」

身体を拭いてもらつ事も嬉しかつた。上衣を脱いで、濡れた布が肌の上を拭つてゆかれるのは気持ちが良かつたし、初なリウヒが恥ずかしそうに顔を赤らめるのを見るのも気に入つていた。

「シギ」

晴天の下、おれの名を呼んでいとしい女がこちらに向かつてくる。風が緩やかに藍色の髪や自分のオレンジの髪を揺らす。前方では友人が微笑みながらこちらを見ている。

シギは幸せを感じて、笑みを漏らした。

ゲンブの町は大分小さくなつていて、

ゲンブにトモキはいなかつた。

金がどうのこうのと相談しているカガミとキャラに、ずっと持つていた宝珠を見せたら、二人は息を呑んで目を見開いた。

「よくこれだけのものを持ち出せたね」

「うん。武器の代わりになるかなと思つて」

あの老人がまた寝室にきたら、これで殴るづつと枕の下に隠していたものだつた。

カガミとキャラは、何故か同時に絶句し、それからため息をついた。そして同行者が一人増えた。富廷の踊り子だったマイムと、左將軍だつたカグラ。一人は知り合いらしく、お互いを牽制している雰囲気だつた。宿の一室でリウヒに礼をし、顔を上げたカグラは自分を見て微笑み、片手をつむつた。

ゴミでも入つたのだろうか。

その後、カガミと話合つた結果、一緒に旅をすることとなつたといふ。まあ、人数が多い方がいいのかもしれない。わざらわしいと思つたのも事実だが。

「あーあ。トモキさん、どこにいつちゃつたのかなあ
隣でリウヒと同じく畑を耕していくキャラがため息をつく。

カガミに「働く者食うべからず」と言われて色々な仕事をこなすようになった。ただ、大人組と子供組では見えない壁があり、リウヒはほとんどキャラと仕事をする。苦手な赤毛の少女と共に。向

いつも自分を嫌っている。理由は分からない。

「どこに行つたか分からないから、探ししているのだろう」

「そんなこと分かつてゐるわよっ！」

「タガこの調子だ。リウヒは小さなため息をつく。早く帰りたい。トモキと追いかけっこをした、懐かしい東宮に。みんな、無事なのだろうか。

宿に戻り湯を浴びて、部屋に入るとマイムが窓の外を見ていた。へりに腰掛け、腕を組んで凭れている様子はまるで絵のように様になつてゐる。

「なあ、マイム」

「なあに」

目線を逸らさずに返事をかえされた。

「富廷一の踊り子を知つてゐるか」

初めてこちらを向いた。なあぜ？ と微笑んで首をかしげる美女に、リウヒもつられて首をかしげる。トモキの恋人がその人らしい、よく密会しているそうだ。恋煩いというものにもかかつていた……。リウヒの説明を聞いているマイムの顔がだんだん歪んできた。

「だから、その女がトモキを誑かして……びつした、具合でも悪いのか！」

マイムは苦しそうに、窓の桟に手をかけてうすくまつて震えている。

「すぐに医師を……！」

「違うの、違うの。大丈夫」

ああ、おつかしいと目に涙をためて笑う女に、リウヒはぽかんとした。

「小さな王女さま」

目じりの涙をぬぐいながらおかしそうにマイムは話す。

「確かにその女はトモキと一人で会つてゐたわ。でも内容は、ほとんどあなたのことだったのよ。トモキは、それはもう嬉しそうに、楽しそうに話してくれた。本当に王女を大切に思つてゐるのだなつてうらやましくなつたわ」

「えつ……」

「やきもひをやいていたのね、可愛いらしげ」
クツクツとまだ笑う元宫廷一の踊り子は、愛おしげにリウヒを見た。
顔が赤くなつた。

「いや、その……すまなかつた」

「あやまることはないのよ。さ、髪の毛を乾かしてもう寝なさいな。
あたしはタヌキとキツネの相手をしてくるわ」

笑顔を一つ残して、マイムは部屋を出て行つた。ぼつんと取り残されたリウヒは、窓べに立つ。遠くに見える都の灯りを見ながら、早くトモキに会いたいと切実に願つた。大好きで大切なにいちゃんに。

道の真ん中でシギが大きな声で宣言した。

「いいか、よく聞け」

リウヒとカスガは、うろんな目でオレンジ頭の男を睨みつけた。

「ここをキャンプ地とする」

同時に、一人の荷物がシギめがけて投げつけられる。

「キャンプ地ならテントを出せっての！」

「だからぼくは、もつと早く出ようって言つたんだ！」

「ごめんって！ おれが、おれが悪かった！」

村から町へ、町から村へ転々としている内に、旅慣れてきたチームカスガ。だが、その油断がいけなかつたのか、道に迷つて野宿をする羽目になつてしまつた。目指す町は、遠くに小さな小さな灯りが心もとなく光つているだけだ。

「シギが、ちゃんとナビしないから悪い！」

「お前がまずは飯だつていつて時間をくつたのもあるだろ？！」

「喧嘩している場合じやないよ、もう！」

ため息まじりのカスガの声に、毎度のことながらリウヒとシギが睨みあう。

幸いな事に、気候は初夏だつた。少し肌寒いが冬よりマシだ。それでも、お風呂に入りたいとリウヒは思う。古代に来てから一年近く経つ。ノーパン、ノーブラも慣れて平氣になつてしまつた。人間の適応能力つて恐ろしい。

道横の林に入つて適當な場所を見つけたチームカスガは、火を焚き取り囲むように座つた。

「わたし、野宿つて初めて」

「おれも」

「ぼくも」

慎ましく燃える火を見ながら、ぽつぽつと話している内に、誰から

ともなく眠りに落ちていった。

* * *

ふと眠りから目を覚ますと、リウヒがいなかつた。カスガは目の前で静かな寝息を立てている。薪の燃える小さな音が聞こえるだけで、辺りは静寂に包まれていた。

身をおこして見渡しても人の気配はしない。焦りと緊張が押し寄せてきた。

もしかして、攫われたのか。それとも拉致されたのか。心臓の音がうるさい。ああ、自分がちゃんと道を確認していれば！

月明かりの中、林の奥に目を凝らすと、ぽつかりと開けている場所があつた。立ち上がって歩き出す。木々が円形状に開いていて、月明かりが注がれているその場所は、ひどく幻想的に見えた。円形の中央ぐらいまで歩いた時、なにか柔らかいものを踏んだ。

「痛い」

「お前……！」

なにやつてんだよ！シギの荒げた声は、芝の上に寝転がっているリウヒに向かつて発せられた。

「月見」

視線は動かずに、返事をする。上を見上げると宝石をぶちまけたような夜空が広がっていた。左端に巨大な月が引っかかっている。

「すげえ……」

シギも、リウヒにならい寝つ転がる。しばらく一人は、そのまま空を見上げていた。横を見ると、自分の手の近くに白い手がある。伸ばして絡ませると、小さな手は一瞬戸惑つたが応ずるように絡まってきた。

静かな空間に、リウヒの低い湿つた声がかすかに響いた。

満天の空に浮かぶは十五夜とただ美しい君の顔

「なにそれ」

「歌の一節」

「歌つて」

満天の空に浮かぶは十五夜とただ美しい君の顔
手を伸ばして掴もうとはしてみても
夜空の彼方に君は遠く離れてしまう
伝えたくて堪らなかつた一言は

なぜか伝えられずに

ぼくの口から紡がれる言の葉は
風に流されはらはらと散つて行つた
もどかしさだけが先行するけれど
それでもいつかは知つてほしい
この小さな胸の淋しい切なさを
この恋い焦がれる悲しい痛みを
君の耳に届くようにいつまでもここで歌うつか
星と十五夜と共に聞いてほしい

頼りないような細い声が、静寂の中をやりやりと漂つて、まるで星空
に吸い込まれるように夢く消えてゆく。
シギは手を繋いだまま、体を一回転させると、リウヒの顔を覗きこ
んだ。濡れたような黒い瞳が自分を見つめていた。

「お前の声が好きだ」

月明かりを浴びて、芝の上に散つた藍色の髪がぼんやりと輝いてい
た。

「お前の髪が好きだ」

しなやかなシギの手が伸びて、長い髪を梳ぐ。そのままリウヒの頬
を指の腹が這つた。

「お前の顔が好きだ」

指はふりへりとした唇を撫でる。

「おれは」

ゆつくりと唇を落とした。小さく吸う。

「リウヒが大好きだ」

* * *

特に好き嫌いがある訳ではないが、楽な仕事は嬉しいものだ。とある町で請け負ったのは店番だった。その主人は昼間よそへ用事があるらしく、午前から夕方にかけて店に座つていればいいだけの話だった。

「まあ、大抵ヒマだから。あと昼餉は台所にある物を適当にたべておくれ。君ともう一人、お願ひしている子がいるから仲良くしてあげてね」

奥には、橙色の頭をした瘦せぎすの男が座っていた。なぜかリウヒを見てかたまっている。

カガミといい勝負の丸いオヤジは、じゃ、よろしくといって出かけて行つた。

橙男と反対側の椅子に座る。ぼんやりと外を見ている内に、雨がポツポツとふってきて、あつという間に辺り一面を濡らし始めた。道行く人々が列を乱された蟻のように逃げ纏う。

宮廷を出て、一年近くが経つた。相変わらずトモキの行方は知れない。早く会いたい焦燥感はある。なぜ、これだけ探ししているのに、見つからないのだろうか。似ている男がいると噂を聞きつけても、ガセばかりだ。

それでもリウヒは外の世界に大分馴染んできたと思う。

苦手で仕方のなかつたキャラとは、お互い適度な距離を保つて接している。マイムは基本的に自分に关心がないし、なにより王女として見てくれない所がいい。カグラは何を考えているのか分からぬ男だが、マイムは「いい？あの男は天性の女たらしなの。だから、

何かいわれてもホイホイとついていつちやだめよ。分かつたわね」と諭した。

カガミは相変わらずだ。しかし、大人たちは、リウヒとキラを子供として扱い、夕餉がすむと一階の部屋へと毎回追いやった。夜更けは、子供の知らない素敵な別世界が広がっているように思えた。

一度、キラと共同線を張つて、部屋からこつそりと出たことがある。下ではカガミが、知らない旅人らしき男と楽しそうに飲んでいた。宿の外に出ると裏でカグラとマイムが話していた。銀髪の男は壁に凭れて腕を組み、金髪の女はすぐその横で向かい合つよう、^{ハナシナリ}男に何かを囁やかれていた。

あまりにも親密な空氣に、少女一人は凍りつきそれから慌てた。見られている事に気が付いていないカグラとマイムは、至近距離で見つめあつていて。その距離はゆつくりと狭まっていき、男と女は目を閉じた。リウヒが固唾をのみ込んだ瞬間、キラに襟首を引っ張られた。

「なにするんだ、キラ！」

「しーつ！ これ以上見るのは野暮よ！ 母さんが言つてたもの、ヒトノコイジラジャマスルモノハウマニケラレテシンジマエつて」

「なんだそれ。呪文？」

「あたしだつて知らないわよ！」

小声で言い合いをしながら、転げるように部屋に戻った。寝台に潜り込んで、蒲団をかぶつても動悸は治まらなかつた。あの一人の醸し出していた雰囲気に当たられたように、顔が赤くなる。

「リウヒ」

キラの声がして、蒲団から顔を出すと、これまた赤い顔が真剣に自分を見ていた。

「見ていた事を、誰にもゆつちや駄目よ。外に出たことがばれちゃうからね」

「クククと頷く。

「だけ……」

リウヒの寝台に寄りかかったキヤウせつひとつと夢見るよつて言へ。
「あたしもいつかあんなことをするのかなあ……」
わたしもやうなのだろうか。

殿下が恋をするお相手は誰なのでしょつね。シユウの声がする。
その時、階段を上る足音が聞こえて、藍色の頭はヤドカリのよつに
蒲団に引っ込み、赤毛は慌てふためいて、自分の寝台に飛び込んだ。
「あら、やだ。あんたたち、まだおきていたのー。早く寝なさい」
返事をしながら蒲団から覗いたマイムの姿は、先ほどの濃い雰囲気
は全くなく、リウヒは幻をみたのだろうかと首をかしげた。
雨音が強くなつて現実に戻る。となりの男は、ずっと視線を自分に
向けたまま。なんだか気持ち悪い。

「わたしの顔に何かついているのか

不機嫌な声で聞くと、少し不思議な発音で返事がかえってきた。

「米粒」

振り向くと、男は口の口下を指す。慌てて口元に手をやると、なる
ほど米粒が一つ、ポロッと落ちた。

男はひつそりと笑うと、表に田線を向ける。リウヒも同じ方向に田
を向けた。

雨はやむことなく降り続ぐ。知らない男と一人、まるで雨の檻に閉
じ込められているみたいだった。

* * *

「雨が続くね」

宿で朝ごはんを食べている時。リウヒとシギに声をかけると、返事
が返つてこない。顔を上げるとコウヒませんやつと隣の男の食膳を
見ていた。

「なんだよ。やらねえぞ」

「馬鹿」

なんでもない会話に、甘さが含まれている。カスガの全身が痒くなつた。ここ最近、二人の間に流れる密度は濃厚で、とてつもない疎外感を感じてしまう。いつからだろう、多分、あの野宿から。自分が寝てている間に何かあったのだろうか。

リウヒの視線を辿ると、そこにはシギがいる。シギの目線を辿ると、そこにはリウヒがいる。お互いが目線を合わせると、恥ずかしそうに逸らす。

まるで、思春期の男女のようだ。醸し出される甘酸っぱい空氣に、カスガはなんだか体がムズムズするのだった。見ている方が照れてしまふ。

二人に何かあつたのかと聞いてみても、歯の奥に物が詰まつたような、要領のえない返事が返つてくるだけで、さっぱり分からない。これは、あれだな。付き合う前の一番楽しく嫌らしい期間。いつそ付き合つたり、結婚してしまつた方がすつきり爽やかになるのに、その前のモヤモヤした時期は密度が濃く甘い。実際、友人や後輩のそんな姿も見てきた。

大事な妹にも、ようやつと春が来たのか。現代から遠く離れたこの古代で。

宿の台所を借りて赤飯でも焚いてやるつか。小豆つてこにあるのかな。

「まつげがついている」

シギの手が伸びて、リウヒの目の中下に触れた。

「あ……」

幼馴染が顔を赤らめて男を見る。男もつられて顔を赤くした。見つめあつたまま固まつて動かない。

「ごちそうさまー」

ああ、こっちが恥ずかしくていたたまれない。本当にごちそうさまだよ、君たちには。絶叫したいような、大笑いしたいような気持ちを抑えてカスガは、椅子を立つた。

* * *

反対側の椅子には、藍色の髪の少女が座っている。衣は粗末だが、きちんと駢けられているのだろう、浅く腰掛け、凜と背筋を伸ばしている。片や、自分は半分ずり落ちた格好で、片足を抱え込んでいた。

雨はやまない。ここ数日間、降りっぱなしだ。おかげで客も一人も来なかつた。ずっと少女と一人、雨の中に閉じ込められている。二人でぼーっと椅子に座り、昼になると、台所のものを適当につまむ。夕方になつて、店の親父が帰つてきたら自分の宿に戻る毎日を送つている。

背もたれに頭を預けて、リウヒの事を考えた。満天の空の下、キスをしてからぎこちない。熱を孕みつつ、欲望さえ入り混じつている密な空気が流れるようになつた。しかし、お互にそこから動かない。カスガも居心地が悪そうにしている。

言わなければ良かつたのだろうか。でも言わずにはいられなかつた。ため息をついて天井を見上げた時。横から小さな腹の音が聞こえた。キュー、ルルルと可愛く鳴いている。頭を巡らせるとい、少女が真つ赤な顔をして腹を押さえた。

「飯にしようか」

苦笑して立ち上がる。

台所にあつたのは、冷めた汁物と櫃に入つたご飯だつた。おれがこつちやるから、お前は飯を握つてくれと言うと、コクンと頷いた。中々に無口な子だ。この四日間、一言一言しか言葉を交わしていない。

そして、見れば見るほど、恋しい女にそつくりだつた。藍色の長い髪も、白い肌も、黒い瞳も、ほつそりとした体も。若干幼く、背が低いこと、年不相当の落ち着いた雰囲気を除けば瓜二つといつてい。この子はリウヒのご先祖かもしれない。もしかしたら前世の姿だつたりして。と小さく笑つた。

いい感じで汁物が温まり、少女に皿をやつたシギは愕然とした。

「お前、なにやつてんのあ！」

「見れば分かるだろう、握り飯をつくつている」

「分かんねえよ！ これじゃ潰れた飯の塊だよ！」

失礼な、と少女は鼻を鳴らした。

「失礼なのはお前だ、お前！ こんな姿にしてしまって、お米さまに申し訳ないと思わないのか！」

料理が下手くそな所までそつくりだよ！ こいつは！

「好きで不器用になつた訳じやない！ それに、お前お前連呼するな！ わたしにはリウヒという名前がちゃんとある！」

うおおい、名前まで一緒だよ！ シギは、頭を抱えて天を仰いだ。が、そのままグリンと少女に向き直る。

もしかして、この子、王女？ いやいや、まさか。伝説の王女は、絶世の美女だ。目の前の少女は、可愛いとはいえそこらの村にもいるような普通の娘だ。リウヒという少女は、睨むようにシギを見つめていたが、再び腹を押された。今度はグーと低い音が聞こえた。

「リウヒは、今、何をしているんだ？」

「仲間と旅をしている。中々に面白い。シギは？」

「おれも旅をしている。三人で」

可哀そうな飯を食いながら、それとなく聞き出してみたが、やはりカスガの話す王女に間違いかつた。王女とははつきり言わなかつたが、すんでいた所で騒ぎがあつて、外に出た。今は少女一人と、オヤジ一人と、青年一人と、女一人が仲間にいる。ということは、まだシラギとかいう男とトモキとは合流していないんだな。カスガの耳にタコができたほど聞かされた話を照合しながら、王女の低く流れれるような声に耳を傾ける。

「お前の話も聞かせてくれ」

昼を片付け終わり、自分の椅子に座つたリウヒは、興味深そうな目でシギを見つめる。膝を抱え込んで、そこに顔をうずめてこちらを見ている様子は、大層可愛らしかった。

この小娘が、ティエンランの歴史上でもっとも有名な人物とは思えない。だけど、おれは今、その王女と話している。カスガが付け回したがる気持ちが、少し分かる気がした。

「ジンとはどんな国なんだ」

シギは戸惑った。まさか遙か時空のはてからやつてきましたなんて言えない。しかも、ジン国に対して微かな嫌悪感もある。ティエンランを滅ぼした大国への。

「便利で、物や人が溢れていて……」

口をでるのは、やはり現代のことになってしまつ。

「いいところじゃないか。そこに住む人は幸せなのだろうな」「いいところなのだろうか。幸せなのだろうか。ならばなぜ毎日、痛々しい事件は起こり、それをテレビで見ながらおれは他人事のように、家を出る支度をするのだろうか。

ぼんやりと思いながらシギの口は、別の言葉を紡いでいたらしい。「わたしは恋というものをしたことがないから分からないが」年頃の娘らしく、恋愛話になると顔つきが変わつた。つておれは何を話したんだー！　この小娘に！

「シギに想われているその人が、少しうらやましい」

クスクスと笑う少女に、シギも強ばつた笑顔を返した。頭の中はパニックだった。ヤバいこといつてないよね、おれ。大丈夫だよね、おれ。

「わたしもいつか、そんな想いを抱くようになるのだろうか」

小さな王女はうつとりと彼方を見る。

「なるよ」

シギは知っている。目の前でちょこんと座つてゐる少女がこれから辿る運命を。その過程で生まれて消えた愛も。名も無き海賊の青年との別れ、年の離れた黒将軍との死別。そして、お前は立派にその人生を生き抜いたんだよ。

「必ずなる」

痛烈な痛みを伴つて。とは言えなかつた。

リウヒはきょとんとシギを見ていたが、そうか、と笑った。その笑
顔に胸が引き攣れた。

シギの声に、リウヒとカスガは、弾かれたように顔を上げた。

「おれ、王女とバイトしていた……」

宿の一室で呆然としたように言つ。予想どおりカスガは闘牛の如くシギに詰めより、リウヒは慌てて幼馴染に飛びついた。

「どうして、どうして、君たちだけ……！　するい！　するいよう！」

鼻水まで垂らして泣いている。

「おれだって、たまたま一緒になつただけで……やめる、カスガーおれを殺す気か！　おい、リウヒ！　助ける！」

「落ち着いて、ね？　落ち着いて！」

シギの襟首を掴んで前後左右に振り回したカスガは、ベッドに飛び込んでオイオイと嘆いた。

「大丈夫？」

「マジで殺されるところだつた……」

むせるシギの背中をさすつてやると、こわいぞじつと見る。

「やっぱりそつくりだ」

「なにが」

「お前と王女」

まさか、だつて、王女は超美人なんでしょ。それが以外とそうでもなくて、普通の娘だつた。そこらにいるような、本当に普通の子だつたんだ。最初はおれも、疑つていたけどその子の話を聞いて……。いや、絶対間違いないって。

「でも、なんかほつとけないっていうか、かまつてやりたくなるような子だつた」

思わずいらつとしてしまつた。

「ちつちやくつてさ、男の保護欲をくすぐるみたいな……。あつ！」

あくまで客観的に見てだぞ！」

リウヒの冷たい目付きにシギが慌てた。

「へーえ」

「一人のやり取りを、カスガは布団をかぶつてじつと聞いていた。

「じゃあ、確かめないとね」

嬉しそうに言う。リウヒは呆れた。過去に関わるな、ややこしくなるからと言つたのは、この幼馴染ではないか。

「遠くからそつと見るだけならいいだろ?」

ため息をついたが、自分も興味はある。己にそつくりな伝説の王女を見てみたい気持ちがむくむくと湧いてきた。

「わたしも行く」

翌日。リウヒとカスガは、無理を言つて仕事を休み、シギのバイト先に押し掛けた。雨が幸いして、笠を外さずに店内に入る。商品を見る振りをしつつ、王女を観察した。シギが「お前ら、やり過ぎー」。青い顔して、パクパクしていたが、勿論無視した。

シギの反対側に、ちょこなんと座つている少女は、本当に自分そっくりだった。美人でもなかつたし、普通の平凡な顔だった。よくいえば、姿勢が正しく品があると言えばあるくらいだった。

今までの、わたしのコンプレックスはなんなんだろう。思わず息を漏らしてしまう。伝説の、絶世の美女と同じ名前で、散々苛められてきた。その王女に言いようのない嫌悪感を抱いてきた。

この子だって普通の子じやん。笑いたくなる。

カスガは食い入るように見ている。肩を小突いて注意してもなんの反応もなかつた。

と、少女が動いて、シギに何か耳打ちをした。

その仕草に、猛烈な嫉妬心が沸いた。やめて。わたしの目の前でそんな、仲良くしないで。

ところが、シギも少女に囁き返して、二人でクツクツと笑う。楽しそうに。

嫉妬心が大きなウロで引っ搔きまわされたようだった。馬鹿。あの

馬鹿。

わたしのこと好きだといつたくせに。なんでそんな子とそんな楽しそうに。

大したことじやないのは分かっている。でも、あの馬鹿に平手打ちを喰らわせたいくらい、腸が煮えくりかえった。

「先に帰るね」

小さく言つて店を出た。カスガの声が聞こえたが、無視した。雨は激しく降り注いでいる。笠に当たる音がうつとおしくて、勢いよく脱いだ。水滴が髪から顔へ伝い滴り落ちてゆく。裾がぬれて重くなり、足が絡まりそうになった。それでもリウヒは宿を目指して黙々と歩く。

目から涙が溢れて止まらないことにも気付かず。

* * *

「気づけば結構この町にもいたんだねえ。そろそろ次へ行こうか」
カガミがのんびりといふ。あの橙頭ともお別れかと思うと、無償に悲しくなつたが、子供のリウヒに決定権はなかつた。

「どうか」

明日からここにはこられないといふと、シギはひつそりと笑つた。
ここのお店番は、本当に楽な仕事だつた。来た客はたつた一組で、不思議な二人連れだつた。

「初めての客だな」

こつそりシギに言つと、

「何も買わねえよ」

一人でクスクスと笑つた。その言葉通り、売上は皆無だつた。
客のうち、一人はさつさと帰つてしまつたが、もう一人はなぜかこちらをじつと見つめていた。シギが舌打ちして「お客さーん。駄目だよ、商品を懷にいれようとしちゃあ」といつて店の外につまみだし揉めていた。なんだ、ものを盗むとしていたのだ。

「もつとシギと、色々話したかったな」

「リウヒは最初、全然はなさなかつたじゃねえか」

「それはお前もそつだろう」

それもそうだ、と一人で声をたてて笑う。いつものように、文句を言いながら昼餉を食べて、ダラダラと話しながら店番をして、宿に帰る時刻になつた。

「宿まで送つて行くよ」

リウヒも何となく離れがたかつたので、ありがたく申し出を受けた。男は自分の歩幅に合わせてゆっくりと歩いてくれる。その優しさが嬉しかつた。

わたしが、これから恋をするならば。

ふと思ひ。

優しい人がいい。この橙頭の男のよう。

そしてわたしを王女と見ない人がいい。横で歩くこの男のよう。

宿についた。

「送つてくれてありがとう。またいつか会えるといいな」

「リウヒも、これから大変だらうけど、がんばれよ。めげるんじやねえぞ」

じやあな、と手を上げて男は踵を返した。一度も振り返らずに遠ざかつて行くその背中を、リウヒは痛いような、切ないような気持ちでいつまでも見送つていた。

ある日、ひょっこりシラギがやつてきた。自分が王女だとキャラにばれて、てんやわんやになつた。そしてキャラを丸めこむカグラの口のうまさに、ああ、これが女たらしだというものがと納得した。シラギからリンクたちの消息を聞いて、安堵の息を吐く。

「無事で良かつた……。で、お前は何をしに来たんだ」

「」同行するためにはります

相変わらず表情を変えずにいう男にそうか、と返した。

ほつとした。すぐに富に帰されると思っていた。

現金なものだな、わたしは。リウヒは小さく笑う。

幼いころは、トモキの家にどうしても帰りたかった。トモキの家に帰ると、今度は東宮に帰りたくない。そして、外の世界を旅している今は、宮には帰りたくないと思う。このまま、みんなと一緒にいたい。広く美しいこの世界の中に。

初めて見る風景、果てしなく広がる空。仕事をして、仲間と話して、笑いあうこの場所に。

でも、いつかはあそこに帰らなければならない。宿の窓から見える遠くの宮廷は、未だ修復工事が行われている。

夕餉を食べ終わると、いつもの如く、リウヒとキャラは上に追いやられようとした。

「嫌だ」

「いつものけ者にして」

一人して、卓にへばりつくと、カガミが苦笑した。

「そうかい、じゃあ仕方がないねえ。今日は特別だよ」
おお、いつから物分かりのいいオヤジになつたのだ。喜んだ一人だつたが、あまりにも難解な話に、すぐに飽いてしまつた。シラギとカグラは相槌や質問をしながら、話を聞いているようだが、マイムはつまらなさそうに、ただ酒を飲んでいる。

ちらりとキャラを見ると、赤毛の少女も頷いた。そして眠くなつたと言つて、上に上がつたのだった。

「どうしてトモキさんは見つからなくて、おっさんが来るのよ」
キャラは膨れ顔でブツブツ愚痴ついている。それを聞きながら、リウヒは違う事を考えていた。シギは元気だろうか。想い人とうまくいつているのだろうか。

別れてからまだ数日しか経つてないのに、とても懐かしく感じる。あの人に想われている女はきっと幸せなんだうな、とうらやましく思った。

二階から男女の言い争い声が聞こえる。シギとリウヒのものだ。カスガは朝ごはんを食べながら、深いため息をついた。周りの宿泊客も、目を丸くして上を見上げる。

王女を見物に行ってから、一人の空気が一転し、険悪になった。言葉や目線一つにも甘さはなく、とげとげしさと微量の切なさが込められている。それはどんどん膨らんでゆき、ついに爆発したのだろう。

介入するのは野暮だ。本人たちに任せようと、見て見ぬ振りをするものの、険悪な空気はカスガを憂鬱にさせる。「王女」の言葉も禁句になつた。その一言で空気は険を孕むからである。おかげで、「リウヒと王女がそつくりだ」という話題もちだせなくなってしまった。

まあ爆発してしまつた方が、いつそすつきりするのかもーと食器をまとめていると、リウヒが降りてきた。なぜか荷物を持つていて、目がすわっている。

「隊長」

目の前できれいな敬礼をした。

「リウヒは只今から、チームカスガを脱退します。これからは一人で行動するのでよろしく。今までありがとうございました。また、スザクでお会いしましょう」

一気に言つと、いきなりカスガの胸倉を掴んで引き寄せた。あつけにとられる間もなく、キスをされた。周りからじよめきが上がる。作ったような笑顔を残すと、リウヒはさつさと宿から出て行つてしまつた。

「えつ……？」

なに、今の。慌てて外に出ても幼馴染の姿は無かつた。二階の部屋に行くと、シギがいら立つたようにベッドを蹴りつけている。

「ねえ、なにがあったの?」リウヒが出て行ってしまったんだけど……

…

「知りねえよ。勝手にやらしとけば? あんな馬鹿女

「いやいやいや、今からこの宿を発つんだろう。早く探さないと

「ほつとけ。しばらく一人で、旅をするんだってよ」

そんな。カスガは叫びだしそうになつた。あり得ない。リウヒはいつだつてぼくを頼りにし、横にいた。

「……リウヒに何を言つた?」

シギの両肩を掴んで顔を覗き込むと、不貞腐れたように横を向いた。

「あいつが悪いんだ」

横を向いたまま、ぼそりと言つ。

「王女と……仲良くしてつて怒りだすから……。自分だつてほかの男と仲良くしていたじやねえかつていつたら、シギには分からないとかいいだして。なんだよ、王女とおれは何もしてねえだろ? なんでおれがそんな責められなきやいけないんだよ……」

「馬鹿じゃない。君たち、馬鹿じゃない」

呆れた声が出た。

「付き合つてもいのに、喧嘩別れしてどひするんだよ。しかもお互い嫉妬してさ、王女絡みでさ」

イライラとしたように机をたたきながら言つて、シギも叩きながら返してきた。

「仕掛けてきたのはあつちだぞ。おれは素直にあいつに好きだと言つた。リウヒは何も言わずに、一著前に嫉妬だけしてネチネチ言つ。卑怯だと思わないか」

カスガはため息をついて、机に突つ伏す。この馬鹿者たちが。

「いいよ、もう。リウヒは……その内帰つてくるだろ? 今までの経験上」

怒つて拗ねて、出でゆく。そしてカスガがほつておくと、「なんで追いかけてこないの」と顔を赤くして戻つてくる。いつものパターンだ。あの子はいつも自分に甘えていた。きっとこれからもそうだ

るつ。

「機嫌が直つたら帰つてくるよ。狭い国なんだし、海の外に出るわけでもないし、すぐ見つけてくれるだろ?」

シギはふくれつ面でしばらく机を叩いていたが、行こうか、と腰を上げた。

* * *

シギの馬鹿。大馬鹿。エロ河童。スケベ大臣。ヒヨコ頭。三白眼。
えーと、それから……。

リウヒは思いつく限りの馬力雑言を思い浮かべながら、ブリブリと湯気をたてて歩いている。今朝がた経つた村は小さく丘の向こうに見えている。遠くの道をのんびりロバを引いた男が歩いている。少しだけ帰りたい気持ちが沸いた。シギはともかくカスガから離れるなんて、初めてのことだ。とてもなく心許ない。いや。いいや。振りきるよう頭を振つて、再び歩き出す。

あの馬鹿とは顔も合わせたくない。リウヒは鼻を鳴らした。カスガと一緒に、シギのバイト先に押し掛けたから、つい不貞腐れた態度をとつてしまつようになつた。

「だつてシギは王女と仲良しだもの」

「わたしたちと別れて、あちらに合流したら?」

なにを言つてるんだわたしは! 内心うろたえるものの、口から出でくる言葉は、醜く歪んでいた。それにシギも敏感に反応する。

「お前だつてハヅキと仲良じじゃねえか」

「おれたちと別れて、都に行つたら? 会いたいんだが、あいつにグサグサとその言葉が槍のように突きさわる。泣きたいほど痛かつた。

何を期待していたんだろう、わたしは。そんなことないよ、お前が好きなんだよと言つてほしかった。それくらいの乙女心、分かれよ。女たらしのくせに。

ハヅキとシギへの気持ちは、別物だと気が付いていた。

ハヅキには生まれて初めて、好きだと言われた。父とカスガ以外の男の人から、初めてプレゼントを貰つた。堪らなく嬉しくて、しばらくはあの少年の事が頭から離れなかつた。だけど、思い出すのはいつもキキたち、ちびっ子と一緒にだつた。商家の美しい庭の片隅で、あの子供たちと笑つている姿。帯にはさんでいるハヅキの簪を取り出す。

でもシギは違つた。

はつきりと意識したのは、看病した時だつた。シギの頼る対象が、ただ自分一人に向かつていることに幸せを感じた。粥やご飯を食べさせているときの、無防備な顔にときめいた。

汗に濡れた体をふいているとき、恥ずかしながらもこの時間がずっとづけばいいのにと思った。この裸の背中に、そつと頬をくつつけたいとも。想像して鼻血がでそうになつたこともある。

わたしは、シギが好き。多分ずっと前から。

……いやいや、いや。あの馬鹿の事など誰が。立ち止まつて左右に頭を振る。

その時、腹が鳴つた。太陽は天高く輝いている。

お匂い飯をたらふく食べよう。それから今後の事を考えよう。腹を押さえりウヒは、近くに見える村を目指した。

* * *

キラキラと光り輝く海面が目に眩しい。キャラが歓声を上げて走つてゆく。

本当に世界は広い。富廷の中が全てだと思っていた。あの小さな東宮の中が。

「この先にまた国があるんだな」
そして果てしない世界が広がつてゐるのだろう。それはどこまで広がつてゐるのだろうか。

「いつかお連れしますよ」

カグラが横に立つた。その顔も遠く彼方を見ている。

「お前、いつもそんな事ばかりしているのか」

シラギも横に立つて呆れたような声を出した。

この一人は、いつの間にこんなに仲良しになってしまったんだろう。リウヒは小さく笑つた。合流した時はお互い無関心だった黒と白は、今や何かにつけて軽口を叩き合つてゐる。昔、御前試合で圧倒的な剣術を見せてくれた二人。あの時の、獲物を狩るようなシラギの顔を、リウヒは今でもまざまざと思い出すことができる。

「では、みんなで行かないか」

にっこり笑つてカグラを見ると

「黒将軍とカガミさんは置いて行きましょうね」

と美しく微笑んだ。シラギが顔を顰めて文句を言つ。つい、笑いだしてしまつた。

キャラとマイムが黙つて、丘の先端から遠くを眺めている。カガミは少し後ろで、みんなの姿をのんびりと見ていた。もつと世界を見て回りたい。勿論トモキも一緒に。この愉快な仲間たちと共に。所詮夢なのは分かつてゐるけれども。カガミの声がして、みな、それぞれ踵を返して歩きはじめた。リウヒも数歩歩いて、ふと振り返つた。海は相変わらず潮騷を歌いながら輝いている。つられてシラギも海を見た。

「いつか……」

黒髪の男は小さく呟いたが、照れたように口を開じると、いこつか、とリウヒを促した。

* * *

苛立つよつよつ、シギは小さな舌打ちをした。

「帰つてこねえじゃねえかよ」

カスガは痛々しいため息をついて、ベッドに突つ伏した。最近食欲

も元気もない。

リウヒが一人から離れて、大分経つた。最初は腹立ちの余り、一度と帰つてくるなと思っていたシギも、樂觀視していたカスガも、焦燥感を抱く様になった。

「こんなこと、初めてなんだ……」

枕に顔をうずめながら、沈んだ声を出す。

「今まで必ずぼくの隣にいたのに……そこから離れようとしたのに……」

わたしがお嫁に行く時は、カスガもウエディングドレスを着て一緒にその人に嫁ぐんだよとまで言つていたのに。

目の前で、青白吐息でうめいている男を見ながらふとシギは思った。この一人は、生まれてからずっと一緒に育つたという。そして、お互いに凭れかかっていたのかもしない。兄のような、妹のようなといえば、聞こえはいいが、それぞれ依存していたのだろう。カスガはリウヒに甘えられる事に、リウヒはカスガに甘えることに。じゃあ、おれはどうなるんだよ。

シギは片膝を抱えて、爪を噛んだ。

あの馬鹿女。当つけのように出で行きやがつて。腹立ちが収まるど、今度は心配でたまらない。最近、税は緩やかに上昇してきて、比例するように国の治安も悪くなつてきている。探しに行こうか。あのウルトラ天然馬鹿女を。

心当たりはある。都のあの少年の所だ。ハヅキの顔が出てきて苛立ちは更に煮えたぎった。

「でも、スザクで会おうつて言つていたから、またぼくらと合流するつもりなんだよ。もしかしたらセイリュウケ原の戦に参戦する気かな……」

「それでもおれは探しに行くよ。こんな感じじゃ、落ち着いて旅もしてられない」

カスガは胡坐をかいて何か考えていたが、顔を上げてシギを見た。

「ぼくは、別行動をとる。リウヒの事は心配だけど、それ以上に王

女たちについて行きたい

「お前な……」

すたすたと田前の古代マニアに近寄ると、そのベッドにびざりと座る。

「いいか、よく聞け。その行動が、どれだけ危険が分かつてんだろう。下手に見つかってごめんなさいじゃ済まないんだぞ。つじつま合わせの尻拭いなんて、すごく大変なんだぞ。それで映画が一本できるくらいなんだぞ。付け回すのはお前の勝手だが、絶対にばれないようにしていろよ」

「分かつていいよ」

じゃあ、チームは一時解散だね。

王女が王に立つという噂を合図として、スザクの港に向かう事を約束し、一人は床についた。ひっくり返つて両腕を頭の下に入れる。窓の外を見上げると薄っぺらの刃が引っかかっていた。

あの馬鹿女。

今度会つたら一度と離さねえ。

* * *

今この状況をどうしよう。リウヒは困り果てて、目の前で泣いているキャラを見た。泣いているくせに、猛烈に怒つてくる。

みんなに甘えているの、それが当然だと思っているんだろうの、散々責められている内に、リウヒも腹が立ってきた。みんながわたしに親切なのは、わたしが王女だからだ。王家の血が入っているから。わたし自身を見ている訳じゃない。そうじやなかつたのはトモキぐらいだ。そう言つたら、キャラは更に怒つて、今度は殴りつしてきた。

「あんたなんか嫌い。大嫌い！」

訳が分からぬ。それでも体に触られるのは嫌だったので、振り下ろされる手を避けつつ逃げる。しばらく部屋で暴れていたが、階下

からドンドンと注意された。

「下々の者には触らせないってか。さすが王女さまよね」

「違う」「

「なにがどう違うのよ。何か原因があるなら言こなさこよ。どうせないんだらうけど。そうよね、こんな下の者には言えないわよね。ずっと一緒にいて友達と思っていたのに」

友達と思っていたのに。

その言葉は、リウヒの心の深いところを突いた。初めて出来た友達を失いたくはない。目をつぶつて、息を吸い込むと思い出すのも辛い過去を話し始めた。

「……昔、気が付いたら全然知らないところに連れて行かれた」口が言葉を紡ぐたびに、頭が痛くなる。奥底に横たわっている気持ち悪い記憶が、鎌首をもたげるように浮上してきた。

闇間。老人の顔。耳にこびりつく笑い声。

あの手、あの感覚、あのおぞましさ。

泣いても叫んでも助けは来ない。始めて知った絶望。紡がれる言葉は段々早くなつてくる。もう、自分が何を言つているのだから分からなくなつてきた。頭が朦朧とし、体が冷えて仕方がない。

「『めん』

キャラの声が聞こえたが、頭を上げることはできず、震えながら膝に頭を埋めていた。まるで自分を守るよつこ。

「もう言わなくていいから。『めんね』

戸惑つたような、ほつねんとした頼りない声。静寂が漂つた。しばらくしてから、押し殺した嗚咽が聞こえた。顔を上げるとキャラが泣きじやくつしている。

「なんでキャラが泣くんだ」

「だって、そんなひどいことされていたなんて……あたし……知らなくて……」

その先は震えていて言葉にならない。リウヒは再び困ってしまった

ものの、なんだか心が温かくなつた。この子は自分の為に泣いてくれている。

「……寝ようか」

ようやつと泣きやんだキャラが、恥ずかしそうに笑つた。

「一緒に寝よう? なんとなくそんな気分」

「うん」

リウヒが寝台の隅により、場所を開けるとキャラが潜り込んできた。二人で顔を見合せてえへへと照れたように笑う。

友達とはいいいものだな。触れることができないのが辛いけど。

先程の恐ろしい記憶はゆっくりと沈んでしまった。代わりに温かく幸せな気持ちが湧き上がる。

藍色の髪と赤毛の髪は向かい合つてクスクス笑っていたが、その内小さな寝息を立て始めた。

思わず大きなため息をつくと、ゲンさんは困ったように頭を搔いた。ここに来たのなら、必ずゲンさんの宿に泊まると思っていたのだ。すいません、ちょっととはぐれちゃって、と頭を下げる時、それは心配だね、と鬚親父も顔を歪めた。

「この都の治安もだんだん、悪くなつてきているし……それに」声をひそめた。人浚いも出没しているらしい。噂だけね。シギの顔から血の気が引いた。まさか。

「まあ、あのお嬢ちゃんなら大丈夫だよ」

根拠は無いだろうが、慰めようとしてくれている親切心が有り難かつた。気は進まなかつたが、大学にも行つてみることにした。もしかしてハヅキと一緒にいるかもしない。ムカつくし腹ただしいが。あの少年がどこに住んでいるのかは分からぬ。きっと大学の寮だろう。ならば、娘一人が潜り込むなど不可能だ。

しかし、シギの頭の中には、ステレオタイプな新婚夫婦像がポンと出てきた。フリフリエプロンをつけたりウヒが、帰宅したハヅキを出迎える。幸せそうな笑顔で。

おかえりなさい、あなた。「飯になさる？ お風呂になさる？ それとも……」

いきなり壁に何度も頭を打ちつけ始めた奇つ怪な男に、道行く人は驚いて身を引いた。

いやいや、そんな事ねえ。多分。ジンジンと痛む額を無視して、シギは歩きはじめる。
まさか、一人で手に手を取つて、逃避行……。夕暮れ時の港、船の汽笛、熱いキスをする二人。

突然、顔を覆つて大声を上げた不審な男に、道行く人は目を剥いた。大学の受付らしきところで、ハヅキの所在を聞いた。担当したモグラそつくりの男は、額から血を流しているシギに怯え、一度奥に引

つ込んだ。

「その人は、少し前に大学を出られていますね」
書類を繰りながらモグラは言った。

「えつ？」

聞けば、おおよそ一ヶ月ほど前に退学したという。金銭的な問題だそうだ。それからどこへ行つたのかは分からないとモグラは首を振つた。念のため、二十一くらいの藍色の髪の女がハヅキを訪ねてこなかつたか聞いたが、再びモグラは首を振る。

「ばかあ、この仕事を十年以上しているが、妙齢の女性なんざ一人も来たことないね。みな着飾つたおばん連中だ」

ふつ、と横を向くその姿には、暗い斜がかかっていた。

礼を言つて外に出る。改めて大学内を見渡してみると、見事に男ばかりだつた。みな、品の良い身なりをして、優雅に笑いをぞめく様に歩いてゐる。なんとなく居心地が悪くなつて、大学を出た。

これからどこに探しに行こう。

道端で空を見上げ、途方に暮れるシギの類を、緩やかな風が撫でた。

* * *

サワサワと吹く風が、髪を揺らした。ここからは、ティエンランの都と草原と片隅に海が見える。大学の教室の窓からも、同じ風景が見えたな。もつとじきじきしていただけど。リウヒは微笑むと、小さな家へと戻つた。

「かあさん、胡瓜がたくさん出来ていたの。変に曲つたものばかりだけど」

台所にいるおばさんに声をかけると、柔らかい声が返つてきた。

「ありがとう、リウヒ。ここを手伝ってくれない？」

返事をしておばさんの横に立つ。

シシの村に来てどれくらい経つたのだろう。取りあえず北を目指していたリウヒは、宿を求めてこの村に立ち寄つた。一千年後には、

リウヒたちが通っていた大学のある場所だ。夕食を催促する腹を押さえながら、村の中を歩いていた時、いきなり一人のおばさんに縋るよう飛び付かれた。

どうして家を無視していくの、どうして一人なの、あの一人はどうしたの。……。

驚愕の為、口を開いて何も言えないリウヒに、おばさんは現実に戻つたのだろう。

「ごめんなさいね、驚かせてしまって……。あの子よりも随分大人だし、違う人だわ……」

痛々しいその顔に心が痛んだ。自分の母となんとなく似ていたのもあつたのかもしない。

「わたし、ここで宿と仕事を探しているんです。もし、雑用などあつたらお宅で働きますけど」

つい口を出てしまつたその言葉に、おばさんの顔がパアッと明るくなつた。その昔、リウヒが試験で満点を取つた時のお母さんの顔と一緒にだつた。

勧められるまま家に向かい、それからはおばさんの家に住み込みで働いている。

ユキノさんというその人は昔にご主人と死に別れ、一人の息子さんがいるそうだ。

息子さんたちは遠い所で暮らしていく、今はこの家には自分一人しかいないから、寂しいとも言つていた。

「長男は、そこに来てくれと言つてくれていたのだけど、なんか、ねえ……。主人の残したこの家を去るのも辛いし……」

息子の嫁と反りでも合わないのだろうか。古代でも現代でも、嫁姑問題は大変そうだな。シギは、どうだらう。母子家庭で母親を大事に……いやいやいや、何を考えているわたしは！

なぜか、ユキノさんは「かあさん」と呼んでくれと言つた。自分の名前がリウヒだったことにも大層驚いていた。

「不思議な偶然もあるものね」

リウヒの料理の腕は、ゲンさんのおかみさんの仕込みもあって、力スガ曰く「緊急避難レベルから警戒レベル」まで下がつたが、それでもひどいらしい。ユキノさんが苦笑しながら教えてくれる。

本当に一人は寂しいらしく、とにかく饒舌だった。そういうえば、一人暮らしのおばあちゃんがそだつたなど思いだした。ろくに孝行もしないうちに、亡くなつてしまつたおばあちゃん。長期休みに遊びにいくと、朝から晩までテレビは点けっぱなしで、リウヒがその部屋をでようとしても、おばあちゃんはずつとしゃべっていた。それにこゝは、テレビもパソコンもない。本も貴重品で宿などに一冊あるだけ。時間はたっぷりあるというのに。

流れるようなユキノさんの話に耳を傾けていたリウヒだが、ふと湯呑を回す手が止まった。

「……ハヅキも大学を出て、トモキの所にいきたのかしら……それにしても、トモキとあの子は無事なのかしら……」

なぜ、あの少年がでてくるのだ。しかも、トモキは確かに王女の教育係……。あの子って……。

「あの、つかぬことを伺いますが」

喉が掠れて、慌ててお茶を飲んだ。

「ユキノさんの、息子さんの名前は？」

「かあさんって呼んで」

ブツと頬を膨らますと、ユキノさんはお茶に口をつけた。

「トモキとハヅキよ」

湯呑を落としてしまつた。二人は兄弟だつたのか！　全然似ていな
いではないか！

グルグル回転する頭の中で、ハヅキの声が蘇る。

君は、ぼくの妹に似ているんだ。名前まで一緒なんだ。

ああ、もしかしてそれは王女ではないか。カスガは、王女は幼い時にトモキ宅に預けられていたと言つていた。そして目の前で、不思議そうに自分を見ているこの人は、ハヅキたちのお母さん。でも、ここまで聞いていいんだろう。下手に聞いたら逆に疑われる……。

「どうしたの、リウヒ。お茶で酔つてしまつたの」

「お茶で酔つてしまつた……」

まだ混乱したまま、じぼした茶を台拭きで拭きながら、リウヒは呆然と言つた。

* * *

朝餉の為に階下に集まつたみなにカガミがのんびりと語つた。

「酒場でさあ、期間限定で朝餉をだしているんだって。結構な人氣らしいよ。いつてみないかい」

「わあい、今日の朝餉は贅沢だー」

「つまり贅沢ね」

「お代り自由だらうか」

「リウヒ、食べすぎるとカガミさんになるぞ」

笑いながら一行は酒場へ向かい、たらふく食した。その帰り道、リウヒの足がふと止まつた。

宿の前で、男が一人、驚いたようにこちらを見てかたまつている。すぐに分かつた、トモキだつた。それでもリウヒは動けなかつた。あんなに会いたかつたにいちゃんが目の前にいるのに、足がすくんでいる。向こうも微動だにしない。

声を掛けたくても、何かが詰まつているように、喉から声が出ない。長い時間が経つたような気がした。そして、風が吹いて木々を揺らした音で呪縛が解けた。真っ直ぐにトモキに向かつて駆けて行く。何も目に入らなかつた。ただ、トモキの存在だけが全てだつた。地を蹴つて思い切り抱きつくと、トモキもしつかりと抱き返してくれた。

「待つててろつて言つただらう」

トモキの声だ。間違いなくトモキだ。嬉しさが全身を駆け巡る。

触られる恐怖は、失せて消滅してしまつた。

「心配かけさせないでくれ、この馬鹿」

「馬鹿はお前だ」

腕の中でリウヒも言い返した。甘えるように顔を胸に擦りつけた。

「一度とわたしから離れるな」

もつ、わたしを置いてどこかへ行くなんて許さない。返事はなかつたが、背に回っていた手に力が入った。

思わずカスガは、ケータイをもつ手に汗をかいてしまった。ついでに涙まで出でてきた。

王女とその兄的存在の感動の再会を、動画でとつていたのである。建物の蔭からこっそり。

完全にストーカーだった。リウヒとシギがいたら、呆れと非難の声を上げていただろう。

なにを言つているのかは分からなかつたけど、見ているだけで、泣けてきた。そして、不思議な感じがした。

トモキは本当に、自分にそつくりだったのである。そして、王女はリウヒにそつくりだ。まるで、カスガとリウヒの再会シーンのようだ。ケータイの動画再生をしながら思つ。

トモキがぼくの前世で、王女がリウヒの前世なら、一千年前もぼくらは同じ関係だったのかな。と小さく笑つた。

……待てよ。先祖という線もある。だったらリウヒは王家の血を引いているのか！ そして、ぼくはティエンランの宰相だった男の末裔か！

でも、身内からそんな話、聞いたことがない。いやいや、現代に帰つたら、リウヒと自分の家系図を調べてみよう。そして実家の蔵を根こそぎ掘り起こしてみよう。

ああ、この時代に骨を埋めてもいいって思つていたけど、ものすごく帰りたくなつてしまつた。

壁に凭れて、ダラダラと汗をかいていたカスガは、猫の声で我に返

つた。白い年老いた猫が、餌をねだるように、カスガの足に身を擦りつけている。

しゃがんで頭をなでてやると、お気に召せなかつたらしく、一声鳴いて去つてしまつた。

その夜。酒場で張つていたカスガの目に飛び込んできたのは、あの一行だつた。少女一人が、物珍しそうにはしゃいでいて、それをマイムが苦笑しながら注意している。他のみんなは笑いながら、注文をしたり、少女たちに酒をねだられていさめたりしていた。

そして、賑やかに酒を飲み始めた。オヤジがでたらめな歌を歌い、優男が手品を披露した。色っぽい女と、陰気な男は黙つて笑いながら酒を飲んでおり、青年と少女たちはただ笑い転げていた。

いいな。その空気に当てられて、リウヒとシギが懐かしくなつた。酒場の中心で、騒がしく賑やかに楽しそうに飲んでいる七人は、そこだけが別の空間のように思えた。

でも、ぼくは知つてゐる。あの七人の運命を。

ケラケラ笑つてゐる、藍色の髪の少女がこれから辿る運命を。

それがつらく過酷であるということ。

あそこで、ひつそりと笑つてゐる男と、赤ら顔で歌つてゐるオヤジが死にゆく事も。

できれば、いますぐあの席について、それをぶちまけてしまいたい。なにもかも全部。

そして運命を狂わせてしまいたい。

だけどもそうする事は出来ない。ぼくはただの傍観者だから。ストーカーじゃない、傍観者だ。歴史に干渉する事は許されない。本で読んだ物語と今まで学んだ歴史が、リアルに感じられる。なんたつて目の前で本人たちが飲んでいるのだから。カスガは、痛々しいため息をついて、酒に口をつけた。

シラギがいきなり中腰になつて、弾みで倒れた猪口から酒がこぼれた。一点を食い入るように凝視している。その視線を辿つてリウヒたちは驚いた。驚愕といつてもいい。

酒場の隅にいた集団の中に、兄がいた。赤茶けた髪と翡翠の瞳をもつ、消えたはずの兄さまが。

驚きの為、身動きできないでいるみなを尻目に、シラギはつかつかとそちらに向かうと、男たちと悶着をはじめた。マイム、カグラ、カガミが慌てたように仲裁に入る。

キャラが何も分からずに、トモキとリウヒに訳を聞いたが、二人とも何と説明したらいいか分からなかつた。その内、話がついたらしい。兄さまと共に、ついてゆくことになつた。

「あたし、先に宿に帰つてるね」

なぜか小さく悲しげに言つと、そのままキャラは帰つてしまつた。みなと共に兄の後を付いてゆきながら、リウヒは首をかしげる。どうして兄さまは、海賊などされているのだろう。

こちんまりとした一軒家で、兄はその疑問に答えてくれた。

「ここがわたしの居場所だからだよ」

居場所。では、わたしの居場所とはどこだろう。シラギの陥を含んだ声とアナンの呑気な声を聞きながら、リウヒは考えた。トモキの家か。この外の世界か。それともあの東富か。巡る頭の中に、必ずいるのは、この愉快な仲間たちだった。

ああ、そうか。

みんながいるところが、わたしの居場所なんだ。外の世界だろうが、あの富廷の中だろうが。

「では、力ずくで連れ戻すだけです。あまりの我儘に反吐がでそうだ」

聞いたことのない、シラギの低い声が聞こえた。声で殺せそうな迫

力だった。

「黒将軍はなんだか表情が豊かになつたね」

対象的な、兄の呑気な声がする。

「わたしを脅そうが、連行しようが無駄だよ。可愛い部下たちが黙つちゃいないからね」

室内を異様な殺気が漂つている。

兄は王位に就くのを拒否している。となれば、残るは自分しかいない。

でも、みんなは付いてくれるだろう。王女である自分について。わたしの居場所は、このみんながいるところだ。それが見知らぬ村であろうと、王座であろうと、どこでもいい。息を小さく吸つて、リウビは声を上げた。

「わたしが王に立ちます」

緊張は一気に解けた。視線が自分に集まる。思わず踏ん張り再び息を吸い込んだ。

「わたしが王族の義務を果たします。だから兄さまは今まで通りでいてください」

* * *

なんか、今までのバイトと違う、これ。シギはこいつそりため息をついて顔を上げた。

扉を叩くと少女の声が応ずる。

「夕餉をお持ちいたしました」

「ありがとう。ワカ、そこに置いてくださいな」

老女が椅子に座つて、ゆったりと微笑んだ。若いころはさぞかし美人だつたと思わせる、物腰柔らかな老女だつた。ワカと呼ばれた娘が、シギから盆を受け取る。

「どモ」

小さく頭を下げるにつり笑つて扉を閉めた。目の前で。

北の小さな町にたどり着いたシギはこの不況の中、中々高額なバイトにあり付いた。

住み込みで、老女の世話をすればいいという。その家に行くと見た事もない上品な家で、その主人である老女もこれまた品があった。名前は知らない。

ただし、直接世話をしているのはワカという可愛らしい少女で、シギは小間使いのように飯を作ったり、掃除をしたりの仕事をしている。

まあ、仕事があつただけでもラッキーだった。税はついに、桁違いに上がった。外は苦しみの声でいっぱいだ。人々の目付きも恐い。リウヒは大丈夫なんだろうか。恐ろしい目に合っていないだろうか。頭を巡るのは、その事ばかりだ。まさか人浚いにあって、遠くの国に売られているとか、色町に……。悪いことばかり想像してしまう。そして、そうでないと言い切れないのが、つらかった。

しかし、探すにしても、旅をするにしても金がいる。この仕事である程度の金を稼いで、それから探しに行くしかない。もどかしさを抱えつつ毎日は過ぎ去っていった。

「シギはいつも元氣ないデスネ」

台所の机に突っ伏していたシギが、顔を上げると食器を下げに来たワカと目が合った。

「悩み多き年頃デスカ？」

「そうだな。悩み事は多いよ」

大変デスネ、とにかくすると、出て行つてしまつた。あの娘は悩みごとなんてなさそうだな、とふとうらやましくなつた。

ある日、老女に呼ばれた。ワカがお使いにいったまま帰つてこないといふ。

「あの子のことだから、大丈夫とは思つただけど、迎えにいつてくれないかしら」

この情勢に、娘一人で外に出すなんて。呆れつつも迎るだらう道筋

を教えてもらい、外に出る。夏の風が吹いた。「ここに来てから、もう一年近くも経つのか。年月といつものば、えらく早く過ぎ去るものだ。そして、リウヒに堪らなく会いたくなつた。

恋しいとは「うううう」と気持ちなんだな。胸がキュウキュウと痛んで切ない。

目的の少女は家から出て、十分くらいで見つかった。が、道端で凍り付いたようにかたまつてこむ。真っ青な顔をして。

「どうしたんだ？」

その顔に、びくっと肩を震わせると縋るような目で見つめられた。半泣きだった。

「あれガ……」

少女が震える指で指す方向には、何もいなかつた。シギの歩いてきた赤茶けた土道。否、いた。小さな、小さな雨蛙だつた。つぶらな瞳でこちらを見上げている。

「お前……。もしかして蛙が怖いのか？」

「その、その単語をいわないでぐだサイ！　いーヤー！」

絶叫するワ力を尻目に、雨蛙をつまんで草むらに放ると、小さく鳴いて飛んで行つた。

「あの、あの、あの、……ありがと」「さ、まシタ」

律儀にぺこりと頭を下げる少女に、なんのこれしきと苦笑する。

「さ、帰ろうぜ。ジユズさまが心配してこむ」

「はー」

しばらくワカは、歩きながら考へるようになにに向いていたが、決心したように顔を上げた。

「お礼に、願い事を一つだけ叶えてあげマス」

シギの目が点になる。なにこいつ、魔法使い？　それともランプの精？

「願い事つて……」

「あつ！　でもあたし、好きな人がいるので、そういうのはダメデス」

慌てたように付け足す。子供に欲情するほど飢えてないいつつの。

「おれも好きなやつがいるんだよ」

ワカが弾かれたようにシギを見る。

「だけど、はぐれちゃって、どこにいるのか分かんねえんだ」

そいつを見つけてくれないかな。無事がどうかわかるだけでもいい。それだけが今のシギの、切実な願いだった。リウヒの特徴をフンフンと聞いた少女は眉を顰めた。

「分かりました、十田くだサイ。その人に伝言などはありますか？」

からかっているのか、こいつ。しかし、ワカの目は真剣だった。

「会いたいって」

空は茜色に染まっている。カラスが鳴きながら山の方へ飛んで行った。

「滅茶苦茶に会いたいって伝えてくれるか」

* * *

シギに会いたい。リウヒは粗末なベッドの上で、枕を抱えた。昔、ハヅキが使っていたベッドだった。

わたしは卑怯者だな。枕を抱く手に力を込める。何も言わなくても、自分の気持ちは伝わっていると思っていた。シギは、ちゃんと言葉に出して、大好きだと黙ってくれた。でもわたしが口に出したのは、醜い嫉妬の言葉だけだった。

次に会つたら、絶対に好きだと言おう。あの時の態度を謝ろう。例え、許してもらえないとも。もう好きじゃないと思われていなくても。

税が跳ねあがつて、ユキノさんの暮らしも随分つましくなった。トモキが宮廷に入った時から支払われていた金は、すべてハヅキの学費に回していたそうだ。ところが、いきなりそれが止まった。ハヅキは大学にいることができず、退学することになつたと手紙が来た。「一度、母さんの様子を見ようと思つたのだけど、里心が付いてし

まうから諦めます。いろいろと心配かけて、「ごめんね。本当にごめん。少し旅にでます。帰ってきたら、必ず母さんに会いに行くから、それまでお元氣で。兄さんとリウヒに会ひみよしく

「あの子つたら……」

その手紙を読みながら、ユキノさんは泣いた。リウヒも泣いた。
あの時、まっすぐ大学を訪ねねればよかつた。もしくはハヅキがここ
にくれば、会うことができたのに。

「都で……子守りの仕事をしていた時に、ハヅキがそこ家庭教師
をしていました。とても優しくていい子だった」

ユキノさんは、目を丸くしてしばらくリウヒを見ていたが、大きな
息を吐いた。

「……あなたは……リウヒは、本当に不思議な子ね。ところ、こ
の家と縁があるのね」

「本当に」

だけども、会つてわたしは、びつするつもりだつたんだろう。今、
心の中はシギでいっぱいだ。

小さく息を吐いて、枕を抱えたまま窓を見た。と、その目が驚愕に
見開いた。人が窓辺に立っている。

泥棒だ！

ところが体が動かない。魅入られたように、黒い人影を凝視するだけだ。

「静か二。危害は加えません」

女の子の声だつた。驚きが一倍になる。月明かりにぼんやり照らさ
れたのは、やはり可愛い少女だった。黒っぽいぴつたりした服を着
ている。その子は人差し指を口の前で立て、低く小さな声をだした。
「リウヒサンデスネ？」

なんでわたしの名前を知っている！だが、顔は「ク」「ク」と頷いた。
「シギサンから伝言を言付かつていマス」

驚きは更に倍増した。なんでシギが、なんであんたが、なんでこの
子が。

「会いたい、滅茶苦茶に会いたい、ト」

混乱する頭の中で、それはクルクルと回る。

ああ、シギ。涙が出てきた。止まらずに後から後から溢れてくる。

「シギサンに伝えたいこと、ありますか？」

「ある」

涙に濡れた声が出た。

「馬鹿って」

それから

「シギにすゞく会いたいって伝えて」

少女は、ア解したという風に頷くと、こり笑つて窓の外に飛び降りた。一〇一、一階なのに！ 慌てて窓から外をのぞいたが、誰もいなかつた。ただ月だけがひつそりと輝いていた。

* * *

扉の向こうからひつそりとした声がする。叩いた手を止め、シギは聞き耳を立てた。

「アナンをまつたら、そんなことをしてしまつたの。あの子らしいやら、呆れるやら」

老女のクスクス笑う声が聞こえる。

「王女サマは、そこで王になると宣言しまシタ。イランが海賊に紛れ、実際に聞いたので間違いありません。ただ、次期が来ていないとみなサマに止められていまシタ」

「筋書き通り進んでいるのね、元王子は誤算だつたけれど」

「宰相サマにも報告はしております」

なんなんだ、むりひつこむ。シギの背筋を冷や汗が伝う。

「ただ、そな……。変な男が王女サマたちを付け回しているよう……。接触はしていないのですが、なぜか王女サマたちが現れる所に先回りしているんです」

「害は有りそうなの」

「なんとも言えません」

カスガだ。冷汗は止まらない。御寒もしてきた。

「邪魔だと判断したら、消してちょうだい」

「はい。ジュズサマ」

つい、シギの喉が鳴った。扉の向こうの声がぴたりと止まる。慌てて、ドアを叩いた。

「朝餉をお持ちいたしました」

ワカはいつものように盆を受け取ると「どう」にっこり笑った。奥に見える老女は、何かを思案するように明後日を見ている。台所に戻ったシギは、全身にびっしょりと汗をかいている事に気が付いた。

なんなんだ、あの会話は。あの老女は、あの少女は。回転する頭の中で、先ほどの会話を反芻する。王女はただ、踊らされているだけなのか。利用されているだけなのか。それにしても、あの老女は何者だ。いやいや、それよりも、カスガがヤバい。消すとは殺すという意味ではないか……。そしてワカは、お使いを頼まれた子供のように、返事をした。

だいたい、あの子も何者だ。リウヒを探すと約束したものの、何事もなかつたように毎日を送っている少女を疑問に思い、老女の部屋を出たワカを付けたことがある。お休みなサイ、と退出した少女は、歩きながらおもむろに服を脱ぎ始めた。思わず口に手を当てたシギに気付く事もなく、出現したのは体にぴったりとフィットした黒装束だった。

脱いだ服を廊下の一角にほると、長い焦げ茶色の髪をポニー・テールに括った。そして、無造作に窓から飛び出した。

人間業ではなかつた。まるでボールを投げるようなきれいな曲線を描いて、少女はあまりにも身軽に飛んで行つた。

夢でも見ているのかな……。非現実さに窓から突然と見送りながら思つたが、少女が脱ぎ捨てた衣はそこにあつた。翌朝のワカは、普段通りの呑気な顔をしていた。

「シギ」

当の少女に突然、顔を覗きこまれ、動搖のためシギは椅子から転げ落ちた。

「ななな、なにかな？ なんなかなつ！？」

尻持ちをついている男をきょとんと見ていたワカは、しゃがんでその耳に口をつけた。

「リウヒサンが見つかりまシタ」

ワカの顔を見る。至近距離で目が合つた。少女ははにっこりと笑う。「シシの村にいマス。中年の女性と一緒にで暮らしていまシタ。伝言の返事ももらつてきまシタ」

「なんて……？」

心臓が跳ねた。ドキドキして止まらない。つい、ワカの肩を掴んでしまった。

「馬鹿、ト」

あまりの脱力感に、シギがべちょ、と崩れた。馬鹿とはなんだ、馬鹿とは。あのあんぽんたんめ。

「もう一つ、もう一つありマス！」

慰めるようにワカが肩を叩く。

「シギにすぐ会いたいッテ。泣いていまシタ」

ああ、リウヒ。田の前の床に水滴が落ちた。なんのことない、自分の涙だった。

「あの……、こんな時になんなんですが、あなたは何者なんでスカラ……？ それにあの人は、名前も、顔もそつくりでシタ……」

王女に、とは言わなかつた。少女の顔は、疑いとおそれの表情が入り混じつている。

「おれも、あいつも、ただの旅人だ」

それよりも。シギは、顔を拭い壁に背をもたせて、ワカを凝視した。

「お前も、あの奥方も、何者だ」

色眼鏡で見れば、小さい頃テレビで見た戦闘ものの、悪役ボスと子分のようだつた。

「……あたしはただの雇われている者で、の方はその雇い主テス」

「何を企んでいる」

「それは言えません。知らないといふことだつてアル。あまり知り過ぎると、あたしハ……」

その顔が、苦しそうに歪む。沈黙が流れた。

なんにせよ、ヒシギが小さな声を出した。ワカが顔を上げる。

「リウヒを見つけてくれてありがとう。ものすげえ感謝してる」

なんのこれシキ。ワカがにつこりと笑った。

シラギの手を取つてしげしげと見ていろリウヒに、もうよこだらう、と苦笑が落ちる。

「武人の手とは、美しいものだな」

大きくてゴツゴツした、その手はとても安心感がある。自分の小さくて頼りない手とは大違いだ。手を含わせてみると、倍近くあつた。「はじめて言われたな、手を褒められるなど」

どうやら、トモキに再会時抱きついてから、触れられる恐怖は消え去つてしまつたらしい。それが嬉しくて堪らず、リウヒはここ最近、いつも仲間にべたべたと触りまくつている。みなは苦笑しつつ喜んだ。キャラやトモキには何かと言えば抱きつく様になつたし、マイムは、からかいを含めてリウヒを抱きしめ、何回か胸の谷間で死にそつになつた。わたしも大人になつたら、あんなにふくよかな胸になるのだろうかと、湯浴みの度に、自分のものを見るのだが、残念ながらこれ以上成長してくれそつになかつた。

カガミの腹にも触らせてもらつた。案外硬くてびっくりした。

「ここに詰まつているのは脂肪じゃないんだよ。限りない知識と希望がつまっているんだ」

酔つたオヤジの戯言は

「なるほど、ではカガミさんの腹をかつされば、素晴らしいものが見られるのですね」

カグラの感心した皮肉で打ち返された。

そのカグラは誰もいない宿の一室で、微笑みながらリウヒを膝の上に乗せて甘く囁いた。

「夢の世界に行つてみたいと思いませんか」

そこに行けたたましく扉を開けて黒と金が乱入し、シラギはリウヒを抱き上げ、マイムは銀髪を殴つた。

「幼児虐待、色魔退散！ この外道！」

馬鹿じやないの。あんた馬鹿じやないの。殴る事はないでしょ。言い合いをしている二人を部屋に残し、シラギはさつさと下に降りる。

「なあ、シラギ。夢の世界つてなんだ。それにマイムはなんでもんなに怒つているんだ」

「リウヒはまだ知らなくていい」

危ないところだつたと一人「」ちて、シラギがリウヒを下ろすとトモキとキャラが駆けてきた。

「ねえ、旅芸人が港に来ているんだつて」

「リウヒもいこう。シラギさまもどうですか？」

「行つておいで。ただし、気を付けて」

三人ははしゃいだ声で返事をして、じゃれながら走つていった。その後ろ姿をシラギは、宿の戸に凭れて見送つていたが、小さな笑みを浮かべると、中に入つて行つた。

* * *

扉の中に入ると、窓際に老女が椅子に座つて茶を飲んでいた。ただそれだけなのに、絵になつていて。

「そろそろ、また旅に出ようかと思いまして」

バイトで培つた精一杯の愛想笑いをしながらシギは言つた。

「今までとてもお世話になつて申し訳ないのですが、明日にでも発とうと思つてゐるのです」

「あなたのお国はどうちらだつたかしら」

「ジンです」

「まあ。そうだつたの。ヤン・チャオはお元氣？」

「誰それー！ いやいや、までまで、知つてゐるはずだ。かなり重要な人物だ。今まで勉強した二年前の知識を必死で繰る。しかし、焦つたシギの頭は空回りを続け、結局思い出せなかつた。

「げ……元氣です、多分」

そう。老女はゆつたりと微笑むと、傍で控えていたワカにティーカップを渡した。

「残念ね。一生懸命働いてくれたから、心残もあるのだけど……。明日は、ワカ、あなたお見送りして差し上げなさい」

ワカは一瞬顔を引き攣らせたが、はい、と素直に返事をした。その後、台所に来た少女を捕まえヤン・チャオとは誰かと聞いた。「ジン国第三王子デス。なんでそんなこと聞いたんだ口……？」思い出した、狂王！ テイエンランに攻め入ってきた王だ。でもあの老女となんの関連性があるんだ。ああ、もつと歴史を勉強していれば、カスガがここにいれば。

「シギは、明日、本当にここを出て行くんデスカ」「ああ。あいつに会いに行く」

もう、待ってられない。居場所が分かつたら、ここにいる理由もなかつたし、なんとなく薄気味悪さも感じていた。

「どんな人？」

好奇心に輝く少女の顔は、いつかの王女の顔とダブった。恋に恋する顔は、みな一様に同じなのだろうか。

「我儘で、自分と飯の事しか考えていない色気皆無な女だよ」

小さく笑つて答えるシギに、ワカは目を丸くした。

「それは中々に、苦労しそうデスネ……」

「まったくだ。お前の好きな人はどんなだ？」

「怖い人デス」

少女も小さく笑つた。

「でも、優しい人」

思い出したのか、顔がほんのり赤くなる。

「お前も苦労しそうだな」

「まったくデス」

二人は顔を見合せて、クスクス笑つた。

翌朝。旅立つシギにワカも、トホトホと付いてきた。見送りの割に

はすつと一緒にいる。その顔は、悩むように歪んでいた。

「お前、どこまで付いてくる気だよ。あんまり遠くなると、帰りが

大変だろ」

シギが苦笑すると、ワカは仕方なげに止まった。

「じゃあ、こゝト……。あの、最後にお願いがあるのデスガ」
なんだよ。キヨトンとするシギに、思い余ったように顔を上げた。
「シギが身につけているものを一つくだサイ。何もなければ指でも
田ん玉でもかまいません」

「どんなお願ひそれ！」

驚愕して身を引くシギに対し、ワカは真剣だった。

「何でもいいんデス。お願ひシマス！」

そんな事言われても……。困ったように体に手を巡らす。ふと触つたのは首から下がっているクロスのネックレスだった。別れた女にもらったものだが、気に入っていた品だ。指よりはマシか。おいしい氣もしたが、ぶちりと引きちぎつて少女に渡す。ワカは喜ぶと思いつや、安堵の息を吐いて、それを受け取つた。

「ありがとウヤマス。お元気デ。道中の無事を祈つてマス」

「ワカも元氣で」

にっこり笑う少女に手をあげて応え、シギは踵を返して歩き始めた。

* * *

男の姿が見えなくなると、ワカは笑顔を引っ込んだ。そして、道脇の雑木林の中に入つてゆく。そこには、短髪黒髪の端正な顔をした男が木にもたれ掛かっていた。

「どうしてあの男を殺らなかつた」

「申し訳ありません……。でも、計画には無害だと判断しまシタ。
いたずらに人を殺すのハ……」

男の手が下から上へなぎ払われる。乾いた音がして、ワカの頬が打たれた。

「だからお前は、いつまでたっても半人前なんだ」

「おつかねー。クスクス。

上の木々から声がする。

「どうすんだ。おれが行つてこようか」

「ワカ。本当にあの男は、無害なんだろうな」

「はい。自信をもつて言えマス」

「なにがあつたら、半殺しじゃあすまねえぞ。……そういうことであれは放つておいていい。お前ら、先に行け。おれはここにつを説教してから追いかける」

もう結局イランはワカに甘いんだから。あー酒飲みでー。

木々が揺らめく音がして、二つの気配が消えた。

俯いているままのワカの頬を、男の指が這つた。

「痛かつたか」

「痛かつたデス」

打たれた頬は、ジンジンと痺れている。その内腫れてくるだろ。指はしばらく頬を撫でていたが、顎に回り持ち上げられた。ワカの顔が上がる。短髪の男　　イランと目が合つた。底冷えのするような目だった。

「どうしてあの男を殺らなかつた」

もう一度、同じ事を聞かれた。

「情が湧いたか。それとも惚れたか」

「……少しだけ、情が移つてしまいまシタ」

会いたい。ただその言葉だけで男と女は泣いた。それを見た時、ワカは仰天を通り越して感動してしまった。

「ジユズサマには、消したと伝えマス」

これもあるシ、と男が首から引きちぎつた、けつたいな飾り物を見せた。

「雇い主に嘘の報告をするつもりか。そこまで執着しているのか」

「嘘も必要な時があるのでショウ? そう教えてくれたのはあなたデス。それに、あの男は恋人に会うためにして行きまシタ」

「ふん」

「イラン」

頸にかかっていた男の手を取り、自分の口にそっと付けた。

「あなただけが、あたしの全てなんデス。それは分かつてくだサイ」「当たり前だ。おれがそういう風に教育したからな」

そして認めてもらいたいんなら。イランはその手を、勢いよく横に拝つた。反射的にワカの体がビクリと跳ねる。

「仕事で結果を残せ」

口の端を歪めて言い残すと、去っていった。

ワカはぼつねんと雑木林の中に立っていたが、涙をこらえ、跳ねるように駆けだした。

* * *

井戸のつるべを回すと水が跳ねた。この時期には冷たくて気持ちいいが、冬になつたら辛いだろうなと思いながら、桶をもつ。よいしょ、と手桶を持ち上げた瞬間、こぼしてしまった。

構わず、道をゆく男を凝視する。あのオレンジ頭、痩せぎすの体。

「どうしたの、リウヒ」

ユキノさんの声も耳に入らなかつた。

「シギ……！」

足が勝手に動いた。裾が邪魔で縛れる。男もこちらに気が付き走りだした。道の真ん中、飛び込んで抱きついたリウヒをシギもしつかりと抱きしめた。

「シギ！ シギ！」

「会いたかった……！」

「わたしも」

噛み付く様にキスをするとシギも応じた。嬉しさと懐かしさが、わき上がつてきて眩暈がする。ああ、すごく会いたかった。この人が

大好き。

「ごめんね」

「なんであやまんだよ」

「ごめん」

キスの合間に息つきのような会話を交わす。ふと、後ろからの視線を感じて、慌ててシギから身を引いた。ユキノさんが、呆然としたように、なおかつ当たったように赤い顔で立っていた。

「まあ、離れ離れになつていたリウヒの恋人……」

お茶を出されて、シギが赤い顔でお辞儀をする。リウヒは恥ずかしくて顔を上げられない。

彼氏とのラブシーンを母親に見られた娘のようだった。

「あつあの、かあさん」

台所にひつこんだユキノさんを追いかける。

「急で申し訳ないのだけど、明日、発とうと思つ。友達も待つているし……」

そして、そろそろ王女が立つ噂が流れるはずだ。

「ええ、いつてらっしゃい」

ユキノさんは、リウヒの手を握つて言った。

「今まで、本当にありがとう。わたしは、あなたに娘をみていたのよ。とてもそつくりで、同じ名前で、幸せな夢を見させてくれた。あなたに甘えていたのもあるかもね。すごく楽しかったわ」歌うようなその声を聞きながら、リウヒの目から涙が溢れてきた。わたしが出て行つたら、この人はまた一人なのだ。

「ねえ、かあさん、トモキのところに行くべきだと思つ。今はバタバタしているけど、落ち着いたらきっと、また連絡がくるよ」うつかり言つてしまつてから、しまつたと思った。案の定、ユキノさんは驚いた顔をしている。どどどどしそう。

「トモキさんを知つているつていう人と話したことがあるんです。おれたち」

ナーメス、シギ！ でもちょっと微妙！

「あの子は無事なの！」

「はい、その妹さんも無事です」

「キノさんは、安堵のため息を漏らした。『ごめんな、もっと早く言えば良かつたと謝つたら、いいのよ、』と泣いた。

「トモキとハヅキは、兄弟だったのか」

深夜。リウヒはベッドの上で、シギの腕の中にいる。そのシギは壁に凭れるように座っていた。お互いの今までの経過は、それぞれが驚くことばかりだった。

「トモキの弟がハヅキ……でも、そんなことが……」

小さくブツブツ呟いているシギをリウヒが不思議そうに見た。

「どうしたの？」

なんでもねえよ、とキスをされた。甘い感覚に流されそうになつて慌てて唇を離す。ハヅキの昔使っていたベッドの上で、そういう事をするのは、なんとなく嫌だった。

「しかも、幼少期の王女も預けられていたの」

居間の柱に、傷がいっぱいいた。身長を計つた後の傷だ。片面がハヅキで片面が王女。

トモキが計つていたといつそれは、ハヅキよりも断然王女の方の傷が多く、複雑な心境になつた。

「兄弟つて、大変だな」

甘えるように、頬を男の肩に擦りつける。そして気に入りの、きれいな喉仏をとつくりと鑑賞した。

「シギは変な所にいたんだね」

夜更けにやつてきた少女。不可思議な老女。

「早くカスガと合流して、もう一度話さねえと」

「ねえ、スザクに行く前に、都に寄りたい。昔のバイト先に顔を出したいの。この情勢でどうなつていてるか不安なんだ」

「分かった」

密やかな声は、その内無言になつた。

「かあさん、今まで本当にありがとうございました。元氣ですね」コキノさんの体を抱きしめると、その細さに驚いた。

「リウヒも体に気を付けてね。達者でいらっしゃい」手を振つて見送るコキノさんを、何度も振り返りながら歩いてゆく。

小さく消えても、まだ手を振つた。

「親子じつこだつたけど、すごく楽しかったの」

もし現代に帰れたら、うんと親孝行をしよう。

昼になつて木陰で弁当を広げた二人は、握り飯を食べていた。

「それはいい心がけだな。ところでこれを握つたのは誰だ

「わたしだけど……少しさはマシになつたでしょ?」

「少しな。ほんの少し」

それにしても、二年前とは大違ひだとリウヒは思つ。道行く人は、浮浪者同然も多く、呑気に握り飯を食べている自分たちを睨みつけている。

シシの村では比較的平和だったが、この国はこんなに治安が悪くなつてゐるのか。

改めてシギと一緒に歩いた。

しかし、都に入つて驚いた。荒んでいる空気が一気に襲う。民は腹の空かせた野良猫のように目を光らせており、なぜか兵は威張り散らしていた。裏通りの一角に、馬車があつた。現代の観光地などで見かける派手なものではなくて、木の粗末なものだ。中からうめき声や泣き声が聞こえた。これは、もしかして噂の人浚い……。

男たちが走つてくる気配がして、リウヒとシギは隠れるように壁に身を寄せる。彼らは下卑た声と笑いを上げると、馬車を駆つて行った。

その内の一人の男に見覚えがあった。二年前、ティエンランにたどり着き、宿へと案内してくれた門番だった。

ゲンさんの宿に行つてみた。髭親父は見る影もなくやつれていった。
「女房が死んだんだ……。病で……医者を呼ぶ金も、薬を買う金もなく……」

そう言つて泣き崩れた。リウヒを娘のよつに可愛がつてくれた、あの親切なおかみさんが、胸が絞られるように痛んだ。
そして預けていた現代の服も、リウヒが商家の奥さんにもらつた衣も売つてしまつたという。

「許しておくれ、許しておくれ」

涙を流しながら謝るゲンさんに、一人は頷くことしかできなかつた。

そして、目的の商家は、

誰もいなかつた。何度扉を叩いても、何の反応もなかつた。

「キキ、ネネ、ラン、クジヤク、タイ！ 奥さま！ シゲノさん！」

「そこの家にはいないよ」

通りを歩いていた男が、声をかけた。

「大分前に夜逃げをした」

そんな。足の力がぬけて、リウヒはズルズルと座り込んだ。光の差し込む美しい庭、口々口々と笑い声を上げていた子供たち、のんびりお茶をする奥さん、福々しい笑顔のシゲノさん、ハヅキの授業の声……。

扉に両手をかけながら、リウヒはしゃつくりを上げた。全てが消えてしまつただなんて。

信じられない。

上品で趣のあつた商家は、黒く荒んで見える。みんないなくなつてしまつただなんて。

嗚咽を上げた。涙が止まらない。

美しいものは永遠に続くものだと思つていた。思い込んでいた。

「リウヒ。気持ちは分かるけど、そろそろ行こうぜ。夜になつたらやばいぞ、ここ」

「うん……」

安宿の一室。ゲンさんはいたたまれなくて、もう会えなかつた。

シギはリウヒが落ち着くまで、抱き抱えて背中を叩きあやしてくれた。

「お金つて怖いね……」

そして人間つて怖い。あの門番の顔が思い出される。「みんな自分が一番可愛いんだよ。局面に立たされるとあつといふ間にそれが出る」

「早く、王女が立たないかな」

救世主が世界を救う。苦しむ人々を助けてくれる。だけど、どうして苦しめられている人々は立ち上がらないのだろうと思つていた。みな受け入れる方が楽なのだ。己の身が可愛くて、勇気がなくて黙つている。物事を起こすにはきっかけが必要だ。王女が声を上げれば、苦しんでいる人々はそれについてゆく。そして、新王が立つ事をリウヒは知つている。

「もうすぐだよ」

シギが抱きしめる腕に力を入れた。

「もうすぐだ」

* * *

「結構な距離があるじゃない、もう」

「ああ、見えてきた」

「人の気配がしないね」

リウヒたちはスザクの隣にある漁村を目指して歩いていた。何もないところとは、その通り、本当に人一人もいない、寂れた村だった。

「こんな村もあるのか」

崩壊寸前の家もあり、大体は砂に埋もれつつあった。草木は全て枯れています。

なんなのだ、この村は。

リウヒは果然と辺りを見渡す。こんな村があるなんて思つてもいいなかつた。

浜辺に腰を下ろすと、爪を噛んで遠くを見る。税が半分に跳ねあがつてから、町の雰囲気が一転険悪になつた。スザクの港は元々賑わつてゐるところだ。しかし、それ以外の村や町はどうなのだろう。そして都は。

わたしはここで一体、何をしているのだ？ 王に立つと宣言したもののは、未だにみんなに守られてのんびりとしている。国王崩御してから、都に登ると大人たちは言つ。父はいつ死ぬのだ。寝ついてから何年経つと思っているのだ。

そういうしている内に、こんな村や町は増えてゆくだ？ この国のは……。

そこまで考えて、そつとした。

わたしはこんな所で、こんな事している場合じゃないの？ いますぐ都に登つて、王座から父とショウウギを蹴り落としてしまいたい。

「何を考えているんだい」

「カガミ」

丸いオヤジがえつこらしょ、と隣に腰を下ろした。

「なぜ、お前たちは止めたんだ」

「またそれを聞くのかい。次期尚早だと思つたからだよ」兄の前で、宣言した自分の声は、大人たちに諫められた。

「次期尚早？」ではその時期とはいつだ。のんびりしている間に、税は上がり民の暮らしは厳しくなつていつるんだぞ」「リウヒくん、税は下げるべきだと思っているかい」「当たり前だ」

「君が王位についたら」「リウヒくん、税は下げるべきだと思っているかい」「当たり前だ」

「下げる」「君が王位についたら」

あのね、とカガミがため息をついた。

「時には、そういう時も必要なんだよ。國ためには民に我慢をしてもらつて……」

「それはおかしい」

リウヒはやけにきつぱり言つ。

「飢饉や干ばつのときならいざ知らず、今年も豊作だ。なのに、なぜ税を上げる。大方宮廷の建築費用がなくなつたとかそういう問題だろう」「そりや そりだよ。あれは国の威信だもの」

「建物一つに威信もなにもあるものか。いつそのこと園にでもして掘立小屋でもつくればよい」

「何をいつているんだ、君は」

カガミの声はもう泣きそうだ。

「あまりにも乱暴すぎる。そんな掘立小屋をみて民が王を、国を誇れるとでも思うのか」

む、とリウヒが声に詰まつた。
しばらく二人は黙つて海を見る。

「嫌なんだ」

民が喘いでいる時に、みんなに守られながらのんびりと旅をして。わたしはあの宮廷に入つて國を立て直さなければいけないのに、そう言つ立場なのに、何でここにいるんだ。

そう言つてリウヒは小さくため息をついた。

* * *

酒場の隅で、カスガは小声で言い争つてゐる三人の男に聞き耳を立ててゐる。一人は丸いオヤジで、一人は黒髪の青年、一人は銀髪の優男。カガミとシラギとカグラだ。

たまたま飲んでいたら、オヤジが青年二人に引きずられるようにしてやつてきた。うつかり酒を吹いてしまうところだった。王女一行の大人们は、結構な酒好きらしく、よく酒場に出没する。それをこつそり聞くのが趣味になつてゐた。でも、この三人の組み合わせは珍しい。

気付かれないように近くに移動する。しかし、余程深刻な話なのか中々内容が聞こえない。

「……と噂を流す」

「……王女は民衆と……ですか」

「あなたは……思わないのか」

「ああ、もどかしい。拡張器がほしい。カスガがため息をついた瞬間。

「国は、人間は、あなた方の玩具ではない！」

シラギが立ち上がって怒鳴った。思わずそちらを見る。酒場の喧騒も静まり、みなも目線を投げかける。オヤジも大声で言い返した。

「ぼくが道をつくる。君たちが王女の手を引いてその道を辿る。最後に宰相の用意した舞台で踊つてもらつ。最高の筋書きじやないか」

「そんな事を考えていたのか、お前は」

わああー。王女だー！ 王女だー！ 激写、激写！ 急いで取り出したケー・タイは、悲しい事に電池切れのマークが点滅していた。カスガの顔が青くなる。誰か！ 充電器もってないよね！ あるはずないよね！ 古代だもんね！

それにしても。冷静になつたカスガは、静かに怒つている王女と四人の男を見ながら思案した。

ぼくが道をつくる。君たちが王女の手を引いてその道を辿る。最後に宰相の用意した舞台で踊つてもらう。

これは作られた話だつたのか。あの丸いオヤジが創作した。新しい事実を発見した気がした。王女は民を見かねて、自發的に都に登つたのだと思っていた。彼女は舞台で踊つていただけだつたのか。その内、王女が何か言い捨てて、席を立ち、自分そつくりの男がその後に続き、青年二人も追いかけてゆき、オヤジはしばらくそれを眺めていたが、腰を上げた。

カスガも追いかけたかつたが、目立つ真似はできない。

短髪の男と、それにしな垂れかかる女が、酒場を出て行つた。

* * *

「王女サマが動き始めまシタ」

朝餉の用意を整えたワカに、ジユズがゆっくりと振り返る。

「カガミサンと富廷のやり取りを、黒シラギと白カグラが付けていたよフーテス。そのまま酒場で、カガミサンは一切を告白し、王女サマはそれを聞いて、アナンサマに協力を申し出マシタ。アナンサマは快諾、武器と言を流せと海賊に命令、もつすべ、王女サマが立つたと、この町にも噂が流れるでシヨウ」

「富廷の動きはどうなの？」

「黒が話し合いで馬をとばしたそうーテス。イランの予想では、王女サマと富廷で戦になるだろアーヴアト……」

そう。ジユズは聞きながら、朝餉に箸をつけた。その美しい動きに、ワカはいつも見とれてしまう。

「カガミサンですが、昨夜のうちに毒薬を仕込みマシタ。ご命令通り……」

「『苦労さま』

ワカはにっこり笑って口を閉じる。そして壁際に控えた。

もうすぐ、この仕事も終わりだな。食器を台所に下げ、握り飯を食べながら思つ。

あたしたちの雇い主は。

手に付いた米を舐めた。

みな一様に遊戯ゲームをするような感覚で人を殺す。まるで子供が遊ぶ盤と駒のようだ。邪魔だと判断したものを消し、己にとつて有利のものを動かす。

直接手を下すのは自分たちだ。心はいらない。情報を集め、命令された事をただ遂行するのみ。

それが仕事なのだ。闇者と呼ばれるワカたちの。

世界は二種類存在する。日のあたる表舞台と、闇に潜む舞台裏。後者に属するワカは、どうしてもその美しい表に憧れる。足を踏み入ることのない世界だと、分かつてているから余計に。

「いいもん食つてんな

「イラン。お疲れさまテス」

裏口から入ってきた男に、食べますか？と握り飯を一つ差し出す。ワ力の手に握られたままの飯を、イランは受け取らずに手ずから食つた。

「宮での話し合いは案外簡単にいきそうだ。宫廷側は王女に付いたいが建前がある、ショウギは完全に孤立している、あの女はうまく丸めこまれて殺されるだろうよ。宰相は中々のやり手だな」

「ショウギは誰に殺されるんデスカ？」

「宰相の手の内のものか、王女の手の内のものか、おれらかに」少女の手にあつた握り飯はなくなり、男はその掌に付いている米粒を舐めとつている。

「スザクでは、民が鍬や鋤をもつて続々集まっている。一日もたつてないのにすごい数だ」

「数ハ

「約三千。これからも増える。対し宫廷側は約一万。だが、王女側が勝つだろう」

「言いきれる理由ハ？」

「シラギ黒は大層部下に慕われていたらしい。特に黒の両腕と呼ばれていた二人の副将軍は、宫廷に憚ることなく不満を漏らしている。いや、威勢の良すぎるじいさんと女だったよ」

思い出したらしくイランはクツクツと笑つた。掴んでいたワ力の手首を放るよう離すと、水を飲む。

「軍の上がそんなんだ。戦場で黒が目立てば、あつという間に宫廷軍は王女側に寝返るな」

「分かりまシタ。ジュズサマに伝えておきマス」

「あと数日で終わる。頼んだぞ」

ほぐすように腕を一回転したイランは、裏口を出た瞬間に消えた。ワ力はそれを見送った後、老女に報告をするため中に戻つた。

* * *

前後左右を見渡しても、スザクへと続く道は武器を持つた民であふれていた。現代のテレビで中継される、大型連休の観光地のようだ。小さなティエンランの色んな村や町から人が押し寄せているのだ。案の定、港付近では渋滞している。

「王女を助けてやろう」

「下賤の女じゃない、我々の王だ」

声も聞こえた。その顔は一様に生き生きとしている。

「現代以上の賑やかさだね」

「それよりも……」

カスガに会えるのだろうか。シギは不安になってきた。あいつ、調子に乗つて殺されていなきやいいけど……。

「王女たちの周辺を探したらいるよ。多分」

リウヒがしぐくもつともな事を言つた。

スザクに入ると、あちらこちらに人があふれ返つていた。宿は無料、一般家庭や酒場、商船や海賊船まで民の為に解放されているという。大盤振る舞いの心遣いに民の気概は一気に上がつた。

「さすがは我らの王女」

「おれたちのことを考えてくれている」

どこにいっても、王女を褒めたたえる声で一杯だ。当の本人は、その民の生活に対する不満を聞いて回つているらしい。

「お前、あんまり出歩かない方がいいな」

「うん」

王女にそっくりのリウヒは、変装のつもりか男衣に長い髪を後ろで一つに括つていた。人々に可愛いとシギは目を細めてしまう。

そして、目的のカスガはあつさりと見つかつた。人々に囲まれている王女とトモキを、建物の蔭から変態のように覗き見していた。

「あれは……まさしくストーカーだよね……」

「どこからどう見ても犯罪者だな……」

ため息をついた二人は、そのストーカー犯罪者にむかつて駆けいつた。

「カッスガー！」

大声を上げてリウヒが抱きつくと、カスガは満面の笑みで幼馴染をクルクル回した。

海を背景にしたそのシーンは、まるで少女マンガだったと後にシギは語る。

久々の再会を祝つた三人はそのまま、カスガの宿へと向かつた。

「チームカスガ、再結成だね！」

「よく宿がとれたな」

「ぼくは少し前からここにいたからね。しかも今は無料だし。ああ、でもベッドが二つしかないんだけど……」

「いいよ、別に。わたし、シギと一緒に寝るから」

照れたように視線を交わしあうリウヒとシギに、カスガは絶句したあと、そうか、と呻いた。

「おめでたいことだけどさ、ぼくがない所でやつてね。そういうことは」

「やだもう、馬鹿！」

リウヒが思いつきりその背を叩き、カスガはむせた。

王家の血を引いているかも、王女の生まれ変わりかも！ と興奮状態のカスガから言われても、リウヒは鼻を鳴らしだけだった。

「だからって別に、お金持ちになれる訳じゃないし。事実かどうか分からぬしさあ」

「なんでそんなに冷静なの？ テイエンランの王家の血だよ！ あの王女だよ！ ああ、生き残りがひそかに生きているって本当だつたんだ、しかもぼくの幼馴染だつたなんて……」

「カスガー。落ち着いてよ。うちは平凡なサラリーマン家庭だし、わたしはあの王女が嫌いなんだから」

「何？ 嫉妬してくれてんの？」

シギがリウヒの頬を撫でた。リウヒは馬鹿、と柔らかく笑う。

「そこ、禁止。なんか恥ずかしくなるから、いちやつくなの禁止」

「どちらにせよ、王女の血を引いていようが、生まれ変わりだろうが、わたしはわたしだもの。関係ないもの」

あ、でもあ的人生を辿るのはしつこうで嫌だ、と顔を顰めた。

「シギとは絶対離れない」

「おれもー」

クスクス笑う馬鹿一人、いや、バカップルにカスガは、頭を抱えた。

「君たちさ……隙あらばベタベタするの止めてくれる？ 見苦しいし、恥ずかしいよ……」

「「めん、ごめん。でもカスガもトモキの生まれ変わりなんじょうう..」

「うーん。分かんないけど」

「いいなあ、お前らは」

心底うらやましそうにシギが言った。

「おれの前世の人間はどこにいるんだろう？」

「案外近くにいるかもしねないね」

「ここ、海の近くだしね」

リウヒとカスガが笑う。

そして、シギたちの話を聞いて、カスガの表情が変わった。

「君たちがそんな所にいたなんて思つてもいなかつたよ……」「王女が王に立つ。ただそれだけのことなのに、どこまで裏があるのだろうか。

カガミというオヤジ。ジュズという老女。一人の思惑は一緒なのだろうか。それとも別々なのだろうか。

しかも

「ハヅキが例の家庭教師だつたなんて……。いやまさか……でもトモキの弟だつたんだよな……」

考え込むカスガに、リウヒがきょとんとする。

「どうしたの？ ハヅキがどうかしたの？」

「リウヒは知らないの？」

「なにが」

シギと目が合つた。その顔が歪む。そうだよな、言えないよな。リウヒは、幼馴染は知らず知らずの内に歴史の中に関わっていた。まさかとは思うが、そう考えた方が自然だ。

多分、知れば大きなショックを受けるだろう。

これはアウトなのか、セーフなのか。

だけどもカスガの知る限り、歴史の道筋はブレていない。となると、

もしかして自分たちがここにきたのは、必然だつたのか。

そう思い当つた瞬間、体が足元から一気に冷えてきた。

「……なんでもないよ。それよりも、もう日が暮れるね。ご飯食べにいこうか」

「ねえ、カスガ！ 気になる」

リウヒが裾を引っ張つた。

「何でもかんでも、ぼくに聞かないでよ！ 聞いたら分かると思わないでよ！」

声を荒げたカスガに、驚きリウヒが身を震わせた。

「あ……『じめん』

「いや、ぼくも……。もし、現代に帰つたら調べてみて」

きつと、リウヒはものすごく泣くと思うけど。とは言わなかつた。

「おれが、聞きづらくなつてしまつたな」

場を救うようにシギが明るい声をだした。

「ジン国、第三王子のヤン・チャオのことなんだけど」

ジユズに元気かと聞かれた、なんか繋がりがあるのかな。

「その老女自身、ぼくは分からぬけど……。王子は……ほら、愛姫スズの話を知つてゐるだろ？」

「あ、知つてゐる」

リウヒが声を上げた。

「ヤン・チャオは溺愛してゐた恋人のスズを殺されたんだよね。それが原因で性格が変わつたって」

「何で歴史嫌いのお前が、そんなこと知つてゐるんだよ」

「恋愛ものは別なの」

にっこり笑うリウヒに、シギの手が伸びる。カスガの咳払いでの手は引っ込んだ。

「ヤン・チャオが王になつてティエンランに攻めてきた、でも戦争中に死んで、ジンは内戦がはじまつたんだよな。それは知つてんだけ……」

「そうそう。狂王の別名の通り愛姫スズがいなくなつてから、滅茶苦茶な政治をして嫌われていたんだ。で、その人は病弱で有名だつた。実際は建前で、放浪癖のある人だつたらしいけど」

「あのババア、おれを引つかけたのか」

シギが舌打ちをする。そして、ふと顔色を変えた。

「おれもヤバかったかもしれない……。それより、お前だ、カスガ。今後一切王女をつけ狙うな。妙な連中に目えつけられてるぞ」

老女と少女のやり取りを話したシギに、カスガとリウヒも蒼白になつた。

「あの子、なんなの……？」

「そんな、ぼくのライフワークだったのに……」

あと「田でこの騒ぎは終わる。そして、伝説の王女が誕生するのだ。

* * *

「カガミサンの毒をもつ一段階強くするよつに、できれば一ヶ月以内に死ぬほどで、と伝えるよつ言われマシタ」

「即死するのはヤバいしなー。カナンに相談してみるわ。けど、それなら最初つからそう言えってえの。なあ？」

台所に立つワカの前にいる男は、何かを探すよつに扉や棚を開け閉めしている。

「そんな所にお酒はあります」

目付きの悪い男は、舌打ちして棚を閉めた。

「お前、隠したな」

「アカンに酒を渡すナ。イランにそつ言われたノデ」

あの渋チン。再びアカンは舌打ちする。

「他に何がありまスカ？」

「戦になる事は間違いねえよ。今度はどこでそれをするかシャカリキ検討中。スザクは王女の大盤振る舞いと兄ちゃんの武器大量仕入れ、及び民衆のウサウサな熱気でもつ行きたくなえ。ああ、そうだ」

男は嫌らしく笑うと、ワカに向き直った。

「お前が情けをかけて逃がした男な、スザクに現れただぞ」

しかも。田を見開く少女を楽しそうに見やる。

「王女そつくりの女を連れてな。さらに、あの不審な男とも合流した。話していた言葉はさっぱり分からんかったが、ジユズの単語は出てきたなあ……」

凍り付いて動けないワカの両肩に、アカンの手が掛けた。耳元で囁めるように囁く。

「イランにやまだ言つてねえ。事態が動き始めたら、それどひるじ

やなくなるが、やつが今知つたらどうなるかな……？

「何が望みテスカ」

男の指が震える少女の唇をなぞる。

「つれねえこと言つなよ、分かつてんだな……」

一転、床に正座すると、アカンは頭上で両手を合わせた。

「お酒を下さい、お願ひします！」

「駄目、駄目テスヨ！ 絶対にアカンに酒を渡すなつて、渡したら

逆さ吊りの刑だつていわれてるんですカラ！」

「でもさー、おれがさー、ツルツと口を滑らしあやつたら、あいつ
ら、殺されるよー、お前もヤバいよー」

「うひッ……！」

「ちよつとだけ、ちよーつとだけでいいんだよ。あれがないと、お
れ、仕事できねんだよ、別世界に行けないんだよー」

今でも十分、別世界じやないかとワカは思つたが、しぶしぶ酒を取
つてきた。

「庭に埋めていたのかよ、お前……」

アカン愛用の徳利に、一杯分だけ入れる。瓶の底をアカンが持ち上
げたため、大量に注いでしまい、ワカは悲鳴を上げた。

「よーし、よしよし。これでしばらくはがんばれるぞー」

キュッと徳利の蓋を閉めると、「んじゃ、いつくるわー」弾むよ
うな声を残してアカンは飛んで行つた。こんなに無くなつちゃつて、
どうしよう。田の高さに瓶を掲げ上げると、三分の一に減つている。
ワカはしばらく考えるように頭をかいていたが、呼び鈴の音に家の
奥へと消えた。酒瓶を隠すことは勿論忘れなかつた。

「お茶が飲みたくなつたの。入れてくれないかしら。今日は、そうね、中つ国渡りのものがいいわ」

はい、とにつこり返事をし、再び台所に引っ込んだ。
不思議な老女だ。名門出身ならではの品の良さと、このじ時世でも贅沢ができる環境はさすがというべきか。そして、なぜかワ力だけを手元に置き、他の仲間は一切寄せ付けなかつた。報告と命令は、全て己を通してやつている。

まあ、人それぞれだから……。もつと変な雇い主もいたし。
茶器を盆にのせ、ジュズの前に置いてゆく。老女はおいしそうに一元服した。

「あなたは本当にお茶を入れるのが上手ね」

「ありがとうございます」

先程のアカンの報告を伝える。ジュズは聞きながら静かに茶を飲んでいた。

「明日、もしくは明後日に事態は動きマスネ」

「元気な王女のお陰で、ずいぶんとはやまつてしまつたのねえ」

でも

「そうなるとあなたともお別れね」

寂しそうに老女は笑つた。

「ねえ、ワ力。どうしてわたくしがこんな事をしているのか分かる？」

歌うようなその声に、少女は首を振る。

「あなたと同じ、ただの仕事よ」

ジュズは優雅に首を巡らせ窓の外を見た。

「仕事のつもり、だつたのよ。愛する人と娘を殺されるまでは」

皺に刻まれた細い指が、茶器をなぞる。

「組織つて不思議ね。弱体化すればするほど、上部は犠牲を求める

のよ。だから、あの子には駒になつてほしくなかつたの。自分の目で見て、自分の頭で考えて、自分の信念で行動する人間になつてほしかつた。これはタイキとカガミの願いでもあつたのよ。そして、きつと、この国の「

楽しそうにクスクスと笑う。

「もしかして、わたくしはあの小さな王女に娘を見ていたのかもしれない。そして、同じ年のあなたに王女を重ねていたのかもしれないわね」

愛おしそうにワカを見ながら、茶器を卓に戻す。にっこり笑つたワカがお代りを注いだ。

「王女が王になつてからが、正念場でしうね。でもあの子は何もかも飲みこめる強さを持っているから」

だけど、あのタヌキは……それだけでよしとしないでしうね。息子でさえも駒に使う男は、貪欲だわ。その内、あの可愛い娘を傀儡の王にするかもしれない。

「だから、お先に西へいってもらつのよ。どうせすぐにわたくしも追いかけるもの。それまでタイキと仲良くお茶でも飲んでいるはづだわ」

「今後、ジュズサマはどうされるのでスカ?」

「そうね、体が動く内にまた旅でもしようかしら」

静かに笑うと、窓から注ぎこむ陽光に目を細めた。

* * *

窓の外には、夕闇が広がり始めている。寝台の上にはカガミが苦し

そうに息をしており、マイムが医師から薬を受け取つていた。

「これを夕餉後に飲ませるようだ。無理をすると命に關わります。絶対安静になさつてくださいね」

「分かったわ。ありがとう」

リウヒもぺこりと礼をする。白髪の背の高い医師は、いいえ、と白

髪を震わせて言ひつと、助手の少年を引き連れて部屋を出た。宿を出た二人はすぐさま裏手に回り、衣を脱いだ。医師は髪と髪をむしり黒装束になると同じく黒装束になつた少年に僅かな声で言ひつ。

「短時間でよくやつてくれた、カナン」

「とんでもないです。イランさん」

そのまま壁を上つて飛びように消えていった。リウヒは勿論知らない。

「なんか、こいつの嫌なのよ……。早く良くなつていつものタヌキに戻つてよ……」

「いいねえ。美人なお姉さんに看病してもらえるなんて、オヤジ冥利につくるよ」

カガミが、せわしない息をしながら笑つ。

「余計な事を言つ元気はあるのね。リウヒ、下でお水を貰つてきてちょうだい」

「分かつた」

部屋を出ると、カグラにかちあつた。

「どうしたのです、酷い顔をしていますよ」

「そうか？」

一向に良くならないカガミ、聞くのも苦しい民の声、これから歯向かう富廷。この一日でそれらはどうしつとリウヒの肩にのしかかっている。

カグラはふと微笑むと、リウヒの頬に手をやつた。

「では、わたくしが勇氣づけのおまじないをしてあげましょ」

「おまじない？」

首を傾げるリウヒにカグラの顔が近づいてくる。驚きで動けないその唇に、男の唇が触れそになつた瞬間、部屋の扉が開いた。

「馬鹿！ そして馬鹿！ なに考えてんのよ、こんな所で！ リウヒー、あんたはさつさと水を貰つて来なさいー」

「殴る事はないでしょ、殴る事は。わたくしはただあの子を慰めようとして……」

マイムとカグラの言い争いに、恐れをなしたリウヒは転がるよつて階下へと走った。

「またやつてるんだ」

帰ってきたキヤラが感心したように、上を見る。

「なんだか、ぼくの中のマイムさん像が崩れていく……」

その隣でトモキが悲しげにうなだれた。

深夜。リウヒは一人座り込んで、海を見ていた。時々小さなため息をつく。

宿の後ろにある黒い海は、昼間とは違ひじまでも闇と一体化していた。港の灯りが夜も遅いため落ちている。

先陣切つて出るとは言つたけれど。後ろの壁に凭れた。

本当は怖くて仕方がない。でも、わたしから仕掛ける戦なのだ。なのに、みんなに守つてもらいながら戦うなんて、情けなすぎる。

「どうしたのです、こんな所で」

低い男の声に、びくりと体を震わせたりウヒは、その姿を確認して安堵の息をついた。

「なんだ、シラギか……。驚かせるな」

「それは失礼いたしました」

シラギはリウヒの横に同じく座り込むと、視線を海に向けた。

「お前には、申し訳ないと思つてゐる」

しばらくの沈黙の後にリウヒはぽつりと言つた。

「大切な部下たちと対峙しなくてはいけないし……。ほとんど、お前に頼る形になると思う」

「まあ、確かに……。富廷に話し合ひに行つた折には、副将軍たちに泣いて縋られましたが」

僅かに苦笑した。

「タカトオとモクレンが？」

一度会つたことのある、シラギの両腕と呼ばれる老人と女だった。

タカトオは元気なおじいさんで背筋がしっかり伸びており、リウヒ

を見て、「うちの孫をぜひ婿に」と笑つた。

モクレンは、緋色の燃えるような髪と藤色の瞳の、美しい人だつた。宫廷軍の唯一人の女性だ。二人とも、シラギを尊敬し本当に慕つてゐるのだと感じた。

横のシラギも思い出しているのだらう。深いため息を漏らした。わたしのせいだ。

そうだ。トリウヒは心中で手を打つた。

「なあ、シラギ。勇氣づけのおまじないを教えてもらつたんだ」

「なんですか、それは」

「うん」

顔を上げたシラギの唇に、リウヒの唇が重なる。まるでぶつかつたような、色気もへつたくれもない口づけだつた。

シラギはただ、目を見開いて硬直しているだけである。

「……どうしよう……。自分でやらせたものの、どうしたらいいのか分からず、リウヒは困つてしまつた。これでいいのだろうか。こんなので本当に、勇気なんて出てくるのだろうか。

息を止めてしばらく口をくつづけていたが、苦しくなつて離した。

「き、効いたか？」

シラギは石の如く固まつている。

「あの、シラギ？」

不安を感じて顔を覗きこもうとする、腕を引っ張られて抱え込まれた。

「ぐつふえ！」

思わず蛙を潰したような悲鳴が上がる。これもおまじないの一環なんだろうか？

「……とてもない勇氣をもらつた」

呆けたようなシラギの声にリウヒは安心した。そうか、効いたか。良かつた。

「リウヒ」

顔を上げようとしても、シラギの腕はびくともしない。

「わたしは富ではなく、あなたの為だけにあります。だから、明日の事は心配しなくていい」

そのまま、力を込めて抱きしめられた。

「ところでこのまじないは誰に教えてもらつたのだ

「カグラ」

いきなり腕の中から引き剥がされた。キヨトンとするリウヒに、シラギは真っ青になつて声を強める。

「まさか、まさか、あの男に……！」

「してない。直前にマイムが乱入してきて、いつもの」とくだ」深い安堵の息を吐いたシラギは、再びリウヒを抱え込んだ。しばらくの間、二人はその状態で海を眺めていた。

宿の壁に張り付いて覗きこんでいる、痛々しい顔、感動している顔、髪を引っ張られて顰めている顔、銀髪を引っ張りながら微笑んでいる顔に気付く事もなく。

後日「勇気づけのおまじない」とややは唯單にカグラのからかいで、実際は恋人同士がやる口づけだとリウヒは知った。恥ずかしさの余り、しばらへシラギの顔がみるとことができなかつた。

第八章 セイリュウケ原の戦い 1

周りにいる人々の顔は、みな興奮できりついていた。リウヒはなんとなく心もとなくなつて、横にいるシギを見る。その視線に気が付いた恋人は、安心させるように笑うと優しく肩を叩いてくれた。反対側にいる幼馴染は、鼻を膨らまして若干目を血走らせている。

遠く前方には、王女とその取り巻きが威厳さえ漂わせる風に馬の手綱をとつていた。

一行はセイリュウケ原に向かっている最中である。

戦といつものは男の本能をくすぐるらしく、カスガとシギは参戦する声を揃えた。リウヒも、仲間はずれは嫌だとばかりについてきたが、すでに後悔している。

今からわたしは殺し合いに行くんだ。

しかし現実感がない。よく晴れた空の下、まるでどこかの祭りにでもいくような、浮足立つた雰囲気だ。

こんなで人を殺せるのだろうか。武器は全てに行き渡らず、民の多くは鍬や鋤を抱えている。それすらもない民、そしてチームカスガが手にしているのは、木刀だった。

「木の棒と布の服じゃねえかよ。鍋の蓋はねえのか」

「レベル一の装備でラスボスに挑む気分……」

「大丈夫。ぼくらは勇者じゃない」

妙に呑気な会話をしている内に徒步が早足になつてきた。周囲も同じ速さで動いている。

「ねえ、なんかさ……。スピード上がつきてない?」

「上がつてるな」

「上がつてるね」

誰からともなく走り出した。釣られてみな走り出す。

「あの、これ、走っているよね?」

「走つてゐるな」

「走つてゐるね」

この走るという行為は。

ほとんど全速力で走りながらリウヒは思った。
なんだか気持ちが高ぶつてくる。誰もいなくなつた商家、人浚いをして
いた門番、許しておくれと泣いて叫んだゲンさんの顔、亡くなつたおかみさん。全ての原因は今から戦う富廷にある。そうだ、悪いのはみな、あの富廷なのだ。誰が企んだ道筋にせよ、その言うとおりになつた悪い富廷。わたしたちは、これから悪者を退治していくのだ。

快感が体を駆け巡つた。

ああ、正義つてとても気持ちがいい。

* * * *

みな気がせいっているのだろうか。馬の足は、後ろの気迫に押される
ように段々と早くなつてくる。ついにリウヒは駆け出した。徒步の
者も全力で走りながら付いてくる。髪が後ろになびいた。
速度が上がつてゆく、高揚感が体を包む。楽しくさえなつてきた。
今、ここで大笑いしたいくらいだ。

「なんか、樂しつすね」

横で声がした。本当に楽しそうな、これから祭りにでも参加しそうな声だった。

「ああ」

真つ直ぐに前を見つめながらリウヒも笑つた。

「わたしもだ」

富廷軍はまるで計つたように何列かに整列して王女たちを出迎えた。
馬を走らせつつ、その姿を確認するや否や、リウヒは声を上げた。
同時にシラギとカグラが左右から馬を駆つて猛烈な勢いで軍に突入する。

シラギの槍が日に煌めき、あつという間に三つの首が飛んだ。同時に力グラの剣が舞い、二人の男が地に倒れた。軍が動搖する間もなく、狂ったように海賊や民たちが押し寄せる。爆発音が響き、人影が数個吹っ飛んだ。

意識が一瞬飛んだ。目の前の男の腹には、死体から拾つた剣が刺さっている。刺しているのは自分だった。引き抜くと、男は崩れるようになれた。そのまま動かない。大声がして後ろを振り向く。黒い鎧が襲いかかってくる。足が硬直した。

「シギ！」

鎧は叫び声をあげると体を反らせて崩れ落ちた。カスガが同じく拾つたのだろう、剣を振り下ろした格好で荒い息をしている。

「助かった」

「うん」

この、体の底からわき上がる凶暴な気持ちはなんのだろうか。快感ですら、感じてしまう。狂っているんだろうか、おれは。剣を振り回して人を殺す。ここではそれが正しいことなのだ。殺さなければ自分が死ぬ。そうだ、やらなければ、やられてしまう。

横のカスガも目が逝っていた。とてつもなく残忍な顔をしていた。きっと、おれもそうなのだろう。シギは自分を励ますような掛け声をかけると、再び黒い鎧に襲いかかつた。

声を上げて、リウヒは逃げ惑つた。なんなのだ、ここは。目の前で繰り広げられているのは、まさしく殺し合いだった。先程の興奮はどこへやら、ただただ、恐怖感しかない。

濃く漂う血の匂い、地面に横たわる数々の死体。ぞつとする。

空を見て、口を開けている死人。うつ伏せになつて踏まれまくつて

いる死人。

わたしはなんでここにいるのだ。なにをしているのだ。

ゲームの中では、復活の呪文でいつもたやすく生き返るのに。怪我なんて回復魔法ですぐに癒えるのに。そんな世界じゃない、そんな親切な…。

ふと陰りがさして、振り返つた。大男が自分を見下ろして、剣を振りかざしている。

お父さん、お母さん！

思わず身をすくめて、体を縮こまらせた。わたし、死ぬ！

「リウヒー！」

大男がぐらりと傾いだ。その巨体を蹴りあげたシギがリウヒを睨みつける。

「こんな所でぼつとするな、馬鹿！」

「だつて、だつて……」

「だつてもヘチマもねえ！ おれから離れるな！」

シギの衣は血があちらこちらに付いていた。頬も切られたような線が一本入つていて、流血している。リウヒを庇うように手を回したシギは、黒鎧たちを切りつけていく。

足手まいになるのは嫌。リウヒは唾を飲み込んで、皿を据えると襲ってきた男に奇声を上げて剣をなぎ払つた。

* * * *

目から涙が出てきたが、まったく気付かず、カスガは黒鎧の剣を受けた。翻るように剣を払つてくる。

勿論、一般市民であるカスガたちがそれを職としているプロの兵に適う訳がない。

しかし気概は勝つた。なにより戦場を駆け抜けた黒将軍にひるむよ

うに富廷軍は戸惑つてゐるようだ。

ぼく、ここで死ぬのかな……。でも伝説の戦いで命を落としたなんて、古代オタクとしては冥利に尽くるじゃないか……。

と、黒鎧が動きを止めて体を痙攣させた。その後ろで、シリギがひらりと馬を巡らせる。瞬間、黒鎧の首が離れて、血が噴水のようにほとばしった。

「うわああ！」

絶叫してカスガが飛びさすつた。少しちびつた。

血生臭さに咳きこむ。これが戦場なんだ。平和に育つてきたカスガには、その中においても未だ現実感がない。テレビで報道される、遠い国の内乱。映画の中。もしくは歴史の中でしか存在しないものだつた。じゃあ、今、ぼくはなにをやつているのだろう。どうして剣が血で滑つて切りにくいなんて思つていいのだろう。

意識が朦朧としてきた、その時。遠くで凜とした女の声がした。

「富廷軍、副将軍モクレン及び部下五百名、これより王女側に付きまする！」

辺りから、狼狽とも感嘆ともとれないどよめきが上がる。

今度は反対側から老人の声がした。

「こしゃくな、小娘が！ わしが言おつとした事を先に言いおつて！ 富廷軍、副将軍タカトオ以下同文！ 黒将軍さまに剣を向けるものはわしが倒す！」

釣られたように、我も我もとあちこちで上がり、富廷軍は内輪もめを始めた。それも数分で収まつた。次は周りからは王女を担ぐ声が聞こえ始める。

今の今まで、敵だった黒い鎧たちはいつの間にか王女に引き連れられて、民や海賊と共にぞろぞろと歩き始めた。

なに？ なんなの、このあつけなさは……。終わつたの……？

思わず呆然としているカスガの肩を、シギが叩く。

「リウヒ見なかつたか？」

「えつ？ はぐれたの？」

シギは舌打ちして辺りを見渡した。カスガも首を巡らせたが、見当たらない。

「あつ、じり、お前どこにいってたんだよ」

見る限りリウヒが真っ青な顔をしてシギの腕を掴んでいた。

「し……シギとそつくりな人に、声かけられちゃった……」

勇ましいな、お嬢ちゃん。背中を叩かれて顔を上げたリウヒは、仰天した。シギと瓜二つのその男はきょとんとリウヒを見ていたが、歯の三本抜けた男と一緒に走つて行つた。

「今日は祝杯だぜ」

「おれは酒より女がいいなあ」

そう言いあつて好色そうに笑つたという。

リウヒはギッとシギを睨んで、その首を締めにかかった。

「どんだけ昔から女好きだつたの！ ああん？ このエロ男！」

「待て待て待て、一千年前の前世の責任まで、おれ、取れねえ……

カスガー！ 助けてー！」

「いやー、久しぶりに見る光景だねー」

都が見えてきた。誰からともなく声があがり、それは段々と膨れ上がりってきた。勝鬨とねの声に合わせて、拳や武器を上げる。その合間に海賊の掛け声らしきものが混じる。富廷軍も笑いながら声を合わせる。カスガたちも大声で叫んだ。

遠くには、復興した富廷の瓦が光を浴びて燐然と輝いていた。

セイリュウケ原の戦い 2

宫廷と都が見えた時、リウヒは安堵の息を漏らした。道を間違えないで良かった……。

後ろでシラギとカグラが、小声でやり取りをし、カグラが列を離れて都へ駆け去った。

「なにをしにいくのだ」

「あちらに報告に行つた」

後ろでは民や海賊たちの声が上がっている。ふと振り返ると通過した村や町から付いてきたのか、それとも、駆け付けたのか人数がとても多い数に膨れ上がっていた。子供や老人までいる。

この人たちの生活を、わたしはこれから背負うのだ。

あの光り輝く本殿の中で。

その責任の重さに心が沈んでくる。

だけど、大丈夫。大好きなみんながいてくれるから、わたしは自分の大義を果たすことができる。

「リウヒ」

シラギが横に馬を進めた。

「上意の礼を知っているな」

「勿論だ」

ティエンランの王はその生涯に一度だけ礼をする。最上位の礼を、即位時に国民に向かつて。

「これからやるのだ。あの正門下で」

「……父王と、ショウギは……」

「我々が付く頃には、すでに崩御遊ばれ、消えている」

思わずシラギの顔を覗きこんだ。シラギは真っ直ぐに自分を見返している。

「そうか。分かった」

リウヒは歯を食いしばると、再び視線を天の宮に向かた。

都の大通りは沢山の人たちが両側に並んで、歓喜の声を上げて出迎えた。

みなが声を上げれば上げるほど、笑顔を見せれば見せるほど、寄せられる期待に潰れそうになる。

いやいや。リウヒは顔を上げた。まだ王になつていないので、弱音を吐くのか、わたしは。

大階段前で馬を下りると、長い長い階段を登りはじめた。あの頂点が、わたしのいるべき所なのだ。後ろからは歓声が絶えやまない。

キララが小声で愚痴をこぼし、トモキがその腕をとつて励ましている。

シラギはほとんど坦ぐようにカガミを支え、マイムは平然とした顔で上つていた。

トモキがいなければ。

上を見上げながらリウヒは登る。

トモキがいなければ、わたしはここにはいなかつた。きっと、あの東宮で殻に閉じこもつたまま暮らしており、謀反でシヨウギに殺されていただろう。

そのトモキを連れてきてくれたのは、シラギだつた。初めて友達だといつてくれたのは、キララだつた。

姉のように、ただの少女として接してくれたマイム。

カグラは よく分からないな。リウヒは小さく笑う。

そして、外の世界へ連れ出してくれたのは、カガミだつた。駒として見られていたとしても、掛け替えのない世界を見せてくれた。正門下に立つたリウヒは驚いた。宰相以下、大勢の臣下がこちらに向かって跪礼をしている。トモキ達も後ろに立つて、それに倣つた。リウヒは微笑むと民衆に向き直る。

わたしの大切な国民たち。

両手を胸の前で合わせた。

この身にかえても。

右足を後ろに回す。地が小さく鳴つた。

我が国と我が民を守ることを誓つ。

ゆっくりそのまま沈み右膝を付くと、静かに頭を下げる。

＊＊＊

王女が頭を下げるとき、爆発音に近い歓声が沸いた。熱狂状態にあるといつていい。

胸の前で、手を合わせて、膝について頭を下げる。ただ、それだけの動作なのに、なぜこんなに感動するんだろう。

リウビは涙をこぼしながら、国の頂点にたつた娘を凝視していた。ねえ、小さな王女。

わたしは、ずっとあなたが嫌いだった。

美人で勇気のある正義のお姫さま。

そんな典型的ヒロインのあなたが大嫌いだった。

同じ名前で、小さな頃から苛められた。

コンプレックスもあつたし、親も恨んだ。

でも、実際のあなたは違った。

自分とそつくりな平凡な顔だったし、王に立つその行動は、色んな人の思惑が絡んでいた。

それでも、今は、あなたと同じ名前だとこいつとに誇りをもつている。

もしかしたら、あなたの生まれ変わりだということが素直に嬉しい。

こんなに民に祝福されているあなたを、すごいと思う。

感嘆するほど美しい礼をしたあなたを、とても尊敬する。

あなたはあなたの人生を立派に生き抜いたけど、わたしはこれから的人生を、わたしなりにがんばって生きてみせる。

わたしがなぜ、この時代に来たかは分からぬ。

だけど、あなたを見ることができて本当に良かつた。

「あなたたちには、お世話になつたわね」

最後の報告をしたワ力に、ジュズが微笑んだ。

「ショウギの息子が気になるけど……。まあ所詮、虫ケラだわ、丈夫でしょう」

それにしても、カグラは本当に変わったこと。目を細めてクスクス笑う。その顔は柔らかく嬉しそうで、美しかった。

「小さな王女の上意の礼は、とても見たかったのだけど、残念ね」

「見事に堂々としていたそうデス」

あのイランが褒めたくらいだ。

「これが報酬の後金よ。またお願いする事があれば、その時はよろしくね」

「ありがとうございます。ジュズさま、お元気デ」

老女が微笑んで手を伸ばした。そこにワ力が入るとゆっくり抱きしめられた。

とても温かくて、いい匂いがする。

母親とはこういうもののなか、と少し泣きそうな気持ちでワ力は思つた。自分には両親の記憶も幼いころの思い出も何もない。何度も血を吐き絶をした、苦しい修練の記憶しかない。

しばらくジュズは、母が娘を慈しむように頭を抱きかかえて背を叩いていたが、そつと少女の体を離した。

「あなたもお元気で。さようなら」

ワ力はにつこり笑うと、丁寧にお辞儀をし、部屋を出た。

外の雑木林では、イランが木に凭れてワ力を待つていた。

「お疲れ」

「お疲れさまデス。これヲ」

ジュズからもらつた金を渡す。イランは重さを確かめるよつて、「

三度掌で弾ませると、懐にしまった。

「以外と早く終わりましたね」

「あのチビが国王かー。小娘が権力持つと口クな事になんねんだよなー」

「はやく里に戻りましょうよ。働き過ぎてもつクタクタ」
上から声がする。

「帰ろうか」

木枝が揺れた。仲間たちは早速帰つたらし。

「いくぞ」

「先に行つててくだサイ。すぐに追いかけマス」

につこり笑つていつたが、イランは目を少し見開いてワカを見つめた。

「…………めずらしいな。いつもはいの一一番に駆けて部屋で爆睡するお前が」

「まあ……。今回、あたしは楽だつたのテ……」

「なにかあつたのか」

ああ。ワカは目を閉じる。怖くて優しい人。あたしの大好きな人。

「なんでもありまセン。帰りましょうカ」

「ワカ」

両手で首を挟まれ、上を向けさせられた。

「よく聞け。お前は心が弱すぎる。任務の度に余計な感情をはさむな。情を移すな。情けをかけるな。今回もそうだ。そして今までそんな事が何度かあつただろう」

それで失敗したこともある。イランは激怒しワカを半殺しにした。その時の傷は今でも背中に残っている。

「そんな調子じや、いつかお前の心は壊れるぞ。おれは、それは……」

イランの目が一瞬揺らいだ。

「…………頭として許せねえ」

「申し訳ありません……金輪際、一度となじよう氣をつけますノテ

……

あたしを見捨てないでください。目に涙をためて、イランを見た。

「お前次第だ」

静かに引き寄せられて、頬を撫でられる。一人とも目線は逸らさない。

「お前次第だよ」

親指の腹がワカの唇をなぞつた。

「あたし次第……」

死ぬ事も恐くない。

「そうだ。今後の仕事で証明しろ」

殺す事も恐くない。

「はイ……」

この男に見捨てられる事。それだけがワカの絶対的な恐怖だつた。

「以後このような事があつたら、容赦なく切り捨てるからな」

「はイ」

「よし」

ワカの髪をクシャリと撫でると、イランは凭れていた木から身を起

こした。はすみでワカがよろめく。

「帰るぞ」

少女の襟首を掴むと、イランは振りかぶつてその身を思いつきり、空に向かつて投げた。ワカは悲鳴を上げ、曲線を描いて飛んでいったが、民家の屋根に猫の如く着地した。そして何事もなかつたかのように跳ねて消えた。

今宵の町の灯りは消えそうになかった。

新王が誕生したティエンランの城下では、どこかの街角でもどんちゃん騒ぎで大盛り上がりだ。

リウヒとシギは宿の一室、ベッドの上で抱き合っている。甘い雰囲気は一切なかつた。明日への希望と新しい王を称える声や、楽しそうな笑い声が窓の外から、絶え間なく聞こえる。

セイリュウケ原から都に登つたあの高揚感、上意の礼の感動が過ぎ去つてしまえば、後に残つたのは戦で現実に経験した、殺し合いの恐怖だつた。

「未だにこの感触が残つてるんだ」

シギがリウヒの腕の中で、震えながら言つ。

「剣が人の体を突き刺した時の感触が手に……。あつけないほどずぶずぶ入つていって、そいつは倒れたんだ。多分死んだんだろう。他も血が飛んで……なんか臓器みたいなものが出てきて……。なあ、リウヒ。おれは人を殺したんだ。それも何人も」

「うん……」

「何人も殺したんだぞ。どうして逮捕されないんだ、これは罪だろう。死刑だろう。あの人たちも、奥さんがいて、子供がいて、父親の帰りを待つっていたのかもしれない。恋人がいて、結婚の約束をしていたのかもしれない。おれは、犯罪者なのに、人を殺したのに、どうして……」

「でも、シギが助けてくれなかつたら、わたしは死んでいた」

ねえ、シギ。聞いて。

「あそこで人を殺さなければ、シギは生きてなかつたんだよ。わたしだつて、生きてなかつた。今まで、人が死んでいくのつて他人事だつた……」

祖父や祖母の葬儀は、あまりにも儀式化し過ぎていて実感が湧かな

かつた。テレビの中は自分と関係のない遠い所の出来事だった。ドラマだろうが、映画だろうが、ニュースですらも。

だから、イベントにでも参加する気持ちで戦に出た。実感と恐怖は後から襲ってきた。

行くべきではなかつたのだ。

あの数々の死体。漂つていた濃い血の匂い。狂つたように殺し合つ人々。

それでも。

「わたしは、シギとカスガが生きていてくれただけで、嬉しい」抱いている腕に力をいれると、オレンジ色の頭に顔をうずめた。

* * *

酔いに任せて、見知らぬ人たちと抱き合い、肩を組む。どの顔も笑顔でいっぱいだ。

夜空の下、大笑いしながらも、カスガの心はあの戦のシーンを、繰り返し繰り返し再現していた。
ぼくは人を殺したのに、どうしてこんな所で笑つているのだろうか。笑えるのだろうか。

血と汗にまみれた体は、宿の風呂で落としたはずなのに、未だに生臭い匂いがする。

何人殺したんだろう。現代なら立派な犯罪者だ。死刑になつてもいいくらいの。

だけど、あそこではそれが正しい行いだつた。

なぜならば、それが正義だから。

宮廷軍を打ち破つて、正しい王を宮に届ける。そんな大義名分があつたから。

じゃあ、正義なら人を殺してもいいのか。

……分からなくなつてきたな。

カスガは、疲れて段差に腰を下ろした。

多分、シギとリウヒも強いショックを感じているだろう。一人に遠慮して外にでたはいいが、一人で耐えられる経験ではなかつた。

だつて、ぼくたちは人を殺した。それも何人も。

参戦した民も同じだ。殺人を犯した人なんてそういうなかつただろう。だけど、彼らは自分たちの生活を守る為に、あそこに行つたのだ。きっと今も、これからも誇りに思つだらう。

でもぼくたちはこの時代の人間じやない。帰れるか分からぬけど、未来の人間なのだ。

興味本位でついて行つた自分たちは、本氣の度合いが違う。しかし、時間を戻してまた戦いに参加するかどうかと聞かれたら、カスガは一も二もなく、参加すると答えるだらう。どちらにしても、しばらくはトライウマになりそうだ。

遠くに見える宫廷は、かがり火が焚かれており、闇夜に幻想的に浮かんでいる。

新しい王に立つた少女は、今頃何を思つてゐるんだろうか。

* * *

王座は、少女の体には大きすぎた。

その豪奢な椅子の上で、リウヒは膝を抱えてただ一点を凝視している。

竜が花や飛沫や風を従えて、天に昇る様を掘つた黄金の扉を。

夢のような楽しい時間は終わつた。永遠に続けていたかつた旅も終わつた。

これからわたしはここで、このティエンランの国王としての務めを果たさなければならない。

だけど、わたしのとつた手段は、最初から間違えていたのではないだろうか。

竜を睨みつける両目から涙が溢れてくる。

父王が崩御するまで待つていたら、戦はなかつた。それは思つたよ

りも早かつた。宫廷に自分が入った時、父はもう死んでいたのだ。
もつ少し、あともう少しだけ待つていればセイリュウケ原が、血に
染まる事はなかつた。宫廷軍だつて、ティエンランの民だ。
丁寧に埋葬するよう頼んだが、あそこで命を散らせたものにも家族
が、友達が、恋人がいただるうに。

小さく鼻を啜る。

わたしは、王の資格があるのだろうか。兄さまに、力ずくでも帰つ
てもらつた方がよかつたのだろうか。

柔らかい絹で包まれた膝は、涙でぐつしょりと濡れていた。

「陛下」

足音が聞こえて、目の前にシラギが膝をつく。

「……どうされたのです」

リウヒの目は相変わらず黄金の扉を睨みつけたままだつた。

「己の不甲斐なさに意氣消沈していたところだ」

そして、自分の声の頼りなさに再び情けなくなつてしまつ。

「お話を聞かせてはくれませんか」

優しいその声にリウヒは驚いた。この男は、こんな声も出せるのか。
そして、シラギに導かれるまま、ぼつぼつと語り出した。

「リウヒ」

武人の美しい手は、白い頬を伝つ涙をそつと拭つた。

「あなたは、あなたの正しいと思つたことをやつた。そしてその判
断は、わたしは間違つていないと思う」

静かに言い聞かせるようにシラギは言葉を紡ぐ。王座に座る少女に
跪き、その頬に掛かる涙を拭いながら。

「第一、最初から完璧な人間などいない。なんでも一人でやろうと思
うな。リウヒの周りには、わたしたちがいる。そして王を支える
臣下たちがいる」

「でも、これからも、みんなに甘えるわけには……」

「甘えではない。リウヒ。よく考えなさい。無理をして王が倒れた
らどうする。臣下は、民は不安に思い動搖するではないか」

「やうか……」

「そうです」

安心させるように笑うと、シラギは立ち上がった。手を差し伸べる。昔と変わらず黒一点を纏う男をリウヒは見上げた。そしてその手にて、自分の小さな手をのせた。

「東宮では、三人娘とあの連中が待っている。遅れるとモキがうるさいですよ」

リウヒも小さく笑った。

「ありがとうございます、シラギ。お前は頼れる男だな」

「お褒めいただき光栄です」

「ずっとわたしの傍にいてくれ」

シラギはなぜか、一瞬身を固めたが、嬉しそうに微笑んだ。

「御意」

* * *

王女が見事な上意の礼をしてから数日が経つた。

税は瞬く間に元に戻り、治安も緩やかに良くなつてきている。

チームカスガの三人も戦のショックから少しずつ立ち直つていったが、シギは、リウヒたちの前では何でもない振りを装つものの、寝る前に色々考え始めると、もう止まらなかつた。

人を刺した時のあの感覚。戦場の匂い。敵が向かつてきた時の恐怖。体は勝手に震え始め、後悔と胸の痛みが襲つてくる。

横で寝ているはずのリウヒが、敏感に察して慰めるように抱きしめてくれた。

「大丈夫だよ。あそこで亡くなつた人たちとは、みんな新しく生まれ変わるんだから。またこの世に生まれてくるんだから」

「なあ、リウヒ」

違う事を考えたくて、息を吸い込む。

「なあに？」

「お前が見た、おれの前世の人はどんなだつたんだ」

「うーんとね、他の人とは着てるものが違つて……多分、海賊だと思つ。鍬とか鋤とかもつてなかつたし」

「そうか、やっぱり海の男だつたのか。

「ねえ、シギ」

「ん？」

「現代で富廷跡に行つた時や、ほら、初めてキスした時……。シギはどんな声が聞こえた？」

「なんで、また今更……。」

「この娘と離れたくない、でもこいつはここから動けない。おれと一緒に来てくれ。お前を愛しているんだ。だけど言えない。言えばお前は困るだろ? つて。すごく悩んで葛藤していた」

「お願い、わたしの前からいなくならないで。あなたがこのまま、わたしを残して去つていくのなら、一緒についてゆきたい。でも、それは叶わない。恋する男について行く事もできない……つて、わたしの中の声はした」

シギは思わず身をおこしてリウヒを見る。

「分からぬよ。でも、もしわたしの前世が王女で、シギの前世があの海賊の青年だつたら……」

「どうでもいい」

そんなこと、どうでもいいとシギは思つ。

「おれはお前さえいれば、それでいい」

細い体を抱きしめると、リウヒも腕を回した。

「そうだね。わたしはわたしで、シギはシギだもんね」

「よくなーい！」

甘いキスをしていたシギとリウヒは、仰天して慌てて離れた。

「なんだよ、カスガ。驚かすなよ……」

「あー。びっくりした。寝てたんじゃなかつたの」

「バカッフル！ このバカッフル！ いやつへの禁止つて何度言つたら分かるんだ！ 一人淋しいぼくの気持ちも考えてよね。それに、

「人の前世が王女と海賊の男なんて、すごいことじやないか！」
しまった、古代オタクの魂に火が付いてしまったらしい、とバカツ
ブルは顔を見合せた。

「うんうん、すごいすごい。さ、寝ようか」

「どうして、君たちはいつもいつも、感動が薄いんだ……」

ため息をついてカスガがベッドに突っ伏す。

「だつてさあ、前世を知ったからって、別にどうなるわけでもない
しさあ……」

「このリアリストめ」

「カスガがロマンチストすぎるの」

「とにかく、もう寝ようぜ。カスガの前ではいややつかないからさ
「おやすみー」

蒲団をかぶると、リウヒがひつひつしてきた。そつと唇を合わせてくる。
「ばれなきやいいんだよね、と小声で囁く恋人にシギも小さく笑
つてキスをした。

こいつがいるから、おれはある恐怖を忘れることができる。カスガ
がいるから、笑うこともできる。

「ばれてるよ。本当に君たちは、超がつくほどバカツブルだよ……」
不貞腐れたようにカスガが言った。

不思議でならない、とカスガは首を捻る。

「どうして、この馬鹿一人は自分たちの運命をあんなに簡単に考えるのだろうか。

宿の朝ごはんを食べながら、田の前で話しているリウヒとシギを見る。」

一千年前から何度も生まれ変わっている魂が、導き合ったというのに。しかも現代から古代へとタイムスリップし、本人たちが生きている時代に。

さらに言えば、ティエンラン史上、最も有名な王女と、恋の叶わなかつた海賊の青年じやないか。

確かに、リウヒはリウヒだし、シギはシギだ。王女たちと同じ人生を辿るとは限らない。

だけどこの一人は、富庭跡で声を聞いたと言っていた。前世の記憶と何か共鳴したのだろうか。だったら、もっといろんな所に連れまわせば、いろんな記憶を引っ張り出せるのかもしれない。ここよりも、現代の方がいいのかな。なんたって、王女はまだ海賊の青年に会っていないし。

「なにニヤニヤしているの、カスガ」

「どうせ、口クでもねえこと考えていたんだろう」

「んー？　いやー。そろそろ現代に帰った方がいいのかなー、なんて」

「ふうん、トリウヒとシギがきょとんとした。

「わたしは帰つても、ここにいてもどっちでもいいけど

「おれも」

「どうやらバカップルはお互いがいれば、それでいいらしい。

「じゃあ、後での洞穴にいってみようよ。あ、その前にゲンさんにお会つておきたいな」

「ゲンさんは……」

二人から、あの親切親父の状況を聞いていても、カスガは会いたかっただ。

「いたたまれないかもしだいけど。すじくお世話になつたから、あいさつだけしておきたいんだ」

「分かった」

リウヒが頷いた。

「わたしは、バイト先の商家にもう一回行つてみる。もしかしたら帰つてきているかもしないし」

シギもリウヒについて行くといつ。正午に都の門の前に集合することを約束し、カスガたちは宿を出た。

宿の裏にいたゲンさんは、カスガの顔を見るとものすゞく複雑な顔をした。戸惑い、喜び、申し訳なさが見て取れた。

「お久しぶりです、元気そうで良かつた」

「……本当に申し訳ない。このわしを許してくれ」

「いいんです、そんなこと。ゲンさんのおかげでぼくらは、ここに信じむことができたんですから。」

カスガが笑うと、親父は涙をぽろぼろとこぼした。

「ま、縁があつたらゲンさんの宿で働くせてもらえますか」

声にならないのだろう、まるで子供のよう」「クククと頷く。

「いろいろとありがとうございました」

丁寧に礼をすると、カスガはにっこり笑つて踵を返した。

* * *

バイト先の商家は何度声をかけても、返事はなかつた。

「どにいつちゃつたのかなあ……」

あの子供たちに堪らなく会いたい。リウヒはシギと手をつなぎながら、トボトボと歩いていた。

「あつとどにかで元氣にしているわ」

「」の時代にケータイがあつたらなあ……」「

メールや電話でどこにいるのって聞けるのに。

「おれのケータイも財布も売られてしまったなあ

「わたしのも

ゲンさんに預けて、売られてしまった。

「現代で地層から出てきたりして」

「あり得るな」

クスクスと二人は笑つた。一千年後の現代がすぐ遠くに感じじる。人間つてその土地に馴染んだら、以前いた所は現実感が無くなつてしまつんだな。

「あつちはどれぐらい時間が経っているんだろう?」

もうリウヒは二十三歳になつてしまつた。普通に暮らしていれば大学を卒業して、就職しているはずだ。でもなんだか二十歳のままで止まつている感じがする。

「帰つたら時間がたち過ぎて、何もない世界だつたりして」「核戦争で全てが破壊されて、汚染された世界だつたりして」そんな事を考えると恐ろしくて帰るのが怖くなる。

「どんな世界だろ? おれはリウヒがいればいい」

繋がつている手がぎゅっと握られる。心がキュウと揺れて、ふいに涙が出てきた。

「シギ」

「ん?」

「大好き」

手を握り返すと、そのまま引っ張られて抱きしめられた。大通りの真ん中で、深いキスを何度も何度も交わす。周りの冷やかしの声は、二人の耳に全く入つてこなかつた。

* * *

一人で手を繋いで、正午までの時間、城下を歩き回つた。

もし現代に帰れたら、多分一度と二度には来ないだろう。一千年前の古代には。

帰るのが惜しい氣もある。秩序と自然が融合されたこの美しい世界。同時にとてもなく帰りたかった。排気とオゾンに汚染された空気の、「じちや」じちやしたあの現代に。

母はどうしているのだろうか。もしかしたら、なくなっているのではないだろうか。自分が時空の果てで恋にうつつを抜かしている間に。それを知るのが怖かつた。

「シギ。そろそろ門にいこう」

「そうだな」

なんとなく、山を見上げた。曇天の下でも宫廷は圧倒的な存在感を放つている。

あの小さな王女はあの中で王座に座つてこの国を治めているのだ。

お前の話も聞かせてくれ。

シギに思われているその人が、少しうらやましい。

ちょこんと椅子に座つて恋に恋するような目でシギを見つめた、小さな王女。

「わたしたちが教わつていた歴史つてさ」

横で同じく宫廷を見ていたリウビが言った。

「全てが真実じやないんだね」

研究者は実際にその時代に行つて見たり聞いたりした訳ではない。残された資料や遺跡を元に憶測し、推測する。願望もある。その資料自体がそうかもしれない。

「なまじ知つているからさ、有名人を見る感じで面白かつた」

「王女と内緒話をするくらいだったもんね」

棘はなく、柔らかい言い方だつた。

お前もハヅキとキスしただらう。内心苛立ちながら、シギは繋いでいる手に力を込めた。

勉強不足のリウビが知らないだけで、あいつもある意味有名人なんだぞ。

「わたしも王女と話してみたかったなー」

シギの心に全く気が付かず、リウヒは呑気な声を出した。

柳に囲まれた大通りに出た。石畳に整備された美しい一本道。背には富廷、目前の城下の門では、カスガが壁に凭れて待っていた。こちらに気が付いて手を振っている。

「なんだか、また旅をするみたいな気分だな」

「もし、あっちに帰れなかつたら、イーストエンド大陸を巡つてみたいな。海の向こうも」

「いいな、それ。楽しそうだ」

「クズハとチャルカに行きたいんだー」

「どうせ白亜の王宮見物と、チャルカで食いまくる気だろ？」「あ、ばれた？」

笑いながら、繋いでいる手を振った。

「君たちはさ。遠くからみているとさらにバカップルだよね。ついでか幼稚園児のカップルみたいだつたよ」

「えつ？ そう？」

「褒めてないよ。褒めてないからね」

三人は改めて、真正面に鎮座している富廷を眺めた。

なんだか、ここに来た時を思い出す。どつかの国のテーマパークと勘違いしていたあの時を。

「帰りたいような」

「帰りたくないような」

リウヒとカスガも、シギと同じことを感じているのだろう。

なんとなく横一列に並んだチームカスガは、同時に深い礼をした。

ティエンランの愛する天の富と、小さな国王に向かつて。

横にいた白髭の門番が目を白黒させていた。

黒が、自分の言をもう一度宰相に言い直している。

リウヒはため息をついて、額に手を当てた。

卓を囲む臣下たちは、不思議なものを見るよつな目で自分を見ている。

何で言葉が通じないのだろう、わたしは別にジン語を話している訳ではないのに。

いやいや、宰相もジン語ぐらい分かるだろう。ではなぜ通じないのか。

不思議だ。

「なりません！」

ようやつと理解してくれた、白髪の老人が声を強めた。

「大学は伝統ある学問の最高機関です。それをなくせとはどういうおつもりですか」

「そつは言つていらないだろう。シラギ、どうこう云ふ方をしたのだから一度ため息が出る。

「学問にかかる金の見直しをしたらどうかといったのだ。民の中に優秀な人物は一杯いるはずだ、その者たちにも可能性を見出しだしてやりたい」

「金がかかって当たり前のことなのです、勉学とは。それよりもですが、陛下。税を元に戻されたものの、未だに本殿の奥は工事が進められております。予算が……」

「足りないと？」

「左様でござります」

ならば、国王以下重鎮全員で、賃金稼ぎをしてはどうか。中々に楽しきぞ。

口元から出かかった言葉をリウヒは慌てて呑み込んだ。さすがに言える雰囲気ではなかつたのである。

「田利きの女官を集めてくれ。別に男でもいい、飾り物や衣に詳しいものを」

「何をなさるおつもりで？」

「先王とショウギの衣と飾り物を売つ拵つてしまおう。国宝級の物は手元に残す」

宰相は、ぱっかり口を開けた。シラギや臣下たちも、同じく口を開いた。

いつそすつきりして良いではないか。というコウヒの声は、静寂の中にぽつんと響いた。

それを打ち破ったのは、カグラの笑いだつた。

「先王はともかく、ショウギのものは高値で売れるでしょう。衣も簪もふんだんにありますし、陛下のお好みには合わない」

ショウギの元愛人は、クツクツとまだ笑っている。

援軍を得て、リウヒは得意げに顎を上げた。

「それでよいな」

白髪の老人は、まだ呆けたまま頷いた。物を売るという発想がないらしい。

正午の鐘が鳴つて、臣下たちは一斉に頭を垂れる。トモキに椅子を引かれて、リウヒは飛び降りた。

「本日の昼餉は本殿で召しあがつてください。政務の前に、スザクの長との面会がござります」

飯ぐらいうつくり食わせてくれ。

「分かった。トモキは食堂へゆくのだろう」

「はい。では御前失礼します」

丁寧に礼をすると、トモキは急ぎ足で北寮に向かつた。リウヒは首をかしげる。

何故、あの兄は最近ちょくちょく北寮の食堂へいくのか。

「ひどい男ですね。主を置いて」

「トモキらしくないな。どうしたのだろう」

後ろからカグラとシラギの声がした。

「何かつまに定食もあるのだろうか」

陛下はまだまだ、色気より食氣のお年頃なのですね、とカグラが苦笑した。

一日の終わり、夕餉の前にリウヒは東宮の小庭園で城下を見下ろす癖がついた。

日没と共に空は様々に色を変えて、大地を彩る。

後ろにはトモキが控えている。

「なあ、トモキ。わたしは王といつものば、何でも命令できると思つていたよ」

鶴の一聲で、宮廷は動くものだと思つていた。ところがそんなに生易しいものではなかつた。今までの慣習がある。長年積み重なつた慣例もある。宮は宮なりの規則が存在し、全てはそれに則つて動くようである。

流されて、巻かれてしまえば、その方が楽なような気がした。

「もしかしたら先王は国務に疲れ果てて、ショウギに逃げたのかも知れないな」

王なんて、ただ存在していればいい。國を動かすのは別に王でなくてもよいのだ。

逃げた方が楽じゃないか。遊び暮らしても、國は宮がある限り機能する。

それでも、わたしは民に誇られる王でありたいと思う。民が暮らしやすい國作りをするのが、わたしの義務であると思う。

「もし陛下が逃げたりしたら、必ずぼくが追いかけて捕まえますから。ぼくだけじゃない。シラギさまやカグラさま、マイムさん、キヤラ、カガミさんも治してもらつて一緒に」

あの愉快な仲間と一緒に。

リウヒは声を上げて笑つた。

「ならば兄さまもいることだし、海を渡つて逃げてやるわ。みんなが追いかけてきてくれるなんて、楽しそうじゃないか」

「陛下」

「冗談だよ」

リウヒは振り返り、クスクス笑った。

「ここがわたしの居場所だ」

みんなのいるこの場所。

そしてトモキに近づき、その手を取って歩き始めた。トモキは素直に付いてくる。

「にいちゃん」

やつと言えた。ずつと言いたかった。

案の定、トモキは驚いた顔して固まっている。

その顔に、リウヒはしてやつたり、とクスクス笑いを継続した。トモキもつられたように笑った。

「早く帰ろう。腹が減った」

「そうですね」

「今日の夕餉はなんだろう。菜飯じゃないといいけれど

笑いあう一人は手を繋いで東宮へと向かう。

まるで仲のよい兄妹のように。

太陽はトモキとリウヒの影を濃く地に落として、西に沈みかけていた。

足が闇に沈みこむ。意識も引っ張られるように薄れてゆく。

ああ、そうか。

わたしたちはまた、現代に帰るんだ。

ぼんやりとした意識が戻り、リウヒは朦朧とした頭に手を当てる。かすかな光が遠くに見えて呑気な鳥の鳴き声がうつすら聞こえる。

「動くなよ」

下からくぐもつたシギの声が聞こえた。

「しばらべのままでいい」

「馬鹿」

丁度胸のあたりにあつた、オレンジ頭を抱え込む。

「帰つて来たんだね……」

「うん」

「本当に帰つて来ちゃつたんだ……」

「どうでもいいからわ」

押し潰されたようなしかし苛立つたような声が、さらに下から聞こえた。

「頼むからさつさとぞしてくれないかな……。君たちは殺人級のバカップルだよ」

古代で過ごしていた一年強と、現代も同じ時間の流れだった。

宮廷跡の森から抜け出した三人は、近くの交番に保護を求め、それからあれよあれよという間に警察に連れて行かされたり、病院に閉じ込められたり、泣き叫んでやつてきた両親と再会したりした。

半狂乱で泣き縋る両親に、申し訳なさが募つた。

「こめんね、お父さん、お母さん。心配かけて」

「一体、リウヒたちはどこへ行つていたの？」

「覚えていないんだ」

そう言う事にしておこうと、三人で話し合つたのだ。

「なんかすごくややこしくなりそうじゃねえか」

「もしかしたら、またタイムスリップする人が出るかもしれない」

「全て知らぬ存ぜぬで突つ切ろう」

しかし、身に付けていたのは、一千年前の古代の衣だ。それは取り上げられて、どこかの研究機関へと持つていかれたらしい。

ハヅキの簪だけは死守した。だって、おばあちゃんになつても持つていると約束したもの。

神隠しに会つっていた大学生三人が、古代の衣装を着てひょっこり帰つてきたことを、メディアは大々的に取り上げた。

特にリウヒは、その名もあつてか執拗に追いかけられた。外を出ることもままならない。ひつきりなしに訳の分からぬ電話はかかる。身を寄せている実家の周りには常に報道記者が待ち構えて、出勤する父や買い物に出る母に襲いかかつた。

テレビをつければ、マイクを持ったレポーターがなぜか恐ろしげに実況しながら実家を映している。閉口してすぐに切つた。

「みないほうがいいよ。すつごく面白いけどね」

電話の向こうでカスガが笑つた。

「なんとか知らないけど、小学校の時の文集で書いた将来の夢とか暴露されていたよ。リウヒ、鳥になりたいって書いていたんだね」「さやー！ 過去の汚点！」

「一回しか会つたことのない親戚のおじさんがさ、すごく偉そうにぼくのことを語つていたんだ。もう父さんと母さんと大爆笑でさあ「カスガ、すごいね。わたし、そんな笑い飛ばすなんてできない…」

…

リウヒの精神はすっかり参つてしまつてゐる。父と母に守られてゐるもの、世間の関心が自分に集中してゐる事が恐ろしくてならない。

「大丈夫だよ。じつとしていれば、その内過ぎ去つていくからさ」「うん……ありがとう」

カスガの電話を切つて、すぐにシギにかけた。シギも母親の元にいる。

声が聞きたくなる。声を聞くと会いたくなる。痛切に。

「おれもお前に会いたいよ」

受話器の向こうから、シギの痛々しい声がした。

「あのまま古代で暮らしていた方が良かつたのかもな

「でも、それだったら、わたしの両親に、シギを紹介できぬじやん」

わざと明るい声をだして、リウヒが笑つた。

本当は泣きたかった。こんな大騒ぎ、もう嫌だ。シギに会いたい、

カスガに会いたい。三人で呑気に笑いながら、旅をしたい。濃く青い空の下を。

カスガが聞いたら、またバカップルと連呼されそうな甘い会話をした後、パソコンを立ち上げた。

避けて通っていたハヅキのことを調べようと思つたのである。

シギもカスガも何か隠しているみたいだつた。だけど、ハヅキが何をした人物であつたのか知りたい。それがどんなことであろうとも。その名前は簡単にヒットした。

パソコンの画面を追つていたリウヒの顔が、だんだんと驚愕に変わつてゆく。涙がキーボードを濡らしていくことすら気が付かなかつた。

「嘘でしょう……？」

* * *

「嘘だろ？」「

「嘘じゃねえよ」

「なんで？どうして？あんなにうつとおしいほど、ベタベタしていつたバカップルだったのに……」

「リウヒがハヅキを知つたんだよ」

ケータイの向こうのうろたえた声は、ああ……と納得したように変化した。

シギは煙草に火を付けた。

古代あんなに軽く感じた体調は、二コチンのせいで、また重くだるく沈んでゆく。

「ごめん、別れたい

つつかえながら、嗚咽とともにかかつてき電話にシギは仰天した。会つて話したいと言つと、会いたくないと言つ。

いつも経つてもいられずに、玄関前で張つていたマスクミを蹴散らして、リウヒの実家に走ると、ここにも大量の報道陣が詰めかけて

いた。

「リウヒ！」

呼び鈴を押しても、玄関の戸を叩いても無駄だつた。ただ、沈静化していたマスコミを、突いて騒ぎを大きくしただけだつた。

メールをしても、電話をしても、うんともすんとも言わない。

理由を説明してくれとのメールに、

「わたしがハヅキに会わなければ、あの子はあんなんにならなかつたよね」

とだけ返答が来た。

「それにしたつて、一千年前のことじゃないか」

「おれもそう思うよ。だけどきつとリウヒにとっては一年前のことなんだ」

ぼくもちょっと電話をしてみる、と言つてカスガは電話を切つた。

あんの馬鹿。本当に自分のことしか考えていない。

壁に凭れて、煙を吐く。

ハヅキは義理の妹と実の兄、なにより祖国を売つた大悪人だつた。ジンに渡り、ヤン・チャオをそそのかして、ティエンランに攻めるよう仕向けた。溺愛していた愛姫スズを殺されて、傷心のあまり冷血になつてしまつた新王は、ハヅキの言にのり大軍を率いて小国に攻め入つてくる。

そしてティエンランで最も有名な女王リウヒは、愛する夫シラギを失つたのだ。

ハヅキはその名前よりも、宰相トモキの弟として有名だつた。だから、シギも分からなかつた。酒場で愛おしそうにリウヒの髪を梳き、自分を燃えるような目で睨みつけてきたあの少年が、まさか第一の侵略の原因を作つた男だとは。

きっと退学したハヅキは、惚れていたリウヒを探しにジンに行つたのだろう。そこで何があつてヤン・チャオと縁を結んだのかは諸説あり、はつきりとは分からない。

だが、リウヒがハヅキに出会わなければ、ジンからの旅人とは言わ

なければ、もしかしたら侵略はなかったのかもしれない。

全ては一千年前に終わってしまった。

それがあんの馬鹿。

煙草を灰皿に押しつぶして、シギはため息をついた。
別れるつもりなんてサラサラない。

「好きにするがいい」

自分の声は、藍色のぼんやりした闇間にぼつりと漂った。
「どうせお前は、おれの元に帰ってくる

以前の蜂の巣をつづいたような大報道は、一か月もするとあっさり消えてしまった。

事件や事故は日々起っている。ニュースもワイドショーも世間も、それになぞらって動いてゆく。

現代人はせわしないねえ。

カスガはのんびりと鼻歌を歌いながら、父親の車を運転している。横の助手席にはリウヒがいた。

目の隈が濃く、顔色も悪い。随分とやつれたようだ。ショックは未だに抜けてないらしい。

「どこに行きたい？ 今日はリウヒの行きたい所に連れてつてあげるよ」

「古代にいきたい」

ハキのない、ぼんやりした声だった。

「一千年前に行きたい」

「行つてどうするの？」

「ハヅキに……」

そのまま黙つてしまつた。

「リウヒ、一人で宮廷跡のあの洞窟を捜しに行つていただろうつりウヒは黙つたままだ。

「ぼくも何度か行つたんだよね。でもあの小道を辿つてもあつせり駐車場に出るだけだつたし、洞窟なんか見つからなかつた」

「うん……」

「海にでも行こつか

ワインカーを点滅させ、ハンドルを切りながらカスガが言った。

秋の海は曇り空のせいかどんより沈んで見えた。人影も全くない。

「結局さ、蔵を漁つても、家系図を調べても思わしいものは出でこなかつた」

「やつ」

「シギがまた下宿したって聞いた？」

「うん。メールが来た」

ぼつぼつ話しながら、砂浜に腰を下ろす。

「ぼくは大学に戻ることにしたよ。教授も歓迎してくれたし」

「やう」

「リウヒはどうするの？」

何も考へていないと首を振った。

会話はそこで止まった。心なしか淋しげな波の音だけが響く。

「リウヒさ」

横を向くと、膝に埋もれるようにして、海を眺めている幼馴染を見た。

「君だつて分かっているだらう。歴史が全て真実とは限らないってこと。ハヅキは、もしかしたらジンの王に利用されていたのかもしれない。案外、幸せだつたのかもしれない」

「ヤン・チャオに殺されたことが？」

カスガは口をつぐんだ。

「すこく優しい子だつたんだ」

近くにあつた貝殻を拾つて、いじりながらリウヒが言った。

「小さな頃から疎外感を感じていて、寂しかつたんだよ。もつと話をきいてあげればよかつた」

ぽろぽろと泣き出した。

「わたしが旅にでなければ、あの商家にバイトにいかなければ、あの子に会わなければ、あんなことにはならなかつたのに……。ハヅキを知らない人たちから、あんな糞味噌に書かれることもなかつたのに」

「大丈夫だよ。きっと転生して、どこかで元気に暮らしていくだろ

う

藍色の頭を引き寄せて、慰めるように撫でる。

「会いたいな」

わたしを覚えてくれているかな。

しばらく海を眺めて静かに泣いていたリウヒが、顔を上げた。

「ありがとう、カスガ。少し楽になった」

照れたように泣き笑いの顔になった。

「良かった。スザクでご飯でも食べて帰るつか」

「うん」

ポケットから車のキーを取り出す。それを見た瞬間、リウヒが大声を上げた。

「ああっ！」

「えっ！ 何っ？ どうしたの？」

真っ青になつて、キーを凝視している。

まさか、運転したいとか言い出すんじゃないだろうな。発進したとたんに死ぬぞ、きっと。

「カスガ、カスガ。この、これ、これって……！」

「車のカギだけど」

「じゃなくて、このキー ホルダーって……」

「ああ、うちの親父つて昔から、なんかこういう「デザイン」が好きらしくって。ケータイにもこんな、シャラシャラしたのが付いているんだ」

銀色で三連の大小の輪が連なつており、細長い棒状の飾りと小さな鈴がついている。なんの変哲もない、ただのアクセサリーだ。不満を言えば、シャラシャラしそぎて邪魔で仕方がない。

「えっ？ でもいやいや、ええ？」

「どうしたの、リウヒ。さつきからおかしいよ」

リウヒは小さく震えながら、カスガの腕につかまってキーを見ている。

「あのや……。前世で持っていた物も受け継がれるのかな……」

「それはさすがにないんじやないか。でも、思い入れの深い物なら、生まれ変わつても執着するかもね」

「カスガあ……。わたし、駄目だ……」

今度は、子供のよつにじゅっぴをあげて泣き出した。薄い肩が激しく震える。

「ああ、もう泣きやんだと思つたら、またおお泣きしだして……。

顔が腫れるよ」

雨でも降り出しそうな空の下、カスガは困つきつて、藍色の髪をワシワシといつまでも撫でていた。

* * *

リウヒはアパートの扉の前で、ため息をついて髪をかきあげた。この扉の向こうには、シギがいる。でも怖くて呼び鈴が押せない。別れを告げたのは自分なのだ。半年も前に。エロ河童のことだもの、新しい彼女と一緒に仲良く過ごしているの違いない。

わたしはなんでここに来たのかな。謝りにきたんでしょう。例え許してもらえないでも。

外に面している廊下はひんやりと寒かった。コートの襟を搔き合わせ、数歩下がつて手すりに凭れた。

ハヅキは、カスガの父に生まれ変わっていた。幸せに年をとつて、柔和な顔をしたおじさんは、瞳の色も、髪の毛もハヅキと一緒にだつた。が、記憶までは引き継がれていなかつた。それでいいと思う。カスガの父は、祖国を売つた悪人の前世だつたと知つたら、ショックを受けるに違ひない。だから何も言わなかつた。

「リウヒちゃんが、うちに遊びに来るなんて久しぶりだな」呑気に茶を啜りながら笑つた。

「ゆつくりしていきなさいね」

菓子をだしながらおばさんも笑つた。

わたしは一千年后に帰つてきたのだ。今更、ハヅキの運命を変えることはできない。でも、ハヅキはハヅキなりの葛藤や考えがあつたはずだ。それを知りたいと考えてカスガと共に、大学のゴリラそつくりの教授の下についている。

古代語を読める能力を重宝されて、忙しい日々を送っていた。父と母には、全てを話した。

「一千年前のティエンランに行つていたの」

都で暮らしたこと、三人で旅をしたこと、セイリュウケ原の戦。民の歓声、静かに頭を下げた王女、濃く青かつた空。

「初めてあの王女をすごいと思った。ありがとひ、お父さん、お母さん。わたしにリウヒの名前をつけてくれて」

父と母は信じてくれた。そして泣いた。

扉の向こうから物音が聞こえた。体が硬直する。とりあえず隠れようとした瞬間に、扉が開いた。

「あ……」

銜え煙草をしたシギが、目を見開いてこちらを凝視している。戸つ手に手をかけたまま、動かない。リウヒも動けなかつた。

「お前……」

逃げようとしたリウヒの手を、シギが掴んで乱暴に引き寄せた。

「何で逃げんだよ！」

「『めんなさい、』『めんなさい！』ちょっと心の準備ができなくて、シギが女人と一緒にいたら嫌だし、許してもらえないのも分かつていたし、でもわたしが悪いんだし……！」

パニックになつて喚いていたリウヒの口は、シギの唇で塞がれた。

「ああ、そうだ。お前が悪い」

噛み付くようなキスは、煙草の苦い味がした。

「おれがどんな気持ちだったか、全然考えてなかつただろう」

リウヒを離さずに扉を閉める。

「どれだけ待つたと思っているんだ」

唇を離して、上を向けられた。シギの手は強く真っ直ぐにリウヒを射抜いている。

「いいか、次は無いからな。一度と離さねえぞ」

「『めん……』

息をするのも苦しいほど抱きしめられた。その胸の中ではリウヒは涙

を流した。申し訳なさと、嬉しさがこみあげて心が揺れる。

「本当にごめんね」

二人の足元で、吸いかけの煙草が不貞腐れたように紫煙をくゆらせていた。

* * *

あれから一年が経つた。

シギは大学に戻らずに、つてを頼つて貿易関係の会社に就職した。リウヒはカスガと一緒に、大学院でティエンランの研究をしている。三人の関係は相変わらずだ。所構わずにリウヒといちゃつき、カスガにバカツプルと連呼された。そしてセイリュウケ原や、海へと連れまわされたが、あの悲しい声はもう聞こえなかつた。

そのカスガに彼女が出来た。教授の娘でいつの間にかくつついていたトリウヒが言つた。

「ゴリラの娘はやっぱりゴリラなのか」

「全然。赤毛の可愛い子でさ。なんと高校生

「は、犯罪者……」

「昔はカスガに大切な人ができるなんて耐えられなかつたけど、不可思議なもんだね。すごく嬉しいんだ。大人になつたのかな」

「お前のここには全く成長しないけどな」

ペラリと胸元を覗くとエロ河童と殴られた。

小雨が降る中、シギは小さなビルの階段を上つて、ふと窓ガラスに映る自分を見た。違和感なくなじんでいるスーツ姿に苦笑する。この体に古代の服を着ていた時もあつた、と感慨深く思いながら、黒い扉を開けた。

こじんまりとしたバーの奥のボックス席からリウヒが手を振つている。カスガもいる。

お仕事お疲れ。カスガ久しづりだな。賑やかに挨拶をして席に着い

たときに、リウヒが喜々としながら鞄を探つた。

「ね、知つてる？ 愛姫スズの墓が発見されたの」

「ニュースで見たぞ。骨を元にCGで復元してるんだろう？」

「すでに入手済みであります！ 公開は明後日になると思うけどねー。じゃーん」

ペラつと差し出された写真を何気なく見たシギは、飲んでいたビールを盛大に吹いた。

「ちょっと！ なにするの、汚いな！」

「あまりにも美人で、びっくりしたんじゃないの」

前の席に座っているカスガが笑う。

「こ、こ、こ。これ……！」

「だから、愛姫スズだつて。年の頃は二十歳前後で、身長百五十センチくらい。ちっちゃい子だつたんだね」

「ヤン・チャオが百八十くらいあつたから、大小カツプルだつたんだね」

「なんことは、どうでもいい！ これ、ワカジやねえか！」

リウヒとカスガは、きょとんと顔を見合わせていたが、誰それ？ と同時に首を傾げた。

「おれが最後にバイトしていた所にいた女の子だよ……」

見間違ひなんかじゃない、数か月間、毎日顔を合わしていた。ほとんど呆然として写真を見ながら、シギは話し始めた。雇い主の下で働くものだと言つていた、可愛らしい不思議な少女。リウヒを見つけ出してくれた少女。あの子……殺されたんだ……。

「闇者つて呼ばれる集団がいたんだ。金次第でどんな依頼もこなす連中だつたらしい」

カスガが何故か声を低める。目は血走つて、心なしか鼻が広がつていた。

「ジユズも金持ちそうだつたな」

「ヤン・チャオは、愛姫スズを失つて、自棄になつてハヅキの提案に乗つたんだよな。だけど、その愛姫が闇者だつたら……目的はな

「なんだつたんだ……」

こうしちゃおれないと、カスガは腰を上げた。

「大学に戻る！ お金は立て替えといて！ お休み！」

慌しく出て行つてしまつた。

「お前は行かなくていいのかよ」

「そんなひどい顔しているのに、放つておけないよ」

「どうか。 そんな顔をしているのか、おれは。

「案外、幸せだったかもだよ。 この子」

写真を見ながらウヒが言つた。

「ヤン・チャオに笑つちゃうくらい愛されていてさ。 滅茶苦茶に仲が良かつたみたい。 しつてる？ ジンでは溺愛している彼女とか奥さんのこと、愛姫つていうんだよ。 ヤン・チャオと愛姫スズからきた言葉なんだ」

「……好きな人がいるつていつていたんだ」

その写真は、精巧に出来ているものの、やはり本人の方が数倍可愛い。

「怖くて優しい人だと言つていた。 その人とはどうなつたんだろう

……」

もしかしたら、ワカは仕事で近づいたターゲットを、本気で好きになつてしまつたのかもしれない。 それとも、全て演技だつたのかもしない。 シギには分からぬ。 が、前者であればいいと思う。 つかの間でも幸せならば。

「この子が闇者で、愛姫の死が仕組まれたものだつたら、黒幕はなにが狙いだつたんだろ？ もし、ティエンラン侵略なら、ハヅキだけが原因じゃない……」

しばらく考へるよう、一点を見つめていたリウヒは息を吐いて、気分を切り替えたらしい。 甘えたように身を寄せた。 その肩に手を回す。

「わたし」

「うん」

「歴史つてあそこに行くまでは、ただ年表を覚えればいいものだと思つていた。でも、違うんだね。色々な人たちのドラマが積み重なつてできるものなんだね。調べれば調べるほど面白い。本当は、直接その時代に行つてこの目でみたり、本人にインタビューしたいんだけど。今更になつて、あの時のカスガの気持ちがすこく良く分かる」

「お前の口からそんな言葉がでるとは、思つてもいなかつたよ」
クスクスと一人は笑つた。

「明日さ、どつか行きたいところあるか」

絡まる指を優しく愛撫しながら聞いた。久しぶりに一人で過ごす休日だ。渡すものもある。

「カスガ曰くの、バカッブルコースがいいな」
「了解」

薄暗い店の片隅で、蕩けるようなキスを交わす。うつすらとかかるジャズや、グラスの音や、人々の会話を遠くに聞きながら。

最終章 始まりの物語

遠く眼下に広がる街並みを眺めながら、リウヒは満足げに息を吐いた。

やっぱり、わたしはこここの風景が大好きだ。

カスガ曰くのバカツフルコースとは、シギの車で海にゆき、その後宮廷跡にゆくことだつた。初めて三人で、ここに来た時と同じルートだ。シギは海にゆくことを好んだし、リウヒはここから見渡す景色が好きだつた。

あの切ない声は、もう聞こえない。王女の声だつたとしたら、あの時、どんなにつらく悲しい思いをしたのだろうか。

「冬の景色もいいもんだな」

後ろからリウヒを抱きしめているシギが、柔らかい声で言つた。

「雪は降らないけど」

回されている腕に手をかけながら、リウヒも応えた。

「空気が澄んで、山がはっきり見えるね」

「あそことは比べ物にならないけどな」

古代。排気ガスも温暖化もなかつた、あの美しくのんびりした世界。

「帰ってきた時さあ、電気がいきなりついたらびっくりしなかつた

? 眯しつ！ みたいな」

「したした。ガスで火が付くのも、感動していた」

「ねえ、シギ。また古代に行きたい?」

「そうだな」

腕が離れて、くるりと体を回された。シギの顔が、若干緊張している。どうしたんだろう。

「おれは、お前が一緒なら、どこでもいい」

そのまま両手を取られた。

「お前に横についてほしい」

自分の白い手を、シギの大きくてゴシゴシした指の腹が撫でている。

「リウヒを愛していいんだ」

ポケットから小箱を取り出した。包むよつ、手に握りせる。

「おれと結婚してくれ」

リウヒはほんやりとそれを見ているだけだった。頭は真っ白だった。

「返事をしろ、馬鹿。ハイかイエスか、どっちだ」

照れて苛立ったようにシギが言つ。

「それって、選択の余地ないじゃん……」

声が震えているのが分かつた。涙が頬を伝つたのも分かつた。

「シギ……」

「ん?」「

節くれた指が華奢な指を撫でる。

「シギ」

「なんだよ

白い手を茶色い指の腹が這いつてゆく。

「シギ!」

リウヒがいきなりシギに抱きついた。不意を突かれて、シギはよろめいた。

「ハイに決まっているでしょーーー。びっくりさせないでよーーー。ああ、もう、嬉しくて心臓が止まるかと思つた……ーーー」

「心臓止まるかと思ったのは、おれの方だ! いきなり飛び付くんじゃねえ!」

顔を掴まれて乱暴に唇が重なつた。シギの顔が赤い。きっと自分の顔も赤いだろう。

「今度の休みに、リウヒんちに行くからな」

「いいよ。お父さんとお母さん、シギのこと気に入っているから。わたしもジョンさんに改めて挨拶したいな」

気の若いシギの母親は、自分のことを名前で呼ばれないと、『機嫌を損ねてしまう。

「まあ、お前の料理の腕は、期待しないから」

「それは大丈夫。わたくしと結婚したら、もれなくカスガがついてく

るし」

「カスガの彼女はどうすんだよ」

「それはそれ。これはこれ」

で、一生、バカツプルつていわれるのか？

二人は声を上げて笑つた。

箱を開けると、小さなダイヤの粒がきらりと光つた。シンプルで仰々しくない、全くリウヒ好みの指輪だった。節くれた指がそれを取つて、自分の白い手にはめてくれた。

「ありがとう。とってもきれい……」

シギの腕の中で体を回転させて、左手を掲げる。空が夕暮れ時に染まつてきたことに気が付いた。

あの濃く青い空をもう一回でいいからみたいな。柔らかい朝の陽ざしを感じたい。商家の美しい庭の片隅で、ハヅキや子供たちと物語を読んでいた時のような。

そこまで思い出して、リウヒは小さく笑つた。

「どうしたんだよ」

「ベビーシッターをしていた商家でね、よく物語を読んでいたの。あの可愛い子供たちと」

「うん」

「その中に、わたしたちみたいだなあ、って思つたお話があつたの」「どんな話だつたんだ」

「あのね……」

紅色の空を、螢のような光を瞬かせた飛行機が飛んでゆく。明かりが付き始めた街の中を縫いながら電車が走つてゐる。遠くでクラクションの音がした。

その中を、リウヒの低く澄んだ声が響く。

「洞窟を抜けるとそこは異国でした」

最終章 始まりの物語（後書き）

お気に入りに入れた下さった方々、ポイントつけてくださった方々、そして今まで読んでくださった方々、厚く御礼申し上げます。

大きな謎が継続したままでありますが、今後の展開で解決できると期待したい……。このお話は書いているときがそりやもう楽しくて楽しくて、ティエンランシリーズの中でも一番気に入っているお話でもあります。

改めてもう一度御礼を。

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9397r/>

時空の果てへ

2011年5月10日12時53分発行